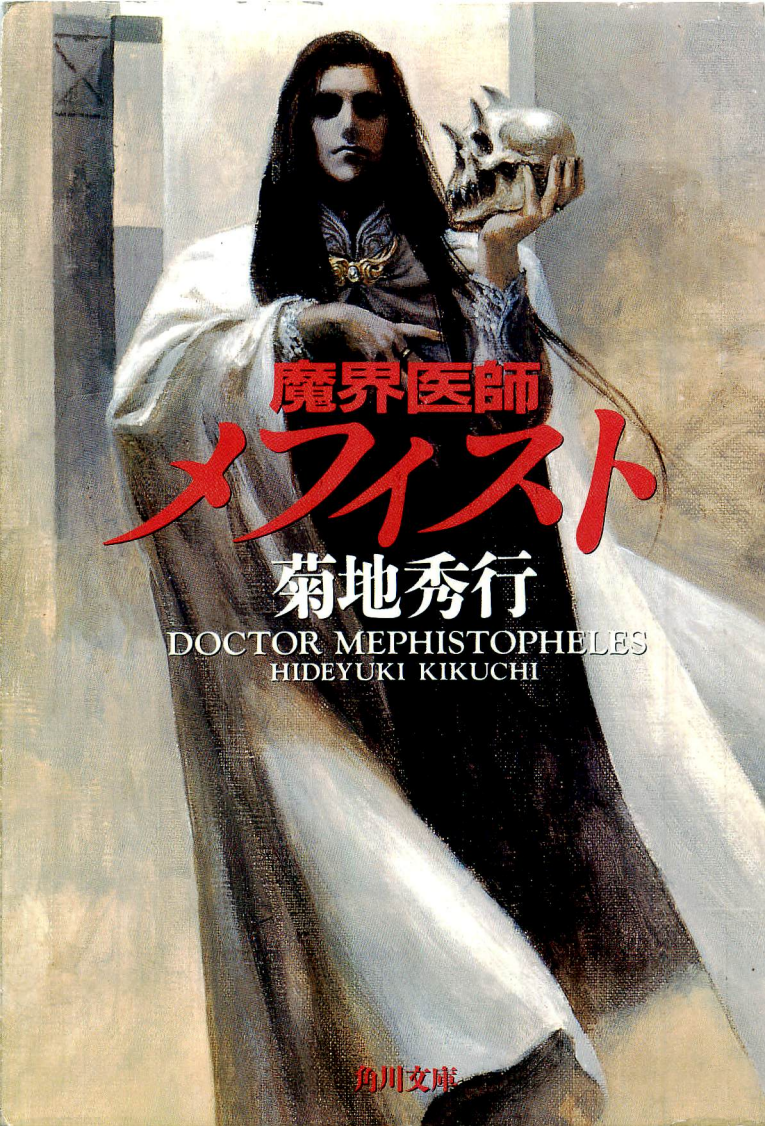

魔界医師
メフィスト
菊地秀行
DOCTOR MEPHISTOPHELES
HIDEYUKI KIKUCHI
角川文庫

魔界医師メフィスト

菊地秀行



角川文庫 8816

目次

〈魔カルテA〉新人看護婦　五
〈魔カルテB〉街へ来し者　四八
〈魔カルテC〉メフィスト病院の妖事　九八
〈魔カルテD〉追いし者　一五六
〈魔カルテE〉幸運な刑事　二〇九
〈魔カルテF〉鬼女の舞う夜　二四〇
〈魔カルテG〉弔花淫殺　二七五
解説　朝松健　三一八

〈魔カルテA〉 新人看護婦

1

広場の一角で声が湧いた。
男と女の声である。何名分も固まって風に乗った。
青い風——夕暮れどきだった。
広場のあちこちで、紗のような砂煙があがる。
西の隅にある共同炊事場で合成米をといでいた主婦や、歓談用の椅子席で茶飲み話に興じていた老人たちが、ちらりと声の方へ視線をとばしたものの、すぐもとの作業に戻った。
この土地で、口論など呼吸するようなものだ。

殴り合いでなんとか注目を集め、刃物や飛び道具持っての殺し合いに到って、ようやくご近所の介入がはじまる。——武器をかざして「出ておいき、みんなの迷惑だよ」と叫ぶのだ。

この土地——新宿区河田町〈難民居住区〉。ひときわ高い丘陵にそびえる黒い建物——フジTVが睥睨する一角だ。

〈魔震〉後、真っ先に救難キャンプが設けられたのも、半年後、名称通りのプレハブ住宅が軒を連ねたのも、その倒壊ぶりがあまりに徹底し、文字通り、何ひとつ残らぬ平坦な荒野を形成したためである。

だが、現在の住民たちは、正規の手続きを経た入居者とは異なる。

政府に許可された人々はすべて、入居後半年で逃亡してしまった。出て行ったのではない。逃げ出したのである。

現在、百戸の文化住宅に居住する人々の総数は六百七十名。ひとり残らず浮浪者＝難民と呼ばれる。そして、追いたてる者はいない。ここが、ある指定区域だからだ。

どの〈新宿ガイド・マップ〉にも載っている三つの名前——

新宿中央公園
新宿御苑
河田町

すなわち――〈最高危険地帯（モースト・デンジャラス・ゾーン）〉
これからはじまる物語の開幕に、まことふさわしい舞台であった。

男と女は声のすぐ後でやってきた。
髪ふり乱した中年の女を、筋骨たくましいこれも中年男と腰の曲がった老婆、少し遅れて、十七、八歳の娘が追いかけてきたのである。
家族らしかった。
中年女は、胸の中に薄いおくるみに包んだ赤ん坊を抱いていた。
怒声と激しい動きの只中にあって、泣き声ひとつあげないのが不思議だった。
広場へ入ったところで、ささやかな追跡行は終幕した。
両手を広げて立ち塞がる男の前で、女は立ち往生し、救いを求めるように周囲を見廻した。
その肩を皺だらけの指が摑んだ。
「俊輔をお寄越し。すぐ、楽にしたげるよ」
老婆はもう一方の手を女の前に突き出して振った。
人さし指と中指の間に、茶色の紙包みがはさまっている。
「これ一服だよ。これだけで、何の苦痛もなくなるんだ」

「久子――それが俊輔のためだ」
男がなだめようと肩に触れる手を、女は身をよじって撥ねた。
「まだ助かるわよ、この子は。――お医者さんを呼んだんだから！」
「医者にも色々あらあな！」
男が唾をとばした。怒りより恐怖に歪んだ表情をしていた。
「よりによって、あんな化け物……」
「あの医師しかいないのよ！」
女は我を忘れて身悶えした。それでも、おくるみを抱いた腕に、必要以上の力はかかっていない。
「どの医師も見放して、この上、あたしたちまで見放そうっていうの？　この子は――この子は、まだ生まれて一年にもなっていないのよ。何て言い訳しながら首を締めるのよ？」
「薬だよ！」
男はもう一度女の肩を摑もうとして、もう一度弾きとばされた。歯を剝き出したが、女はびくともしなかった。
「痛みも苦しみもない。一秒とかからず楽になれるんだ。そうしないでいたら――おまえ、俊輔は声も出ねえんだぞ」

「だから、お医者を呼んだわ！」
「何てことをしたんだい！」
背後の老婆が前へ廻って叫んだ。
「あの医者の噂を聞いたことはないのかね？　そりゃ、治してくれるだろうよ。死んだって生き返らせる男さ。でも、その代償に何を求めるのか……」
老婆の声は落ちた。恐怖が落としたのである。女はその隙を逃さなかった。
「みんな噂よ。あの男がお金のない患者に何を要求するか、その耳で聴いたの？　その眼で見たの、お義母さん？　たとえ、何を求められたって、十か月で死ぬよりはましよ。それも眼も見えず、口もきけず、何ひとつ楽しいことも知らなくて、あたしたちだって――こんなあたしたちだって、今まで少しはいい事があったのよ」
叩きつけるような気迫と言葉に反対派は沈黙した。男が口を開いたのは、数秒後のことだった。
「……世の中にはな、おめえ、世の中にはな、死んだ方がましって生き方があるんだ」
「いやよ！」
女はおくるみを抱き締めた。
舞い上がった砂ぼこりが一同を包み、粗い砂粒を汗ばんだ首や髪の毛にこびりつかせた。
それが晴れたとき、

「おれにくれや」

横手から意外に近い声がした。頭に血が昇っている一同がふり向いたのは、それが、何とも陰惨で、ある種の欲望にみちていたからである。

全員がふり向いた。

「何だ、おまえ?」

と男――女の夫が訊いた。

新参者は、さっきまで、歓談用の椅子のひとつにかけていた男であった。三十代後半、中肉中背といえば簡単だが、粗野な顔つきに見るものの眉をひそめさせる淫らな表情が揺れていた。

見かけたことのない顔だが、ひっきりなしに住人の変化するここでは、昨日の隣人の家に、今日は別の顔触れが暮らしていても、誰も怪しまない。この男もそんなひとりであったろう。

「おれにくれよ」

と男はくり返した。

汚物を眺めるような眼差しを浴びせ、夫と妻はお互いの問題に視線を戻した。

「薬だよ」

老婆が歯を剝き出した。

「駄目よ、駄目。医師が来るまで待って！」

女がおくるみを抱えてその場へうずくまった。

このとき、横から口を出した男にある変化が生じた。

せわしなく痙攣をつづけていた唇の端から、涎の筋が滑り落ちると同時に、両眼が凄まじいかがやきを放ちはじめたのだ。

誰も気がつかなかった。そのまま時間がたてば、数秒後には、形容し難い凄惨な場面が展開したことであろう。

それは、少し先に延びた。

風の吹き上げた砂塵が延ばしたのである。

茶色の塊りは人々の顔をしかめさせつつ、通りに面した広場の門へと走った。

それが二つに分かれても誰も気がつかなかった。広場中の人間が見ようともしなかった。

それなのに——。

畏怖したごとく裂け散った砂塵の彼方に、忽然と白い影法師が浮かび上がったとき、全員がそちらを向いたのである。

椅子にかけていた老人のひとりは、黄昏どきにやってくる美しい死神の伝説を憶い出した。

もうひとりの老婆は、蒼茫たる空気の何処かから現われる白い天使の言い伝えに気づい

た。
どちらも正しかった。
どちらも間違っていた。
彼は医師だったのだから。
美しい、としか形容しようのない顔を、広場のあちこちから湧き上がったどよめきが打った。

ドクター・メフィスト
魔界医師

その名の意味するものを、どよめきに秘められた怖れと讃辞の理由を、新宿の住人たちは知っている。
蒼茫のとき——逢魔がとき。
生と死のはざまに苦悶する人々のもとへその医師が訪れるには、まことふさわしい時刻であった。
白い影は足を止めずに進んだ。
一組の家族も、ひとりの新参者も動かなかった。

白い影の足元から延びた黒影は、彼らの足元に達していた。靴底はその虜囚になっていたのかもしれなかった。

月の美しさが一礼した。

純白のケープの背で、腰までかかる髪がさわと波打った。

「ドクター・メフィスト、お招きによって参上した」

と医師は言った。

水底にひっそりと沈む鋼を思わせる声であった。

荒木町にたむろする盲目の吟遊詩人は、声の主をこう形容した。

人にして人にあらず

と。

最初に反応したのは、夫だった。

「間違いだよ——間違いだったんだ。もう話はついた。帰ってくれ」

瀕死の病人だけが洩らしそうなかすれ声であった。

医師は彼を見ようともしなかった。

黒い宝石のような瞳は、女の胸に抱いた薄布の塊りのみを見つめていた。

「ドクター……メフィスト……この子を……うちの子を……」

恐怖に哀願の絡みついた女の声に、医師はうなずいた。

「およし」
老婆の声が喉の奥で鳴った。
女はおくるみを差し出した。
新参者の眼が再び血光を放ったが、何もできなかった。
「治療代をいただかねばならんが」
医師はやさしく言った。
女にではなく——おくるみの主に。
「何でも、何でもします。お金なら死ぬまで働いて。——それでなければ、あたしの身体の何処でも持っていって！」
「治すのは患者だ」
ささやくような声は慈愛に充ちていた。
「支払いも患者がしなくてはならん」
すい、とおくるみが引かれた。
女は誤ちに気づいた。夫と義母が正しかったのだ。
網膜に結んだ美しい像はそのまま、脳に灼きついた医師の姿は、正反対の形をとっていた。
「何を……何を払わせるつもりなの……？」

「それは、患者の決めることだ」
「教えて……何を……？」
答えは、嗄れた声の形でやってきた。
「――魂じゃ」
老婆は全身をわななかせ、右手の薬をふった。
「生命の代償は魂で支払うのさ。ほら――何てったっけ、外国のえらい学者先生のように――」
女は背を向けた。
義母の言葉を嘘とは思わせぬものが眼前の医師にはあった。
最後の望みは断たれたのだ。
「どうすれば――どうすればいいの？」
「これだよ」
と老婆は紙包みをふった。
「あきらめろよ、なあ」
と夫は言った。
ただひとり――台詞無しの登場人物の声が響いたのはこのときだ。
「ちがうわ、見て！」

少し離れたところにいた娘が伸ばした指は、おくるみをさしていた。
生じた異常にはじめて気づき、女は眼を剝いた。
干からびた棒きれのようなものが、布から突き出ていた。
手であった。
指が弱々しく女のブラウスを摑み、筋みたいな筋肉がふくらむと、ひねこびた果実のような頭が現われた。
一本の髪の毛もない。
血の気を失い、そのくせ熱でひび割れた唇が糸のような細い声を吐き出した。
「わかってるのよ、俊輔にはわかってるの。自分がどうなるのか。決めさせなさい、この子に決めさせてやって。この子の生命なのよ」
茫然とする女の手から、娘がおくるみを受け取り、そっと地面へ置いた。
布がはだけ、俊輔は全身を現わした。
うつ伏せの身体はミイラを思わせた。何処を動かしても肉が剝がれ、骨格は音もなく砕けそうだった。
その手が前へ伸びた。
指が布に食いこみ、幼児の身体は小さく前進した。
「もう、やめろ！」

堪りかねて抱き上げようとした男を、娘の叫びが止めた。
「触れないで、父さん。俊輔の生命なのよ！」
娘は泣いていた。
女も老婆も涙を流していた。
人々の顔を風が打ち、幼児はまた進んだ。生命を求めて伸びるか細い手の前に、求めるものが立っていた。
男ですら溜息を洩らすような繊手が舞い降り、幼児は白い胸の中に移っていた。
「泣いてる……」
娘は喉をつまらせ、二度咳払いしてから言った。
「安心したのよ、やっと助けてくれる人に会えたから……」
腫れぼったい瞼の隅からこぼれる光の粒を、美しい指がやさしく拭い取った。
「君は私を選んだ」
蒼い黄昏に伝わる声を、人々は黙然と聴いた。
遠い昔、死海である人の言葉を耳にした漁師たちのように、疲れ切った、和やかな表情で。
「我が門を叩くもの、死の淵より還らん。——我が患者よ、ドクター・メフィストは、私を選んだものを決して殺しはしない」

そして、魔界医師は、茫然と立ちすくむ家族の方を向くと、その眼を少女に注ぎ、
「三日後の現在、引き取りに来なさい」
と告げて背を向けた。
風に翻るケープが薄闇に溶けてから、老婆が膝をつき、紙包みを握りしめて泣きはじめた。

2

黒塗りのリムジンまであと数歩という舗道の上で、メフィストは足を止めた。
いま、曲がったばかりの鉄条網の角から、ひとりの男が姿を見せたのを、ふり向きもせずに見抜いたのである。
メフィストの行動の意味をそれと知って、男も立ち止まった。
「さっき――いたな」
メフィストの声は以前と変わらず、しかし、男はぞくりと身を震わせた。
広場のやりとりで唯一部外者だった男である。
「この子より、おまえの方が興味あるクランケだ。治療が望みか？　いやでもして差し上げよう」

「子供はどうでもいい」
男は呻くように言った。声は濡れていた。官能といってもいい響きであった。
両眼はまたも赤光を放ちつつあった。
「おれはおまえが欲しい。噂にゃ聞いていたが、これほど美しい男が世の中にいるとは思わなかった。さぞや、うまかろう。尾けて来た甲斐があった」
「尾けて来た？」
ふり向きもせず、胸に抱いた患者をやさしく見下ろし、メフィストは微笑した。
どのような力が働いたのか、息も絶え絶えだった幼児は、安らかな寝息をたてている。
「おまえが私を追ってきたのではない。私が招いたのだ。この街でも珍しいサンプル。手ずからとっくりと調べてくれる」
微笑が変わった。
男の眼に溜まった光が見る見る褪せていく。
幼児の身体が痙攣し、呼吸が停止した。
ただひとつの笑みにこめられた精神の仕業であった。
男が吠えた。
人間の喉が出す声音ではなかった。
革靴が地を蹴った。

二歩目は踏まなかった。

身体は軽々と宙に浮き、男はまるで泳ぐような奇怪な動きで空気を掻きながら、メフィストの頭上に迫ったのである。そのくせ、音も無く、微風すら生じない。

メフィストが微動だにしないのも無理からぬ、軽捷怪異な飛行であった。

その首めがけて、男は空中で手をふった。魚取りの名人が、素手で水中の獲物をすくい上げる優美で迅速な動き。

だが、男の指は奇怪に節くれだち、爪は鎌のごとき鋭さと鷹の長さを備えていた。

次の瞬間、メフィストの首はつけ根からもぎ取られ、噴き出す鮮血が舗道を妖しく染め抜いていたであろう。

メフィストの首以外であったなら。

確かに頭部をすくい取ったはずの右手が何の感触もなく空を切り、驚きに顔を歪めた男の腹を、不可思議な刺激が貫いたのである。

痛みではなかった。その瞬間、男の全身からあらゆる意欲が消失したのである。

いかなる卓越の能力を持とうとも、それを発揮する意欲が発動しない限り持ち腐れと呼ばれる。生きる目的を失い、食物を摂取もせずに餓死する健全な肉体の所有者が在るごとく、男は飛びつづける気も、戦う意欲も喪失した。

ひょろひょろと数メートルを滑空し、鉄条網の方へ向かったのも、そうしようと欲した

のではなく、精神の支配から解放された飛翔能力の成せる技であった。

スパークが閃いた。

住宅地の外縁を包む鉄条網は、ただの棘つきの鋼線ではなかった。絶えず人間を求める妖物を排除すべく、五十万ボルトの高圧電流を通じた鋼の糸であった。

男の毛髪が逆立ち、ピンポン玉のような眼球が飛び出す。

これだけは神経の作用によって、顔面の筋肉は苦痛の形に歪んだ。

たっぷりと電撃の洗礼を受けてから地上へ落ちた身体は、紫煙と肉の灼ける匂いを濃厚に立ち昇らせていた。

運転席のドアが黒蝶の羽根のごとく開いて、黒帽、黒スーツの運転手が現われたのはこのときであった。

青白い、死人のような肌に、闇色のサングラスは無機物の領分を越えた生々しい印象を与えていた。

「いかがとりはからいましょう？」

抑揚のない声も死人のようであった。

「病院へ連れていく。助手席に乗せろ」

「承知いたしました」

「死んだと思うか？」

「お診たては先生のご専門で」
メフィストは白い笑顔を見せた。
運転手は一礼し、なおも煙を上げる死体に近づこうとした。
死体が上半身を起こしたとき、その足も止まった。
いかなる猛獣といえど即死は免れない電撃の洗礼を受けて、男は上体のみが両腕を支えに、ふらつきながらも二本の足で立った。
「ほう。さすがは〈魔界都市〉の住人」
感心したようにつぶやく運転手の声が、新しい死の宣告となった。
直立が最後の力を失ったのか、メフィストの与えた絶望の刺激が甦ったのか、前へ出ようとして、男は両膝を舗道へ打ちつけた。
剝がれた。
肉が。
乾燥し切った粘土細工がわずかな衝撃でこぼれ落ちるように、男の全身は肉ばかりか顔の皮膚までが外側へ弾け、衣類もろとも地上へ崩れ落ちたのである。
時を同じくして、内臓をまといつけた骨格もまた崩れ、地上で固い音をたてた。
「天晴れな死に様だな」
ますます蒼味を増した路の上で、メフィストは妖然とつぶやいた。

「灰を集めろ」

運転手はうなずき、黄褐色の汚れのかたわらにひざまずくと、上衣の内ポケットから細長いガラスの円筒を取り出して、灰に近づけた。

それから、残った手も灰の中に突っこみ、何かを押すような動作をしてから、円筒に灰を満たし、足早に戻ってきた。

「どうした？」

とメフィストが訊いた。

「歯が残っておりました。私に噛みつこうとしたので、処分いたしました」

「私をうまそうだと言った。――大した執念だな。――行くぞ」

一礼し、運転手は何事もなかったように車へ戻った。

後部座席のドアが開き、その中へ入る前に、ドクター・メフィストは腕の中の患者へ視線を落とした。

さっき、メフィストの気を感知して息絶えたはずの幼児は、再びたしかな寝息をたてていた。

メフィスト病院の所在地は、かつての新宿区役所跡である。

跡といっても、〈魔震〉で半ば倒壊した建物を補修してあるため、外側だけは区役所の面影をそのまま留めている。

営業時間は二十四時間フル・タイム。年中無休。地上十階、地下十階の収容人員は二千人を越えるが、街が街なのでベッドが空くことはほとんどない。

地下駐車場に待機していた看護人たちに幼児を渡し、治療法を伝えてから、メフィストは地下三階の院長室へ降りた。

婦長が同行した。各科の看護婦・看護人を統括する中年の女性である。

能面と綽名される冷たい美貌とは裏腹に、銀縁の眼鏡の奥に光る眼は、風邪をひいて咳こむ赤ん坊から、全身を膿み爛れさせたサイボーグに対してまで限りなくやさしい。

院長室へ着く間に婦長が伝えたのは、新人看護婦の採用についてだった。

「先生が出かけられてすぐ、奈々月先生の紹介状を持って参上いたしました。名は木村道子、二十歳です。看護業務につかせましたが、問題はないようです」

「ほう」

メフィストの眼に表情が動いた。

この、メフィスト病院の実務担当指揮官ともいうべき女性に、問題なしと言わせることがどのような意味を持っているか、これでわかる。

「奈々月先生に確かめたのか？」

「はい。身元は確かなようです。履歴カードはコンピュータからお読み取り下さい」
「承知した。交替のとき院長室へ寄越したまえ。それと――これを分析課へ廻してくれ。多分、素粒子限定器が必要になるだろう」
手渡されたガラス管をちらりと一瞥し、婦長はかるく頭を下げた。
憑依虫に取り憑かれた国連のVIPが極秘入院したとき、指示に従わず外出しかけたと容赦なく平手打ちをかませ、止めに入ったボディガードと日本の外務大臣を素手で半殺しにした女だが、院長の指令に異議を申し立てたことは一度もない。
「来客はあったか？」
「ひとり。新宿署の刑事で、朽葉さんとおっしゃる方です。所属は〈殺人課〉。先生が戻られた頃、またお見えになるそうです」
院長室のドアの前で婦長と別れ、メフィストは室内に入った。
広大なホールを思わせる空間が開いていた。
ここを院長室と呼ばせるものは、遥か奥に設置された巨大なデスクのみであった。
ドアからデスクへ、銀色の光沢を放つ通路がまっすぐに走っている。
実際の長さは二十メートルほどだろうが、ドアのところで眼を凝らすと、百メートルにも、数キロほどにも離れて見えるのだ。
しかも、通路の両側には、金属とも鉱物ともつかぬ板状の物質が、三次元世界で考え得

るあらゆる方角から、あるいは方角へ、何ら美的芸術的整然さもなく突き出し、重なり合い、不恰好でそのくせ奇妙な視覚的幻覚性を備えたオブジェを構成しているのだった。

部屋に入った途端、メフィストの影は消えた。何処からともなく溢れる光が、あらゆる方角から均質の強さと光度で放射されている証明であった。

デスクまでの長い旅を終えて豪華な肘掛け椅子にもたれかかると、メフィストは卓上インフォメーション・センターのスイッチを入れ、外科病棟の宮路博士を、と告げた。

「宮路です」

応答は一秒できた。外科の最高責任者である。

「私が運んだ子供の経過はどうだ?」

俊輔を看護人に手渡してから、五分とたっていない。

「手術は完了しました。術後の経過も良好です」

荘重な声は、それだけで聴くものを落ちつかせる包容力に溢れていた。

「両親は三日後に引き取りに来るが」

「いま来ても退院できます」

「結構。後はおまかせする」

承知いたしました、の声をきいて、メフィストは通信を外部用に切り換えた。

「奈々月医院です」

と、空中に現われた看護婦らしい女が微笑した。三次元ホログラフィである。メフィストに気づいて、茫然と立ちつくす。向こうにもスクリーンがあるのだ。

「こちら、メフィストだ。先生をお願いする」

看護婦はぼんやりとうなずいた。メフィストの顔を心の準備なしで凝視したものの宿命だ。

すぐに画像が変わった。

医者というよりラグビーのフルバックの方が似つかわしい容貌が破顔した。

「久しぶりだな、色男。うちのもと看護婦を追い返したら承知せんぞ」

「君のところも人手不足のはずだ。なぜ、転職させた？」

メフィストは静かに訊いた。

「ああ。――木村くんの希望だ」

「私の病院へか？」

「院長さんにひと目逢いたいとよ。おまえのとこへ押しかける患者、九割は健康だって噂があるぞ」

メフィストの指輪がきらめき、奈々月医師の像に重なって、コンピュータ処理を行った道子の履歴が現われる。

ちらりと眼を走らせ、

「中々、成績優秀らしいが、私のところの患者より、普通の病人や怪我人の方が向いているようだ」

「もっと苦しんでいる人に会いたいとさ。ここ二、三日、観光用の〈新宿ガイド〉を見てるな、と思ったら、だしぬけに辞表が来た。極力、慰留したんだが、男は顔だとさ」

奈々月医師はそっくり返って笑った。メフィストの仏頂面に気づき、すぐに咳払いして、

「とにかく、看護婦としての実力と誠意は保証する。正直言って、手放すのは惜しいだけではなく痛いくらいなのだ。ま、ここは静かにメフィスト病院のさらなる隆盛を祈らせてもらおう」

「趣味と性癖の欄が抜けているぞ」

ラグビー医師は、ちょっと躊躇した。すぐに——

「無いのだ。強いていえば仕事だな」

「休日はどう過ごしていた？」

「休みの日はほとんど外出だな。そうか、それで無趣味というのもおかしいな」

「上司の怠慢だぞ」

「つまらんことに眼くじら立てるんじゃねえよ」

奈々月医師は、ようやく顔にふさわしい声を出した。こう条件が揃うと、白衣を着て病院にいても、医者を殺してすり換わったやくざだと、警察に訴えられそうだ。

「とにかく、滅多にいねえ貴重な人材であることに変わりはねえんだ。ちいと美人だから、最初は同僚の反感ぐらい買うかもしれんが、なに、すぐ溶けこんじまうさ。――それじゃな」

「最後にひとつだ。――寮かアパートか？」

「住まいの話か？――アパートだよ。なんでそんなことを訊く？　人間は他人に見えないところで真の姿を見せるってのか？」

「達者でな」

メフィストはスイッチをオフにした。

椅子の背によりかかったとき、かすかな音をたてて、I（インフォメーション・センター）C のライトが点滅した。

「どうした？」

「婦長です。さっきお話しした刑事さんが見えました」

「お通ししなさい」

そう告げたとき、別のライトが光った。

メフィストの指輪がきらめき、空中に、よれよれの麻背広を着た男の姿が出現した。

年の頃は三十半ば過ぎ。無精髭（ぶしょうひげ）に覆われた口元に締まりはなく、厚ぼったい瞼（まぶた）の奥の眼も、死魚みたいに生気がない。

およそ人好きのしないタイプの男だった。警察手帳を出しても、誰（だれ）ひとり刑事とは信じ

ないだろう。

「朽葉さんですかな？」

電子の構成した刑事は、ぎょっとして周囲を見廻した。あわててネクタイをなおし、

「左様で」

眠そうな声だった。

「お早いお着きですな。案内役もいないようだが」

朽葉は顎鬚を撫でた。

「受付けの姐ちゃ――いや、看護婦さんが、院長先生はお忙しいなんて勿体ぶるもんで、こりゃ、自分でお邪魔した方が早いかな、と」

「院長室の位置は配置図に載っていないはずだが」

「はっは。うちの従姉の友だちの子供が、一昨年、こちらへ入院しましてね。十歳の餓鬼のくせに新宿焼酎の呑みすぎで。――病院の中をさんざん探検しまくったんですわ」

「人は見かけによりませんな」

「は？」

メフィストはドアを開いた。

悪びれた風もなく、刑事は入ってきて、周りを見廻した。

「変わった部屋ですなあ。なんか知らんが、みんな歪んで見える。空間が曲がっとるんで

すかな。――あ、新宿警察署、殺人課の朽葉です」
十メートルの距離も考慮せず、右手に黒革の手帳がきらめいた。
「御用件は何でしょう?」
片手で、こちらへと差し招きながらメフィストは訊いた。
朽葉は動かない。
お互いの声が、普通にしゃべるだけですぐそばから聴こえるのを、訝しんでいる風でもなかった。
「実は、人を探しとります。で、先生のお力をお借りしたい、と」
「それは――そちらが本職だ」
メフィストは呆れた申し出に、呆れた風もなく言った。
「どうしても、とおっしゃるなら、腕のいい人探し屋を紹介しますが。副業だが、実力は新宿一です」
「――病気持ちなんで」
と朽葉刑事は言った。
メフィストの眼が薄く光った。

3

「まだ見つからねえのか!?」

禿頭のつややかな表面に、ぴっ、と青い筋がミミズ腫れのように這った。

「ま、待って下さい、兄貴！」

紅色のポロシャツを着た男が右手から駆け寄り、木箱が背広をまとったようなごつい肩を押さえた。

「最後に荒木町のソープへ入ったのは確認してます。組のもンだけじゃなく、情報屋も総動員中で。じきに足取りは摑めます。じきに――」

巨漢の肩を押さえたままの姿勢で、ポロシャツ姿は吹っとび、壁に激突した。

合板の建材が激しく震え、壁にかかっている写真入りの額がポロシャツの頭に落ちて、ガラスの破片を白く散らせた。

床に転がった額の中の、和服姿の男の足元には「鬼堂会会長・鬼沢右門」とプリントされていた。

大久保二丁目に建つ暴力団の事務所である。表向きの職種は不動産・風俗営業のチェーン店経営――典型的な看板事業といえる。

兄貴と呼ばれる巨漢は、事務局長の実保である。百二十キロの体重を利しての喧嘩なら、新宿の悪鬼〈双頭犬〉すら素手で引き裂くという。

部屋の中にはもう二名の男がいた。

デスクをはさんだ実保の前に立ちすくみ、うつ向いた顔つきは立派なやくざだ。組員である。

「じき、だあ？」

実保は両手を樫製のデスクの上で握りしめた。

「じきてな、半月のこっちゃねえんだよ。それを親父に言うおれの身にもなってみろ。たかだか逃げ出した組員ひとり、この狭い街ん中で半月もかけて見つからねえときた日にゃ、後は何をやっても信用されなくなっちまう。——この、役立たずどもがあ」

巨漢の眉がぐい、と持ち上がった。

眼球が反転し、白眼を剝く。

部屋の中にみなぎる力に、空気が変質し、二人の男は腹を押さえて呻いた。

「兄貴——いけねえ！」

ポロシャツが片手を伸ばして叫んだ。

「——どもがあ！」

巨漢は絶叫した。次の瞬間生じた惨劇の原因がそこにあるような、悽愴な咆哮であった。

音はしなかった。
二人のうち、実保から向かって右側のひとりが呻いただけである。小さな、哀しげな呻きだった。何もかも終わりだ、という風に。
男の腹は柘榴みたいにはぜた。
床の上に重い、濡れたものが音をたてて広がる。
もうひとりが、腹を押さえたまま、ヒイ、と言った。
実保の頭部から首にかけて、青い血管が蜘蛛の巣みたいに触手を広げていた。
「兄貴――」
いつの間にか起き上がっていたポロシャツが巨漢の耳元でささやいた。
「札幌は、いま、いい季節だぜ。北大のポプラが緑の葉をいっぱいつけて、風に光ってるんだ」
実保は眼をしばたたいた。
「札幌か」
と言った。
「そうだ。北大とポプラ並木だよ。緑の葉と風だ。な、わかるだろう?」
「北大にポプラだな――わかるとも」
実保はうなずいた。自分に言いきかせているようだった。

凶悪な面構えに、いたいけな子供のような表情が滲み出していた。
青筋は消えていた。
生き残った組員が蹲まり、咳こんだ。身体が震えるたびに、血塊が床にぶつかって黒い花を咲かせた。内臓破裂は間違いないところだ。
ドアが開いた。
いやに小柄な影が、両手をポケットに突っこんだまま、血臭ただよう部屋に入ってきた。二メートルある実保の腰までしかない短軀の割には、頭が異様に大きい。特大の西瓜を細首の上に乗せたように見えた。
髪の毛は産毛みたいにうすい。
血まみれの死体と死体になりかけた組員を眺め、実保を見上げた顔も、ひねこびた少年のようであった。本人も意識しているのか、泥鰌の髭みたいな細い口髭を生やし、それが、喜劇映画の登場人物じみた滑稽さを男に与えていた。
夏だというのに、ぴっちり身体に合った三つ揃いを着用。オーダー・メイドだろう。
「また、ヒスを起こしたか。でけえ図体でようやるわ」
つぶやく声も妙にかん高い。
「これ以上組の財産減らしたら——実保よ、おめえがいなくならにゃならんぜ」
「へえ」

巨人はうなずいた。彼を前にした二人の組員に似ていた。
指ではじいただけで吹っとびそうな小男の放つ「気」は、恐怖そのものであった。
「ヒロは河田町の区営住宅にいた」
小男は侮蔑の眼差しを巨漢に据えて言った。
「驚くこたねえ。おれの私兵を使って探り出したのよ。だが、ちいと遅かった。ほんの一時間前まで確かにいたんだが、どこへ消えたか、まだ帰ってねえんだ」
巨漢の顔が上がった。
小男への恐怖は消え、別の恐怖が油のように広がりはじめていた。
「――やっぱり……」
「あたりめえよ。そうでもしなきゃ、あいつあ生きてけねえ。もっとも、まだ処置が不完全だからな。あたりまえの人間の肉じゃ……」
小男は口をつぐんだ。
「ま、ここまで追いつめたんだ。後は時間の問題さ。――おい、ついてきな」
ドアの方に顎をしゃくってみせた。
小男と実保は部屋を出て、地下の荷物置き場へ降りた。
掃除道具やドラム缶が積み重なった間に、二人の女が立ち尽くしていた。
壁を伝うパイプの一本に手錠でつながれている。どちらも両手は背にまわしてあった。

河田町の区営住宅で幼児をメフィストへ託した女――久子とその娘である。
二人の男を見て、久子が娘をかばうように身を寄せ、金切り声をあげた。
「知ってることは、みんな話したわ。もう、帰してちょうだい」
「そうはいかねえな」
と小男は露骨に淫らな視線を二人の胸と腰に浴びせながら、巨漢をふり返って、
「あそこの腐れ浮浪者どもめ、どうしても中へ入れようとしねえんでな。向こうから出てきたのをひっ捕まえたんだ。そしたら、一発で金星よ」
「知ってることはみんな話したわ、もう帰して下さい」
久子の声は、かえって小男の淫虐心を誘ったようであった。
「いいや、まだしゃべっちゃねえな。おめえらと亭主と赤ん坊がそこにいて、あいつがみんな放り出してどっかへ行っちまうはずはねえ。そんな風にはできてねえんだよ。誰だって食わにゃならねえからな。別の人間がいるはずだ。――誰だい、そいつは？」
薄汚なく探るような眼つきで見つめられ、久子は眼を逸らした。
「言いたくねえのかい？　おめえのいい男か？　だがよ、どうでも口を割らせてみせるぜ。おれは、こんなことに時間を割くのは何とも思わねえ男なんだ」
「久保寺さん――」
実保がなだめるように言った。

「何でえ？」
「まずいですよ、今は。あの間はできるだけ危ないことはするなって親父のお達しだ。裏の仕事はみんなやめてるんですぜ」
「こいつは、立派な日向の仕事さ」
小男――久保寺は大男の鼻先へ片手を伸ばした。
実保は動かない。
久保寺は人さし指と親指で輪をつくった。
びしり、と鳴った。
実保は声もなく、片手で鼻を押さえた。ごつい指の間から、赤いものがゆっくりと滲み出してきた。
「おれは不明な点が訊きたいだけだ。それも平和的にな。さ、教えてくれよ、奥さん。断わっとくが、ここにいるのは、あんたひとりじゃねえんだぜ」
「娘に手を出さないで」
久子は眼を剝いた。
かたわらで、娘が棒立ちになった。運命を悟ったのだ。
「なら、しゃべんなよ」
久子は口をつぐんだ。俊輔のことを考えているのだった。こいつらが、ドクター・メフ

ィストのところへ押しかけたとしたら……

「そうかい。なら、しゃべりやすくしてやるよ」

小男が愉しそうに笑った。無邪気といってもいい笑顔だった。不気味この上ない。

右手が背広の内側へ入った。

久子と娘が眼を丸くするほどおかしなものを小男は取り出した。

輪状に巻いた針金の束である。

実保の顔色が変わった。

はっ！　と小男の声が響くと同時に、銀色の光が空中を走った。

「そうれ、そうれ、そうれ」

久保寺の手つきは、綿飴をつくる露天商のそれと酷似していた。

針金は唸り、風を起こし、それを断つ。

一同の前に、巨大なある生き物の形が描き出されるまで、三秒とかからなかった。

三次元空間に描き出されたひと筆書きといえばよかろうか。

しかし、輪郭だけの瞳の中には青白い炎が燃え、たくましい喉は、薄っぺらな牙の間から肉食獣特有の獰猛な唸りを迸しらせそうだ。

何よりも、現実のそれほど精緻でも美しくもないが、見間違いようのない胴上の斑点は

虎であった。

針金細工の巨虎が、コンクリートの床を四足の爪でふんまえ、一同を睥睨しているのであった。

天井の蛍光灯からの光に、すべての輪郭は妖しく照りかがやいた。

「断わっとくが、こいつは恰好だけじゃねえ。性癖も本物と同じだ。あんまりうまくつくっちまうとな、魂が宿るのよ」

訳もわからず、それでも、ある不気味な運命の予感に襲われ蒼白と化した親娘へ、久保寺は粘つくような笑みを見せた。

思わず、手で摑んで剝ぎ取りたくなるような笑いである。

女たちは顔をそむけた。

「信じてねえな。じゃ、見せてやるよ」

久保寺の右手は、虎の尾とつながっていた。

右手がこねるように動いた。

虎が進んだ。

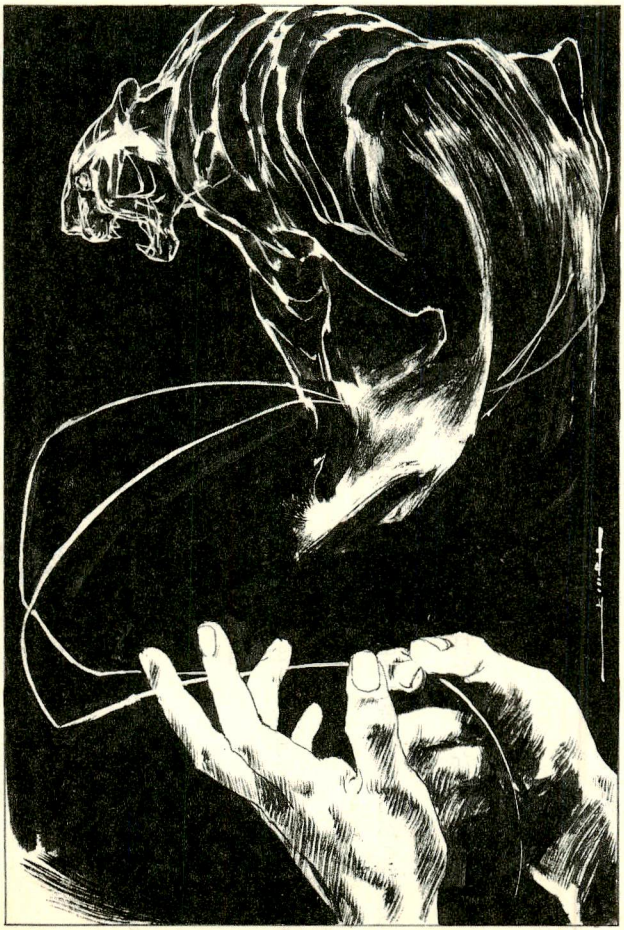
滑らかな足取りであった。

娘の前へ辿り着くまで、それは固い足音をたてた。

顎が開いた。

母親は針金製の牙が娘の肩に食いこむのを見た。
娘の金切り声に、肉を引きさく音が加わった。
虎の顎は閉じ、また開いた。
閉じた。
開いた。
咀嚼（そしゃく）しているのだ。
隙間（すきま）だらけの顎と歯の間で嚙（か）みつぶされているのは、娘のブラウスと同じ色の布を絡みつかせた肉片であった。
喉を構成する針金が、上から下へ、ゆっくりと赤く染まりつつあった。
軽く顔を上げ、猛獣はそれを呑（の）みこんだ。
原形も留めぬ少女の肉体の一部は、奇怪なことに垂直に落ちず、輪郭に沿って滑って、針金の一本に引っかかり停止した。
前足と後足のほぼ中間——虎の胃のあたりで。
「娘が生きながら食われるのを見てえかい？」
久保寺の声は妖しく震えていた。
久子は首をふった。泣いていた。
「やめて。やめて」

「だろ？　なら、正直にしゃべんな。おめえたちと一緒にいたのは、どこのどいつだ？」
「メフィストよ――メフィスト医師よ」
久子はためらいもなく口に乗せた。娘のためもあった。自分のためでもあった。俊輔のことは考えないようにした。
久保寺の顔から、あらゆる表情が消えた。眼の前の女二人も、必死で探索中の男の運命も忘れさせる魔力が、その名前にはあった。
「ドクター……メフィスト……」
歯の間から、問いかけるようなつぶやきが洩れた刹那、人肉を食った猛虎は、意味もない針金の線と化して床上に広がった。
「おしまいですよ、久保寺さん」
実保の巨体も小刻みに震えていた。そんな名前だった。
「西新宿のせんべい屋と、区役所跡の病院長、それともうひとり――死んでも手を出しちゃならねえご法度の名前だ。万がいち、ヒロがそいつを狙ったんなら――もう、あきらめましょうや」
久保寺は沈黙した。
うまくいったと、実保は安堵を胸の中に据えた。
その頬が喉が肩が鮮血を噴いたのは、次の瞬間だった。



化鳥のごとき叫びを上げて、久保寺は右手をふり廻した。
銀光が空気を灼き、コンクリの壁にも床にも深い裂け目がはぜた。
不意に熄んだ。
両肺の酸素を一気に吐き出してしまったかのように、久保寺は床へ崩れた。巨漢は頬から溢れ出る血潮を手で押さえたまま、茫然と立っている。
「やってやる」
久保寺の声が低く地を這っても、実保には信じられなかった。
「やってやる。——ドクター・メフィスト……〈魔界医師〉、おれが相手になってやるぜ」
彼は身を起こした。
実保と女たちが息を呑んだ。
小男の憑かれたような表情には、今までとまるで異なる、極めて危険なものがこびりついていた。
「だがな……それなりの相手だ。こっちも打てるだけの手は打たにゃあならん」
彼は二人の女を見た。
血管の浮き出た右手が動いた。左手もまた。
床上に現われたのは、二匹の虎であった。
久子の後ろに廻り、久保寺は手錠をはずした。二人を縛りつけたのは彼であった。

いきなり背を押した。
声にもならぬ悲鳴をあげて、久子はつんのめった。
虎の方へ。虎の口の方へ。
次の瞬間、その頭は首のつけ根まで、巨獣の口腔に収まっていたのである。
娘が絶叫した。母さんと泣き叫んだ。やめて、やめて、やめて。
久子は生きていた。半狂乱の顔が隙間から見える。牙は肉に食いこんでおらず、しかし、女ひとりの力ではどうにもならぬ強靱さで首を固定していた。
久保寺は前のめりになって、久子の尻に近づいた。
ワンピースのジッパーに手をかけ、腰まで下ろすと、たちまち裸に剝いた。
人妻の肉体は、青いブラジャーとパンティでガードされていた。どちらも普通の品だ。着痩せする体形らしく、久子は肉づきのいい身体をもっていた。
久保寺は身を屈め、久子のパンティに手をかけると、糸のように丸めた。
肉の割れ目に食いこんだ布は、尻の肉をほぼ露わに示した。
「首っ玉を食いちぎられたくなけりゃ、精一杯サービスするんだ。ほれ、舐めてちょうだいとくっついてきな」
久保寺の顔が肉と肉の間に吸いつくと同時に、久子は尻をゆすった。運命はわかっている。この男が生かしておいてくれるはずもなかった。しかし、生きている間だけは、生の

状態がつづくという意識から逃れられなかった。
久保寺は親指でパンティをずらし、剝き出しになった人妻の肛門へ舌を入れはじめた。
あう、と久子は呻いた。夫にも許したことのない場所と形だった。
執拗にアナルを責めてから、久保寺は自分の涎でぎらつく顔を離した。
ズボンを脱ぎ、突き出した。
男根は少年のようにはかなく、けれども立派にそそり立っていた。
あてがおうとしたが、久子の尻が高い。
「下げろ！」
怒鳴って尻を叩いた。久子は従った。
たっぷりした女の尻の肉を両手で思いきり大量につかみ、久保寺は少年のような男根を突き立てた。
久子が声を放った。言われる前に尻をゆすった。
久保寺は十秒ともたなかった。
絶頂感の中で叫んだ。
「殺せえ！」
虎の牙は無惨な音をたてて嚙み合わさった。
久子の首は娘の肩の肉と同じ場所まで転がった。

生命を亡くした白い尻から、久保寺は身を離した。
笑い声がきこえた。娘の口から涎と一緒にもれる声であった。娘は発狂していた。
「もうひとり」
とつぶやき、久保寺は恍惚(こうこつ)たる表情で、娘に近づいていった。

〈魔カルテB〉 街へ来し者

1

白いケープをはおった人物の前で、樫の木の重みを湛えたドアは左右に開いた。
ドアの上部に掲げられたプレートに、
「病理分析室」
の文字がきらめいていた。
空気を押しのけるようにして近づいてくる美貌の主に、居並ぶ白衣の男たちは紅海の水のように裂けて道を開けた。
その前方に、可動デスクと、机上のスクリーンに見入る若い白衣の医師が浮かび上がった。

「久しぶりの興奮する病源体かね？」
かたわらに立ったメフィストの声にもすぐには気づかず、医師は悲痛ともいえる表情を崩さなかったが、ようやく、
「これは院長」
不愛想な声で応じた。
分析室長の鮫島蓮治である。十二歳で抗エイズ菌を合成した病理細菌学の逸材。仕事に没頭すると自分以外の生物はすべて敵と見なす。呼吸をし、消化し、血管を血が流れ、それだけでも耳障りなのに、動き廻るからだ。
そして、メフィストは、決して足音をたてなかった。
一夜明けた早朝のメフィスト病院である。
「私にとっても興味深い報告をもらった」
メフィストは抑揚のない声で言った。
「わざわざおいでにならなくとも、サンプルのデータはお送りしましたので」
鮫島の声は虚ろだ。メフィストなど眼中にない。ひとり言を口にしているだけなのかもしれない。
「もう貰ったよ。直接、君の口から意見がききたかったのだ」
「おかしなものを持ち帰られた」

鮫島の瞳の中に、スクリーンを駆け巡る緑の数字と文字が灼きついていた。

「あの灰――人間のものですな？」

「そうだ」

河田町でメフィストをうまそうだと言った男の形見である。運転手が持ち帰ったものだ。

「しかし、人間のものではありません」

居並ぶ局員たちの数名がちらりとこちらを見た。それだけが反応であった。

「では、何かね？」

メフィストが訊いた。

「不明です。ただひとつ――細胞の再生指数が当病院規準できっかりプラス1になります。これに匹敵する生き物は、『ブロッブ』のような単細胞生物しかあり得ません。院長でなければ、灰になるのはこちらだったはずです」

メフィスト病院規準の細胞再生指数・プラス1とは、破損した細胞が三秒以内に完全再生する程度をいう。銃弾、ナイフ等、外部よりの硬質な異物の侵入によってこれを破壊することは不可能に近く、熱、冷気、電磁波等の照射によって、細胞核を真に破壊し得るのみだ。

それすら効果ゼロとし得る細胞再生指数はプラス2以上である。

「人工再生能力とは異なるのかね？」
「院長のお言葉とも思えませんな」
鮫島室長の声に、医局員たちの顔から血の色がすうと退いていった。
それも気づかぬ風に、
「現在の遺伝子操作技術、及び細胞活性法をもって可能とする再生能力には、あまりに時間的制約が付きまといます。不死身のスーパーマンであるためには、プラス5のレベルを永久的に維持しなければなりませんが、現在の人体にそれを当てはめれば、二秒と保たずに壊死してしまうでしょう。外的強制によって超人をつくる、それが限界です。プラス1能力の持続は比較的たやすいですが、それですら、最も簡便な『エッチンガー血清』を用いた場合、十分の一ミリグラムの注射を一週間おきに続けなくてはなりません。それに伴う悪寒、四十五度以上の発熱等の副作用によく耐え得ればですが」
新宿の高級やくざでも知っているような内容を、得々と講義する若い医師に、メフィストは無表情な顔を向けていたが、やがて、
「すると彼はプラス1での超人だったわけかね？」
と訊いた。
「おっしゃるとおりです。彼の細胞再生能力は、細胞の一部損失程度では永久に失われません。彼が罪を犯した場合、拳銃や棍棒等の装備しか持たない警官は、返り討ちに遇うか、

手も足もでず傍観という立場を取らざるを得ません」

メフィストは軽く眼を閉じ、うなずいた。

「どのような手段を用いてそうなったと思うかね？」

鮫島室長は、はじめて雇主の方を見た。

「不明です」

「推測したまえ」

「データが少量にすぎます。せめて、生きた細胞の一片でもあれば」

「推測は君の流儀にまかせる」

部屋が凍りついた。

ドクター・メフィストを無視して、初歩的な講義をつづける以上の戦慄が、人々の吐息さえ肺の奥深く封じ込めてしまったかのようであった。

メフィストの言葉の意味はすぐにわかった。

鮫島室長が、名前通り、鮫肌みたいに毛穴が突き出た顔の皮膚を撫で、うなずいたのである。

「承知いたしました」

何名かが茫然とメフィストを見つめたが、それ以上のことはできなかった。

メフィストの眼の前で、鮫島室長は薄く眼を閉じ、宙の一点に焦点を固定した。

「病院内規準細胞再生指数プラス1……」

と、まず彼は言った。

それきり黙った。

メフィストと局員たちの眼が、好奇心と痛ましさに彩られてその顔に注がれた。

「不可能です」

鮫島の苦渋にみちた声は、むしろ、メフィスト以外の連中の紙色の顔に、安堵の色を結ばせた。

院長の言葉がそれを打ち砕いた。

「奴は、私の肉を旨そうだと言った」

その言葉が、鮫島の耳から何処へ移動したかはわからない。

脳であるとしたら、ドクター・メフィストさえもメスを入れたことのない、不可思議かつ暗鬱たる部分であったろう。

鮫島の眼がすわった。

両手が椅子の肘を摑む。ハイマンガン・スチール製の肘は、二トンの衝撃まで耐えられる。ボール紙のようにへこんだ。鮫島の五指がめり込んだのである。

指の砕ける音は聴こえなかった。骨格と筋肉が別の物質に変化したか、他の、誰も知らない力が加えられたのかもしれない。

「プラス1……院長の肉……」

と鮫島はつぶやいた。唇は動かない。それなのに、人々は室長の声を聴いた。

いつの間にか、鉛色に変じたその顔を、光影が目まぐるしく行き交った。スクリーンの異常点滅だった。

誰もが反射的にコンソールへ視線をとばした。キイが霞んでいた。肉眼では捉え難い速度で上下しているのだった。叩くものはいなかった。

鮫島の上体が思いきりのけぞり、椅子の背に激突した。耳ざわりなスプリングのきしみ。

「はじまった」

と誰かがつぶやいた。

「これで、コンピュータのデータ・ストックは一年がとこ、滅茶苦茶だぜ」

「予備データが押さえてあるからいいが」

「見ろ！」

全員の視界を赤い霧が覆った。

鮫島の肉体を鮮血が包んだのだ。それは、彼の顔から手から首筋から噴き出す血であった。

「室長の〝超推理〟だ……」

声に慄きが加わった。

「あり得ざる推測を証明し得る力……だが――」
「今度は――死ぬぞ」
ひとりが手近のインターフォンへ向かって、
「こちら、病理分析だ。鮫島室長用のCT（集中看護室）と医師団の待機を要請する」
と言ったところをみると、慣れてはいるらしい。
ぐおお、と何かが吼えた。
鮫島室長だった。
のけぞったまま、喉の奥から、ひゅうひゅうと笛のような吐息を洩らす。
呼吸困難だ。
近づくものも、あわてるものもいなかった。
鮫島室長の〝超推理〟――取るに足らぬ事実からその意味する真実――結果を推測し得る能力は、ソ連の軍事用コンピュータが実用化したといわれるが、それには未知の確定因子を導き出すための条件＝事実を二桁の最低個数まで必要とした。
いま、若き医師が体現している現象こそ、遥かに劣悪な条件で、遥かに深く精確な解を得る〝超推理〟の作動と、誰もが理解したのである。
細く長い、断末魔の呼吸とも思える吐息が急にせわしくなった。
今度はインターフォンにとびつくものもいない。鮫島の超推理は、この死の瞬間ともい

うべき極点に、信じ難い結論を展開すると、誰もが知っていたからだ。

息が、ことん、と停まった。

「いかん——CTへ運べ！」

白衣姿の女性がインターフォンへとびつく。

騒然たる気配を跳ね散らしつつ立ち上がった人々の中で、ドクター・メフィストのみが、静謐な空気を漂う音楽に魂を奪われたもののごとく、満足の瞳を閉じていた。

彼の待っているものは、やはり、鮫島が与えた。

停止した呼吸の最後の一泡を、彼は吐いたのである。

「……お……」

と、だけ。

メフィストのみがそれを聴いた。

死してなお与えた愛弟子の回答に満足する慈師のごとく、小さくうなずいた口元は、あえかな微笑みを湛えていた。

「見事だ」

と、彼が言ったとき、すぐかたわらにいた女子局員が、憎悪ともいえる羨望の眼差しを、活性ガスのマスクをあてがわれる鮫島に向けた。そのひと言を院長の口から聴くためなら、我が身を生体実験のモデルに提供して壇上に横たわる。——この病院の職員で、それを辞

退するものは、ひとりとしていないことを、彼女はよく知っていた。
音も無く滑りこんできた緊急輸送ポッドと入れ違いに、メフィストは分析室を出た。
見事だ、と彼は言った。
ただひと言、「お」と告げた言葉に対する賞賛か、死して後伝えた超人的な行為への感謝かはわからない。
はっきりしていることはひとつ。鮫島室長のひと言から、彼は何かを摑み取ったのであろう。
それが彼と病院とある人物と——魔界都市〈新宿〉に何をもたらすかは知らず、メフィストは、ひっそりと果てしなくつづく白い廊下を、エレベーターの方へ向かって歩いていった。

木村道子は胸の高鳴りに、喜びと不安を同時に感じ取った。
二階の看護室で回診の順序をチェックしている最中、院長に呼ばれた。直々の呼び出しである。周りの同僚は無反応だったが、部屋一杯に、何か異様な、刺激的な雰囲気が漂った。
すぐ院長室へ来いというので、身づくろいして外へ出ると、丁度、別棟の看護婦がやっ

て来たので、院長の用は何かと訊くと、新人はいつもその日に呼びだされるのよ、と言われた。

「よかった。私みたいな新米に、何の用かと思ったわ」

と胸を撫で下ろすと、

「気をつけなさい」

看護婦は、奇妙な眼付きで道子を見た。

「え、何を?——院長さんのこと?」

道子は動揺した。よからぬ空想が湧いたのもやむを得ない、女独特の意味ありげな眼をした言い方だった。二十歳の娘の反応としては当然のものといえる。

別棟の同僚は、もっと奇妙な笑顔をつくって、

「安心しなさい。院長先生は絶対に安心よ。あの方の理想は、私たちの手なんか到底届かない星の彼方。じき、あなたにもわかるでしょう。気をつけるのは、あなたの近くにいる同僚に、よ」

「どういうことですか?」

「無駄だとわかっていても、新人が院長の面接を受けるのは、自分たちも通過してきた通例だと知ってはいても、別の女の子がひとり院長室へ呼ばれれば、穏やかな気持ちじゃいられないの。あなたも、戻ってくる頃にはわかるわ。じゃあね」

そして、五分後、道子は小柄だが、白衣の上下が見事に張り出した肢体を、院長の前に直立させていた。

「楽にしたまえ」

と、メフィストは言った。ちゃんと聴こえた。あまりの美声に、頭に霞がかかるということもなかった。それなのに、道子は動けなかった。

これが人間の男性だろうか。

巨大なデスク越しに彼女を見つめる男は、朧月のようにかすんで見えた。最初は真正面から見合った。確かに、きれいだと思った。だが、あくまでも人間の美しさだ。それが、眼を逸らさずにいるうちに、輪郭が水に映る月のようにぼやけ、眼も鼻も口も、蜜みたいにとろけて、あら、と思ったときは、溶けたのは自分の頭の中だと、ぼんやり感じるのだった。

「かけなさい」

とメフィストは言った。

それで我に返り、

「はい」

機械的に応じて腰を下ろそうとしたとき、デスクの前には椅子がなかったことに気がついた。あ、と小さく叫んだが、足に力を入れるには遅すぎ——しかし、ヒップの下に柔ら

かいものが、ちょうどいい高さで収まったのである。
茫然と見つめると、白っぽい、半透明の物質が、確かに椅子の形をとっている。
「霊体製の椅子だ。奈々月先生のところで見たことはないかね？」
「はい。あそこは、まともな病院でした」
言ってから、しまった、と思った。
「仰せの通りだ」
とメフィストはにこりともせずうなずき、
「二、三、院長として、訊いておきたいことがある」
と言った。巨大なデスクの手もとには、これも異様に大ぶりの本が横たわっている。緑の錆を濃く吹いた青銅の表紙には、道子の背筋を凍らせるような怪異精妙な怪物や奇形人間が彫りこまれていた。古書だ。
鋼の鞭みたいにしなやかな声は、ようやく道子に、普通の男性から得る安堵感をもたらし、
「はい！」
と、彼女は意気ごんで応じた。
「履歴書によると、この病院の患者の看護が希望だそうだが、何故だね？　普通の看護婦はここへは極力来たがらん」

「お給料がいいからです」
道子は眼をぱっちり開いて、はっきりと言った。
「うむ」
「それから、先生が素敵な人だってききました」
「うむ」
メフィストは否定しようともしない。慣れているのか、と道子は少し呆れた。
「それだけかね？」
と訊かれた。
「いえ」
力強く、道子は首を振った。
「この病院の患者さんは、みんな、この町でしか生きられない人だと言われました。私、そういう人たちのお世話がしたいんです」
「君が来院してから五時間経っている。もうわかったと思うが、好奇心や同情で片づく仕事ではないよ」
「はい、二度、目を廻して薬をもらいました」
「ほう。それは初耳だ。それでも、耐えられそうかね？」
「わかりません」

正直な答えだった。言ってから、しまったと思うのは、これで二度目だった。
「よかろう」
とメフィストは言った。
「あの――合格でしょうか？」
「これは資格審査ではないよ。君はもう働いているのだ」
「よかった」
道子は豊かな胸に手をあてて、溜息を洩らした。
「私、しょっちゅうヘマばかりやるんです。ここだけの話にして下さい。それで、奈々月先生から、注意が行ってると思って」
「あの男は愚か者でな、他人をほめることしか知らん」
「ほんとに!?――よかった。私、働きものですから！　ご損はかけません」
「そう願おう」
とメフィストはひっそりと言って、
「もうひとつ。――趣味は何だね？」
「仕事です」
「家へ帰って、することだ」
「セックス」

「ほう」

あまりにあっけらかんとした返事に、メフィストは眉ひと筋動かさず感心した。自由奔放な若者が増え、そして〈新宿〉と来れば、必ずしも珍しい答えではないが、こうも開けっぴろげなのは貴重な例と言えた。

メフィストでなくとも、不快な顔をしないだろうと思われるのは、この娘の天性の明るさと妙な気品のせいだった。眼鼻立ちは平凡だが、ひょいと座に加われば、たちまち、おしゃべりの輪が広がっていく。――人間としての華があるのだ。

「――それと、散歩」

「よくするのかね？」

「もう、しょっちゅうです」

「時間は？」

「暇があれば。あの――セックスも」

「散歩しながらか？」

メフィストの質問は、臨床尋問のようだ。それに乗ったのか、道子も熱心に、

「はい。途中で、いい相手が見つかればどこでも」

「何処の辺を歩くのだね？」

「そこいら中です。近所だけじゃなくって、市ヶ谷から、早稲田、北新宿まで。ほんとに

歩くの好きなんです」
「何の目的もなしにかね？」
「ええ。――時々、夢中になりすぎて、思いがけない場所にいることもありますけど。大久保の方へ出たのに、河田町だったとか」
「怖くはないのか？　夜のときもあるだろう」
「夜好きです。夜しか歩きません」
道子の声に、自信が満ちた。
「人のいない道、大好きです。それに――」
ぽん、と腰を叩いて、
「ちゃんと、護身用のミニ・ピストルも持ってますから」
「そのうち、ご一緒させてもらおう」
メフィストは、これで最後だという風にうなずいて、両手をテーブルにのせた。
「ご苦労だった。帰りなさい」
「はい」
と立ち上がりかけ、道子は急にもじもじした。
「あの――二、三、うかがってもよろしいでしょうか？」
「何だね？」

「院長先生は、結婚なさっていらっしゃるんでしょうか？」
「残念ながら」
返事はすぐに来た。
「何故だね？」
「よくわからなくなって。――ごめんなさい。――お独りだなんて信じられません」
道子は自分の声が上ずっているのに気づきひどく驚いた。
それから、まずい、と思った。これで三度目だ。奈々月医院では、何度、ひと言多いと言われたことだろう。よりによって、院長先生のプライベートなことまで――
「想い人が情れない男でね」
「は？」
と、道子は耳を疑った。あんまりたやすく返事を貰ったせいもあるが、びっくりしたのはその内容だ。なんと――
「男ですって!?」
「いかんかな？」
道子は首を振った。今では〈新宿〉ばかりか〈区外〉でも、男同士、女同士はおろか、注射一本で気軽に性転換を愉しめる時代だが、眼前に腰を下ろした院長の告白としては、意外極まりなかった。

あんまりあわてて、

「い、院長先生は人間ですか？」

と、とんちんかんなことを訊いた。

「何に見えるかね？」

「いえ――その、他の男の人ならともかく、院長先生の気を引くような魅力的な男性がいるなんて想像もできません。あの――もうひとつ訊いてもよろしい？」

「何かね？」

と言ってはくれるものの、本気でいいと思っているのか迷惑なのか、抑揚のない口調からは、見当もつかなかった。

道子は覚悟を決めた。胆がすわった。

「その方は、どういう人なんでしょう？」

「気になるかね？」

「はい」

「西新宿の自家営業者だ」

「は？」

道子は眼を剝いた。本気なのか、からかっているのか、さっぱりわからない。二の句が継げないうちに、

「戻りなさい」
と言われた。
それまでと同じ淡々たる口調なのに、一切の抵抗を無駄だと思わせるものを感じて、道子は、あらゆる雑念を忘れ、はい、と応じた。

2

木村道子が出て行くとすぐ、メフィストはデスクの上に置いてあった古書を持ち上げた。両手とはいえ、縦横百二十センチ、八十センチ、厚さ二十センチはある化け物サイズだ。これに青銅の表紙二枚を加えたら、百キロは軽くオーバーする。たおやかな左手の中指で、黄金の指輪が霊妙なきらめきを放った。
持ち上げた本の下の空間に、白霧状の物質が集まり、濃さを増し、形を整えると、小さな机くらいはありそうな傾斜台をつくった。霊体（エクトプラズム）が招かれるのである。この部屋の空気は、外界と全く別の成分で構成されているのかもしれなかった。
霊体の傾斜を二、三度修正し、万全の角度を得るやメフィストは表紙を開いた。
中表紙には、暗号のようなラテン文字で、

妖物解剖図説

R・P・クレスペ

と記されている。

クレスペは十六世紀のヨーロッパに実在した妖術師で、他に『サタンと悪霊の憎悪についての二冊の本』（一五九〇年・パリ）が名高い。

次ページの目次に眼を通し、メフィストは、愛児の肌を撫でる母のごとき手つきで、黄ばんだ紙をめくりはじめた。

怪異な絵図が次々に現われては消える。

そのすべてが、一角獣、不死鳥、火竜、海竜、キメラ、人魚、地獄犬等、伝説の怪獣、怪物の精緻巧妙な解剖図と知れば、多少、この分野に知識のある好事家なら、全財産どころか魂まで賭けて売却を求めかねない。

R・P・クレスペの『妖物解剖図説』――一五七二年にイタリア北部の小村ノヴィーラで執筆され、ミラノの印刷所経由で世に出たものの、三十日後にローマ法王庁の命により発禁、一週間後には焚書処分を受け、著者のクレスペもイタリアを追放、パリで活動に励

んだ。初版二百五十四部のうち二部のみがルーヴル美術館の地下倉庫と大英博物館の図書室に保存されているというが、確かめたものはない。

メフィスト病院の院長室で妖々と開かれたこれは、三冊目の伝説の妖書なのだろうか。

黴臭いページの中ほどで、メフィストは指を止めた。

「これか」

とつぶやき、吐き気を催しそうな絵に、光る眼差しを注ぐ。

そのとき、卓上ICのランプが、甘美な音色とともに点滅した。

ページを開いたまま、空中に指輪を向けた。

婦長の貌が、三次元ホログラフィとは思えぬ鮮明さで浮かび上がる。

「どうした？」

「ご来客です」

「患者か関係者か？」

「いいえ」

「忙しいと伝えたまえ。約束はない」

「昨日、河田町で院長とお目にかかった男について訊きたいことがある、と申しておりますが」

「第一応接へお通ししたまえ」

「承知いたしました」
婦長は消えた。
黄金の糸を織ったしおりをはさんでページを閉じ、メフィストは口元をほころばせた。
「殺しに来たか、死にに来たか。どちらにしても、ただでメフィスト病院は出られんぞ」
と彼はつぶやいた。
霊体に支えられ傾斜した本の表紙の表面に、世にも美しい顔が映っていた。
ひとたび、この表紙を見れば、百年の恋も一度に醒めて、首を吊るものが続出するかもしれない。
玲瓏とかすむ美しさは変わらず、顔つきは、悪魔のそれを表わしている。

面会人は、平凡な服装の中年女だった。一歩人混みに入れば、水泡のごとく粒となって溶解してしまいそうだ。
冷房は利いているのに、癖なのか、丸めたハンカチを顔へ当て、のろのろと事情を話しだした。豪華な調度の並ぶ荘重な応接室の中には他に二、三組のグループがいて、何やら話し合っている。
患者の家族と担当医の組み合わせは、〈区外〉でも〈魔界都市〉でも変わらない。

「あたくし、荒木町の小出幸江と申します。実は主人が三日ほど前、物怪に取り憑かれまして、いったんは町内の収容所に閉じ込めておいたんでございますが、檻を破って逃げてしまいました。他者さまに迷惑をおかけしてはと、そればかりが心配で捜しておりましたところ、昨日の夕方、河田町の〈居住区〉の近くで、先生とお話ししているのを見たという人がございまして、メフィスト先生ならば、あの人を無事捕えて下さったのではないかと、大急ぎ、タクシーをとばしてやって参った次第で」

すがるような女の顔をメフィストはじっと見た。

やや血色の悪い肌に、ぽう、と朱が昇った。

こんな芸当ができる男は、〈魔界都市〝新宿〟〉広しといえども、あとひとりしかいない。

陶然たる女の気分を地に墜とすがごとく、

「ご主人は亡くなりました」

と、メフィストは断言した。

底知れぬ深さと濃さをもつ瞳が、動揺と安堵に揺れる女の眉の震えまで捉え、

「灰ならば、当病院内に保管してあります」

と告げた。

「左様で」

女——小出幸江は気抜けしたように言った。両眼に、湧き上がってきた光るものを、ハンカチの玉で拭いた。

「そうですか。——うちの主人、亡くなりましたか。でも、よかった。先生の手にかけられたんなら、あきらめもつきます。これで、他者さまから文句も言われずに済みますから」

「それはよかった」

と、人を殺したと言われた医師は、そう言った女を慰め、

「灰をお持ちになりますか？」

「はい。せめて、それだけでも、仏壇に供えてやりたいと思います」

「私とご主人が一緒にいるところを見たものは、私の運転手しかおりません」

唐突な言葉の意味を判じかね、すぐ、小出幸江は表情をこわばらせる。

「いえ。遠くの角から眺めていたそうで」

「偶然、通りかかってかね？　あの時間、河田町へ？」

「地理に疎い人で」

「君の仲間がどんな生物になったかは、すでに調べがついた。帰ってそう伝えたいところだろうが、それは私の質問に答えてからにしてもらおう」

「何をおっしゃるので？」

茫然とメフィストを見つめた女は、突然、恐怖の相を浮かべて後じさった。ハンカチで眼頭を押さえる。

丸めた布から、たとえようもない甘美な香りが漂い流れ、少し離れたところにいた医師と来客たちが、声もなくテーブルや床に伏した。

彼らの三半規管は、床と天井と壁が狂ったように、思い思いの方向へと廻り出す怪異な感覚に襲われ、破壊されたのである。

涙腺に仕込んだ微細なイペリット・ケースから、涙混りに滴らせる薬液に、ハンカチに染み込ませた触媒を反応させ、強烈な神経ガスを発生させた女は、しかし、相も変わらぬ冷泉のごとき眼差しで自分を見つめる秀麗な顔に、新たな恐怖の相を浮かべて立ち上がった。

「我が病院は名誉を重んじる」

猛毒と化した空気分子の真っただ中で、眼ばたきもせず、息も詰まらせずに、ドクター・メフィストは冷たい仮面が口をきくように言った。

男のものとは思えぬほど美しい、しかし、まぎれもない男の手が五指を広げて胸前に伸び、ぎり、と握りしめた。

「ここの一片の空気とて汚すことは断じて許されない。また、許しもせん。それをした以上、君にもう訊くことはない。四肢を失い、明日の臓器提供を待つ患者たちの役に立って

もらおう。骨、筋肉、血管、内臓――新宿では、常に品不足だ」

メフィストが立ち上がるより早く、女は床を蹴っていた。

小太りの身体がメフィストの頭上で旋回し、細い光がきらめいた。

驚きの声が上がった。

もし、この一瞬の目撃者があったなら、細長い金属片を握った女の手が空を切り、その丸まっちい胴体を、下方から垂直に伸びたメフィストの左手が、肘まで貫いたと証言するだろう。

だが、着地した幸江の身体には破れ目ひとつなく、そっと引かれたメフィストの手も返り血ひと粒浴びていない。

院長の方を見もせず、小太りの身体はドアへと走った。

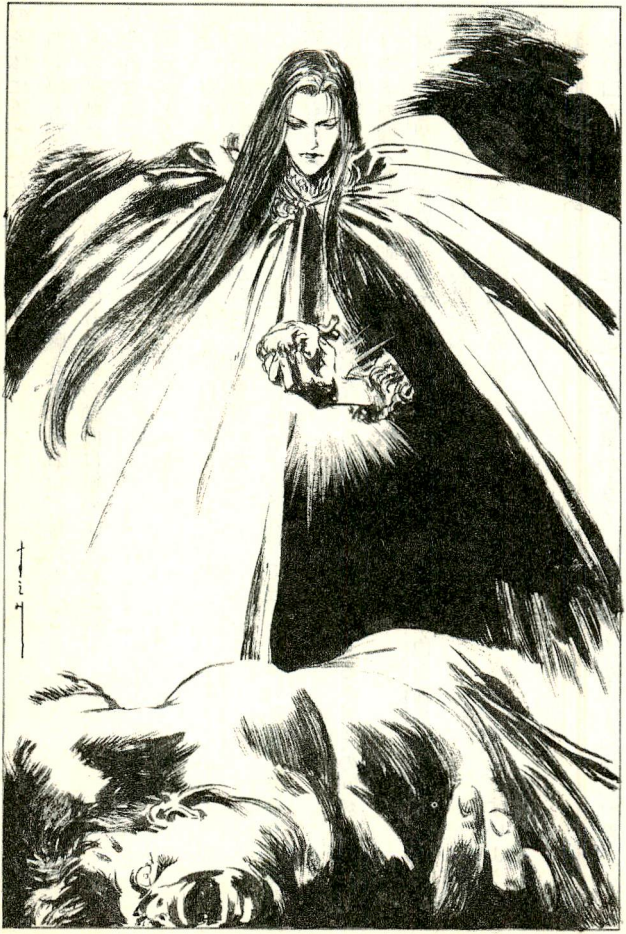
不意に立ち止まり、左手を胸にあてた。買い物帰りに、八百屋へ財布を忘れたのを憶い出した主婦のようだった。

白眼を剝いて斃れる身体を面白くもなさそうにみつめ、メフィストは左手を開いた。

指の間からは何も見えなかったのに、その手のひらで妖しく脈打つ塊りは、人間の心臓に間違いなかった。

すでに、指輪の操作でパワーを増したエアコンが、ガスを吸い出している。

メフィストは壁際の院内電話で、女と他のメンバーを搬出に来るように命じてから、女



の死体に近づいた。
血も傷も残さずとはいえ、心臓を奪われれば、屍体だ。
その証拠に、あお向けに倒れた女の顔面は紙のように白い。
それなのに――
「気分はどうだね？」
と、メフィストは話しかけた。
女の眼が開き、唇の端から白い泡を噴いた。
「この都市では心臓がなくとも生きられる。〈区外〉ではこうはいかん。やはり、質問には答えてもらおうか」
女の呼吸は切迫していた。心臓がないから当然だ、ともいえるが、その回数と間は、メフィストの握る心臓の動きとぴたりと一致している。
女は眼を閉じ、苦しげにそっぽをむいた。凄まじい憎悪の色を瞳の中に認めながら、メフィストは女の顔の上に心臓をかざした。
「まず――おまえたちの組織の名は？――答えたくないか？　なら、答えやすいようにしてやろう」
蠢く心臓に指がめりこんだ。
女の口から洩れる悲鳴は、浄化した空気がもう一度腐敗するかとすら思われた。

女は海老のように身を反らせつつ、両手で豊かな乳の間を押さえた。
傷ひとつないその胸の中へ、手はずぶりとめりこんだ。
「死ねぬよ」
とメフィストは、物想いにふけるような口調で、女を見下ろした。
「ここはメフィスト病院。――死にはもっとも遠い場所だ。どんな形にせよ」
そして、美しい指は女の肉に食い入り、心臓を奪われた女は身悶えした。

メフィストが病院を出たのは、十分後だった。
玄関下の石段前にはリムジンが待機している。
石段を下りようとして、メフィストは背後をふり向いた。
無精髭の口元が、ひん曲がった煙草を咥えたまま、にんまりと笑った。
この場合、普通の人間なら、刑事と出喰わしたことよりも、いつの間に背後へ廻ったのかと首をかしげるだろう。
玄関を出るまで、メフィストの背後には誰もいなかったのだ。
だが、メフィストの興味は別のところにあるらしかった。
「煙草の銘柄は何かね？」

と彼は訊いた。
「しんせいで」
朽葉刑事は器用に煙草を咥えたまま言った。
「で、いかがでしょう、昨夜の話は？」
「お話しした通りだ。おっしゃるような患者は来ていない」
「いえ、今日の話でして」
「毎日、御苦労なことですな」
「いえ、仕事でして」
「病院へ行って事務のものにおききなさい」
メフィストは言い捨てて石段を下りた。
開け放たれた後部ドアの前に、黒ずくめの運転手が、細長い影のように立っている。
「どちらへお出かけで？」
朽葉刑事は一緒に石段を下りながら訊いた。
「警察の方とは無縁のところだ」
「往診ですか？」
「いや」
「正直な方だ。好きですよ」

「ありがとう」
メフィストはシートに消えた。
刑事の前で、ドアは重々しく、閉じた。
「愛想のねえ野郎だな」
朽葉は苦笑して運転手を見つめたが、相手は気にもせず、運転席へ戻った。
「どちらへ？」
と、ハンドルを握ってメフィストに訊く。
水底から響くような声である。
「大久保二丁目。『鬼堂会』とやらのオフィスだ」
「承知いたしました」
リムジンは滑るように走り出した。眼をつぶっていれば、動き出したとは到底わからないスムーズさであった。
五分ほど走った後で、沈黙の車内に、
「知っているか？」
メフィストの質問が漂った。
「かなり凶暴なやくざでございますね。会長は鬼沢右門。小早川蒼源の書生をしておりました男で、本業は〈区外〉にある『邪竜浄青会』という政治結社の代表でございます。

『鬼堂会』は不動産と風俗営業を表看板にする暴力団で、大久保一帯に勢力を持っています。構成人員約七十名、要注意人物は事務局長の実保、専務の久保寺、他に超能力者の食客が常時二、三名、滞在しております」

「病人はいるか？」

「やくざは常に心身症でございますね」

メフィストは満足げに眼を閉じ、シートの背にもたれた。

車内には陽光が溢れ、それでいて青いたそがれの静寂に満ちていた。

その中で〈魔界都市〉の病院長の姿は、禁断の真理を悟り、その美貌ゆえに死を免れて、永劫の蒼茫に封じ込められた若き眠り人のように見えた。

安普請のモルタル壁も、地面に落ちるとかなり盛大な音と衝撃を世界に与えた。

「三好荘」と書かれた木の看板を踏みつけ、家屋専用の破砕用有人メカニズム「パワー・ローダー」は、舞い上がる埃をものともせず、内装が剝き出しになった二階建てアパートへ、複合関節を備えた巨腕を伸ばしていった。

腕の先端部にとりつけられた二本の指は、自重五百五十キロの重合鋼製ながら、人型ボディの後背部で活動するパワー・モーターの出力五千馬力を得て、二百トンのコンクリ

塊を軽々と放り投げる一方で、薄布のようなガラスのコップをはさみ、片方で水道の蛇口をひねって水をみたしてから、小波ひとつたてずにテーブルへ移動し得る繊細さを誇る。

身長二・四メートルの胴内に収容された操縦員（パイロット）の四肢の動きは精確に脚部と腕に伝わり、近代工学の精華ともいうべき「フィードバック効果」によって、鋼鉄の「指」が触れた感触もまた、リアルに人間の指に再現されるのだ。

「前の壁はばらした。次は屋根をやるぜ」

簡便な強化プラスチックのフードに守られた操縦区で、パイロットは背後の現場監督に成果と次の行動を連絡し、右手を屋根の羽目板に伸ばした。

鋼（はがね）の指が寸分の狂いもなく、その速度と動きを再現する。

こんな場合、誰もが感じる破壊欲と残忍さをこめて、パイロットは築十五年のアパートの屋根板を、一気に剝（は）ぎ取った。

屋根瓦（やねがわら）が地上に散乱し、またも爆煙（ばくえん）のごとき砂煙（すなけむり）をとばした。

「――――!?」

ローダーの腕が次の破壊目標へ向かわないのを見て、現場監督は光学眼鏡（めがね）をはずし、胸の指向性マイクへ、

「何しとる、つづけろ」

と怒鳴った。

返事が戻るまで少しかかった。戻ってきたのは、予想もしない返事だった。
「二階の六畳間を見て下さい。押し入れの襖がぶっ倒れて中身が——ありゃあ——何ですかい？」
監督をはじめ、全員の眼が、黄塵のたちこめるアパートの一室へ注がれた。
そういえば、確かに押し入れから手前の畳の上に白い塊りがスロープを形成している。下着の山でも落ちてきたのかと思ったが、形も光沢もちがう。
それは——
ローダーの声は震えていた。高性能マイクが総毛立つ肌の音まで伝えてきた。
「ありゃあ——骸骨ですぜ。人間の頭だ」
「おい、工事は一時中止だ。おまえ——管理人の小母さんを呼んでこい。さっき、その辺にいたはずだぞ」
監督のそばから作業員のひとりが消え、すぐ、エプロン掛けの中年女を連れて戻ってきた。
「一緒に来て下さい。確認して欲しいんで」
事情を知らない婦人はきょとんとしていたが、現場監督に手をとられ、ともかく、と危なっかしい建物の残骸の方へ引いていかれた。
手廻しのいいことに、別の作業員が組立て式のステップをかけており、監督と婦人はエ

スカレーターよろしく、旋回する自走ステップに乗って二階へ上がった。
鼻孔を覆う埃の幕の向うに、白い山崩れのような堆積物が広がっていた。
近くまで行く必要はなかった。
数百を数える個数があれば、その何割かはこちらを向いている。
虚ろな空洞を思わせる眼窩。剝き出しの歯列。
ある。
大きなものも小さなものも、白いものも黄ばんだものも。ある。ある。ある。
それは髑髏の山であった。
この部屋の住人は、押し入れ一杯の頭蓋骨を隠匿していたのだ。
現場監督が、ぼんやりと婦人をふり返り、当然だが間の抜けた質問をした。
「この部屋の借り手――どっかのインターンかい？」

3

意外な来訪者を、大久保の事務所は扱いかねている風に見えた。
取りつぎに出た下っ端は、茫然と立ちすくみ、メフィストが進むと音もなく道を開けた。
異常に気づいて何人もの男たちが玄関へ出てきたが、全員が最初の例にならった。

ようやく、ひとりが、やくざには似合わぬ腑抜けた表情で名前を訊き、すぐ、蒼白と化して、奥の応接室へ案内した。

二分と待たず、激しい足音が階段を下り、見上げるばかりの禿頭の巨漢を先頭に、三人の男女が戸口をくぐって現われた。

大男が貫禄たっぷりの動作で、ソファに腰を下ろし、残る男女はその後ろに立った。用心棒らしい。リムジンの運転手が言っていた「客分」である。

女は平凡なベージュのワンピースに豊満な肢体を包み、月輪みたいな冷たい印象を漂わせていたが、男の方は鶴みたいに痩せて、ふた昔前の肺病病みを想起させた。

「事務局長の実保です」

男はたっぷりと恫喝をきかせた声を、低くにじみ出させた。

「後ろのは客分の八代夫妻。卓さんと史生さんです。何の御用事か存じませんが、うちにや、先生の厄介になるような病人はおりません。お間違いじゃないですかね?」

横柄に言って足を組む。

「私は病んだものが好きだよ」

メフィストは、じっと実保を見つめた。それだけで、やくざの獰猛な眼から、狂気じみた殺気が拭うように消えた。

彼の眼の中で、魔界医師はうすぎぬのような光に溶けこんだように揺れた。それがメフ

ィストの美しさのためだと理解もできぬまま、やくざの頭の中には、冷たい声だけが、水晶の鈴のごとく妖幻と鳴り響いた。

「彼らは心の底から救いを求めている。医師の存在理由を知っている。医者たちを好いてくれる。この世の中でこれほど強い信頼関係を結んでいるものたちはいないと断言しよう。だからこそ、私は病んだものを愛する。見捨ててはおけん。些細な疾病といえども、それに応じた治療は与えねばならん。それが医者の務めだからだ」

実保はメフィストの右手が近づいてくるのを見た。

ゆっくりとした動きであった。

それなのに、いや、それゆえに、彼は身動きひとつできなかった。

メフィストは人さし指だけを伸ばした。

白く長く美しい指であった。

指先が実保の右膝に触れた。

それは、すう、と、つけ根まで埋まった。水面に沈む優雅な虫のようであった。

びゅっ、とメフィストの両頬のあたりで空気が鳴った。

椅子の背に小さな染みが弾け、水中の墨汁のごとく広がっていった。

そちらを向きもせず、メフィストは指を引いた。

傷ひとつ残さず指は抜け、メフィストの周囲を紫煙が薄布のように巡った。

椅子の背を溶かしたものは、強烈な酸でもあったろうか。布地も衝撃吸収材もスチールの骨組みさえも溶解する薬液の霧の中に、メフィストは怖れ気もなく身をもたせかけた。

「もう、お帰りになったらいかが？」

はじめて、実保の背後に立つ女――八代史生が口を開いた。

淫らな言葉の方が数等似合う声と口調であった。

史生と――男――八代卓が同時に唇をほころばせた。

それをこわばらせたのは、実保の上げた声であった。

「足が――足が動かねえ!?」

八代と史生が愕然とメフィストを見つめ、駆け寄った。

「畜生――何を、おれの足に何をしやがった。まるっきり動かねえ。石になったようだ！」

「君には、その組み方がよく似合う」

刺激臭の中から、メフィストの声がきこえた。

実保の足に触れ、そこから伝わる手応えが悲鳴の語る通りだと知り、八代も史生も茫然と魔界医師を見つめた。

「こ、こん畜生」

実保が両手を肘掛けについて起き上がろうとした。

恐怖の視線がその手に落ちたのは、次の瞬間だった。
「手、手も動かねえ！」
六つの瞳が、今度こそ、等しく恐怖の色を湛えて秀麗なる美貌を映した。
「人間の身体はひとつの宇宙だ。それは私も知らぬ大いなる法則に従って活動する。ある部分の法則が変われば、他もそれに従うのは当然の成り行きだと思わんかね？」
メフィストの言葉を実保が理解できたのは、奇蹟に近かった。
「じゃ、じゃあ――このままで行くと……おれの身体は？」
「すべてが運行を停止する。例えば――心臓――」
「た――助けてくれ――先生」
声と同時に、実保の全身から汗が噴き出した。四肢を除いて。それも、この大男に、死の暗黒へ引き込まれる予感を募らせた。
「な、頼む――助けてくれよ、メフィスト先生、あんた、ドクター・メフィストじゃねえか」
「病を治すには、問診が必要だ。答えられるかね？」
不意に、メフィストの声が、やさしさを帯びた。この男にとっては、救いを求めるものすべてが患者なのであろう。手ずからその境遇に陥らせたやくざでも。
「答える、何でも答える。――頼むから、心臓を停めねえでくれ」

大男がうなずくたびに汗がとんだ。この上ない真摯さがこもっていた。
「その二人――まだ必要かな？」
「わかった。――おい、二人とも引き取ってくれ。この部屋で起きたことは、誰にも言うんじゃねえぞ」
夫婦は顔を見合わせて、うなずいた。
どちらの眼も一瞬、メフィストの顔に視線をあて、ドアの方へ歩き出す。
「ひとつだけ」
とメフィストが呼びかけた。
ふり向いた、頬骨も露わな顔へ、
「黒は似合わん」
と言った。
八代は無表情にドアの方へ歩き出した。
「せ、先生……」
ドアの閉じる音を聴きながら、実保がすがるように言った。
「胃が――胃が動かなくなってきたぜ」
「法則だ」
とメフィストはにべもなく言った。

「早く、早く質問してくれよ。何でも答えるからよ」
「今日、私の病院へ、ある女性がやって来た。どんな女性かは言うまでもあるまい。君たちの派遣した人材だそうだな？」
「そうだ」
実保はあっさり認めた。前代未聞の死の恐怖が、やくざの剛直な精神をやわな蟻塚に変えていた。
メフィストは核心へ入った。
「ヒロという男、何者だ？　いや、なぜ、あのような身体になった？」
「そ、それは――」
実保は唾を呑みこんで躊躇した。
「ためらっている余裕はあるまい。じきに心臓も胃の後を追う」
「言えねえ。言えねえよ。そんなことしたらどっちにしても殺される」
「死に方にもよる」
メフィストの声は時にやさしく、時に冷たく響いた。ことによったら、聴くものすべての耳に、異なって忍び込むのかもしれなかった。
「その通りだ」
ドアの開く音と声は同時にした。

「兄貴」
「何てえ様だ、このでくの棒」
三つ揃いを着こなした小男が実保に歯を剝いて吐き出した。
じろりとメフィストを見て、
「お初に。――ここの会長補佐をやらしてもらっている久保寺ってもんだ。メフィスト先生だね」
敵意にみちた声であった。全身が緊張しているとひと目でわかる。相手の正体を熟知しているのだ。
「話はおれがする。こいつにかけた術を解いてやってくれや」
「解けんな」
「なにィ？」
久保寺の眼が光った。
「最初から術になどかかっておらん。指一本で人間を石に変えられる魔道士は、高田馬場にひとりいるきりだ」
「だが」
久保寺と実保の眼が空中で重なり、大男の膝へ落ちた。
「う、動くぜ!?」

声の内容は、崩れた足が証明した。
実保の両眼には、しかし、前に数倍する戦慄がみなぎっていた。
「一体、一体どういうことなんだ。何もしねえのに治っちまった」
「そうか――聞いたことがある。『妄想感覚』ってやつだな。あんたの噂と、何だか知らんが、本当は大したことのねえ業を見て、こいつは途方もない目に遇わされると思いこんだ。自分が石になるような、よ。――それで、その気になっちまった。いわば自己催眠にかかっちまったんだな」
「そういうことだ」
メフィストは解答を与えて、
「だが、効果は思い込みの通り与えられる。あと五分とたたぬうちに、彼の全機能は石化同様に停止していただろう。この場合、私は殺人者になるのかね？」
「どうでもいいさ、そんなこたあ。――この町の誰が〈魔界医師〉に手錠をかけられる？あんた相手じゃ、そいつも運が悪かったぜ」
「お賞めの言葉、痛み入る」
「どかねえか、阿呆」
久保寺は実保の膝を蹴とばし、席を追い出してから、メフィストと向き合って腰を下ろした。

胸ポケットからいやに太い葉巻をひっぱり出し、金張りのライターで火をつける。デュポンのシュブロンらしかった。九十八万円もする最高級品だ。たとえば、背広はチェスター・バリーのオーダー・メイド、靴はウェルバノ——ローマ法王庁御用達というわけだ。この分では、時計は宝石をちりばめたパティック、車はロールス・ロイスということになりかねない。

絹（シルク）のハンカチを取り出し、激しく額をこする。そのまま半日もつづければ、メフィストの顔を映しそうであった。

「ヒロのことをお知りになりたいんでしたね？」

久保寺は派手に紫煙を吐き出して言った。

「その通り」

「あいつめ、おかしなものに取り憑（つ）かれましてね。半月前に、組のもんを七人も食い殺してトンズラしやがった。このままじゃ、〈区外〉にでも出られたら、大変なことになる。組のもんを動員して探しました。それでようやく、先生と出喰（でく）わしたことがわかりましたんで」

「あの女は、私の病院に毒をまいた」

「そいつは——」

久保寺は絶句し、また、額を磨（みが）きはじめた。

「そいつは何かの間違いで。いえ、先生はやくざがお嫌いだと伺ったもんで、誤解されてえらい目にあわされちゃあ損だ。せめて、身を守るくらいのことはよろしかろうと、あんな女をいかせたんでさあ。――で、あいつはどうなりました？」
「患者たちの役に立っている」
「そりゃあ……ようござんした……」
久保寺はハンカチの上から強く眼のふちを押さえた。メフィストの言葉の意味がどんな運命をさしているのか、この男ならずとも、新宿の住人なら自明の理だ。
「そういう次第で」
久保寺は、さっさと話を打ち切りたいという意向を露骨に言葉にこめた。
「先生と病院に迷惑をおかけした無礼はそれなりのお詫びをいたします。何とぞ、手をお打ちなさって」
「何をくれる？」
「へ？」
「お詫びの品だ」
「そう――何が、よろしいんで？」
「組員十名」
「……」

「冗談だ。――私とおたくの組員が出会ったところを、誰が目撃したね？」
「通りすがりの男で」
久保寺は躊躇なく答えた。
「何処にいる？」
「……」
「私は誰にも見られなかった。近くには人がいなかった。それなのに、どうしてわかったね？」
「つまり、その……」
「誰にきいた？　河田町の住人か？」
久保寺には、メフィストの眼だけが見えていた。
限りなく深い黒は、世界の色に変わりつつあった。闇の世界の色に。その世界で、水晶の声が鳴った。
「その人たちはどうなった？　いいや、どうした？　私も手の届かぬところへ追いやったか？」
「やかましい！」
久保寺は絶叫した。
二人をさえぎる小卓を蹴りとばして立ちあがった小男の右手には、銀色の細い輪が絡み

ついていた。
針金の束である。
「余計なことに首を突っこみやがって。――医者は病人だけ診てりゃあいいんだ。それをノコノコ、こんなところまで。おお、生きて帰れると思うなよ」
「おまえも病気だな」
メフィストはゆっくりと立ち上がった。彼だけが正常の位置を保ち、他の光景すべてが歪み、旋回するような感覚に捉われて、久保寺はめまいを覚えた。
絶対の自信を持つ針金の技が、紙細工のような児戯に思われた。
「おめえがここへ来るのは、お見通しだったんだ。どうせ、只で済みそうにねえってな。あの女ひとりをやったのは、余計な兵隊を喪いたくなかったからよ。おかげで、みいんな、事務所の周りに待機してるぜ。だがよ、おめえはここから出られねえ。おれの手でバラバラにしてやるよ。河田町の母子みてえにな」
「母子？」
「母親と娘よ。どっちも尻からぶちこんで、その後、殺してやった。いい尻してやがったぜ。よがりによがって、いく寸前にズブリとやった。うれしそうな顔して死んでたぜ」
「どの母子だ？」
メフィストの声は変わらない。

「おめえに、死にかけた赤ん坊を預けたってよ。可哀相に、おめえなんかと出会わなきゃ、首と胴がバラバラにならなくて済んだんだ。え、少しは反省しなよ、ドクター・メフィスト」

「三日後に子供を引き取りに来る予定だった」

メフィストの右手がゆっくりとケープの内側へ忍び入るのを見て、実保は眼を剝いた。

「子供に詫びてもはじまらん。責任をとってもらおうか」

久保寺は三歩後退した。

ぎいん、と針金がしなった。

「――バラバラになる前に教えときな。ヒロはどうなったい？」

「私の分析室にいる。灰になって」

久保寺の顔がほころんだ。

「そうかい、安心したぜ。すると、奴の正体を知るのは、おめえだけってわけだ」

「正体？」

「とぼけるな。――それを調べに来たんだろうが、どうやってつくったかをよ？」

「なるほど」

と、メフィストは言った。

「だが、それはどうでもいい。用は果たされた。後は帳尻を合わせるだけ。――私の治療

でな」

「ふざけるな！」

久保寺の右手が閃き、銀線が虚空にあるものの形をつくった。

二つ。

虎と

獅子と。

そいつらは声高く咆えた。針金製の声帯を震わせて。

メフィストの口元に笑みが広がっていった。

かつて、古の大哲学者を誘惑したという同名の悪魔の笑みか。

ドクター・メフィスト。

魔界医師。

〈魔カルテC〉　メフィスト病院の妖事

1

凄まじい笑みであった。
これほど恐ろしい笑みはあるまい。
これほど美しい笑みもあるまい。
久保寺は、茫然と立ちすくんだ。
その脳裡に、彼自身もあったとは信じ難い子供の頃、誰かに聞かされた物語が浮かんだ。
あのときの笑みだ。——と彼は思った。
黴臭い動物の皮でできた契約書に人間にサインをさせるときの笑いだ。地上の富を与える代わりに、奴は何を手に入れる？

頭の中が奇怪な光る靄で覆われ、久保寺は夢中で気力を奮い起こした。
眼の前でメフィストの顔が揺れている。
再び、妖しい感情が胸の鼓動を強くさせた。久保寺は両手で顔を覆った。
「殺れえ！」
と絶叫する。
虎が吠え、獅子が応じた。
針金細工の凶獣は、鈴の音に似た足音をたてつつ、メフィストに走り寄った。
跳んだ。
距離は一メートル。鮮やかな跳躍であった。
メフィストの両手がすうと上がった。
美女をダンスに誘う白い紳士のように。
虎と獅子の口は、その手を肘まで呑みこんだ。
牙が服の生地を裂く。
「どうした——食いちぎれ！」
久保寺が叫んだ。眼に殺意と別の色があった。美しいものの断末魔を眼のあたりにする人間の奇怪な歓喜。
「がぶりとやるんだ。肉をぼろぼろにしろ。そいつの赤い血を床一杯に流すんだ！」

再び、メフィストは微笑した。
「私の血が赤いと言ったのも、いや流れていると思ったのも、おまえがはじめてだ。――よく言った。せめて、心臓だけは我が病院で保管してやろう」
そして、肘を獣の口に与えたまま、彼は手を上げ、ふり下ろした。
処女を恋の魔術にかける魔法使いのように。
床に下りた虎と獅子を、久保寺は悪魔のごとく見つめた。
白い医師の手の中で、二頭は忽然と向きを変えた。――針金がすべて反対側に向いたとしか見えなかったのである。
「手術は終わった」
メフィストの声は、殺伐たる空間を玲瓏と伝わる。
虎と獅子が、もとの飼い主めがけて襲いかかったのは次の瞬間であった。
うおお、と叫んで久保寺は右手を振った。虎のような声であった。袖口にでも仕込んであったのか、手の軌跡は銀色であった。
チンと、美しい音がして、虎は空中で一条の針金と化した。
同時に、久保寺の左手が肩から消失した。
痙攣する生腕を、獅子は二度咬んで呑み下した。
わずかに遅れて血塊が床で砕け、久保寺は細身のナイフを握った手で、鮮血の噴き出る

左肩を押さえた。

背後で向きを変えた獅子よりも、眼前の医師に視線を浴びせかける。恐怖と驚愕に彩られた瞳は、しかし、満々たる敵意を喪ってはいない。

「望みとあれば、首だけにして病院のホールに飾っておいてもいい」

見る見る土気色に変わるやくざの顔をひそやかに見つめながら、ドクター・メフィストは言った。

「心臓だけよりその方がよければ、答えろ。ヒロという男を、あのように変えたものの正体は？　誰が、いつ、どのようにして成し遂げた？」

「しゃべると思うかい？」

すでに屍蠟と化した顔色に、まぎれもない嘲笑を刻んで、やくざは後ろへ跳んだ。

獅子の眼もとをナイフの刃がかすめ、それは空気を鳴らして鋼の輪と化した。

久保寺は、かたわらに立ちすくんでいた実保の胸倉を摑んでメフィストの方へ突きとばした。

二百キロに近い巨体が片手のひとふりで突っこむ。

メフィストの視界が覆われ、彼は横へ移動して巨体をやりすごした。

窓ガラスの砕ける音。

久保寺の姿は消えていた。

背後の窓に開いた大穴から熱風が吹きこんでくる。
無表情のまま、メフィストは背後に眼をやった。
実保の巨体はうつ伏せに床へ這っていた。
延髄にあたる部分に白っぽいナイフの柄がめりこんでいた。刃は肉と脳の中だ。
実保もメフィストの質問の答えを知っていたのだろう。
「あの男は元気すぎるようだな」
床から窓の高さの壁へと這う血の筋を一瞥し、魔界医師は部屋を出た。
すぐ玄関である。二メートルほど歩いたとき、異変が生じた。
足元の床が、ぐう、と前方に傾斜したのである。
そのすぐ向こうの応接セットもドアも傾いた。
いや、建物自体が。
眼下前方のドアへとソファやテーブルが雪崩落ちていく。
メフィストの身体も滑った。
直立を崩さず、白いケープをなびかせて落ちていく。
炸裂音が世界を揺るがせた。
メフィストの背後で悲鳴が上がり、重いものが床に倒れる気配と音が重なった。
メフィストはふり向いた。彼にも世界にもいっときの変化も生じなかったように。

床に伏しているのは八代卓だった。
痙攣する身体の下から赤い染みが縁を広げていく。致命傷を受けたのは間違いない。左右の拳を一本の針金がつないでいた。
メフィストは玄関の方を見た。
ドアの前に自動拳銃片手の朽葉刑事が立っていた。
無精髭の間からはみ出した唇から、ひん曲がった「しんせい」が突き出し、拳銃に負けじと紫煙を噴き上げている。
こちらを向いている銃口から、メフィストは横へのいた。
「いやあ、危なかったですな」
と刑事は煙草を咥えたまま言った。煙草は上唇にくっついて落ちない。訓練の賜物かどうか。——器用な男だった。殺し屋に銃口を向けたまま近づき、跪いて脈をとった。
「お気の毒」
と気の毒でもなさそうに言って立ち上がる。
「いや、ドアから一歩入った途端に、先生のお姿と、後ろから跳びかかろうとしているそいつが見えたもんで。咄嗟に射っちゃいました。そいつをご存知ですか？」
「いや」
「万城目卓って、妖術使いですよ。人間の脳と三半規管に幻術をかけて、幻覚状態にいる

相手を襲うんです。『民衆の敵（パブリック・エネミイ）』第一等級（ランク）の殺し屋でして。区からも賞金が出てます」
「貰（もら）えるのかね？」
朽葉はにやりと笑った。
「それが、公務員は無資格でして。ひとつ、どんなもんでしょう。先生がやっつけたってことにして、賞金は折半」
「私は構わんが」
「すぐ手続きをとります」
朽葉は愛想笑いを浮かべて拳銃を懐（ふところ）へ収めた。
じろりと部屋の様子を一瞥（いちべつ）し、
「なんだか、おかしな気分ですな。みんな、ずれてる」
と言った。
テーブルもソファも絨毯（じゅうたん）も整然たる配置を崩してドアの方へ集中している。
「まるで、ドアから出て行こうとしたようですな。近頃（ちかごろ）のやくざはインテリアの配置にもこり出しやがったのかな」
と、真剣な顔つきで首をひねる刑事へ、
「私の行く先はご存知ない筈（はず）だ。どうやって来られた？」
「いやあ」

「いやあ、ではわからんが」
「ドクター・メフィストにお教えするほどのもんじゃ。――実は、お別れしたところへ、車が突っこんで来ましてね。運転手を引っぱり出してかましたら、そいつが、ここへ駆けつける途中のチンピラだったんですわ」
「車が突っこんで来た？」
「そうなんです。いきなり窓ガラスが割れたんで、泡食ってハンドルを切ったらしいんですな。そこに私がいたという次第で。運の悪い奴だ」
「何故、窓ガラスが割れたのかね？」
「はっは。――蹴とばしたコーラの缶が当たったんで」
「誰が蹴ったね？」
朽葉刑事は、はっはっとそっくり返り、急に低い声で「私です」と言った。
「偶然かね？」
「勿論で」
「ふむ。しかし、そいつらがここの組員だとしても、よく、私のことを訊き出したものだ」
「そこは、企業秘密で」
勿体ぶった刑事に、メフィストは軽く会釈して、

「何はともあれ、救ってもらった礼は言う。ありがとう」
「とんでもない」
刑事は眼を剝いて手をふった。
「ドクターに礼を言わせたなんて知れたら、患者の経験のある連中に八つ裂きにされちまう。これはご内聞に」
「――外に、やくざが集まっているそうだが」
「それが」
刑事は薄気味悪そうな顔つきで、ドアの方を見た。
「私が駆けつけたとき、三十人ぐらいが集まってたんですがね。――全員、ひっくり返ってましたよ。立ってたのは、先生の運転手だけで、――ありゃあ、空手か拳法の先生か何かで？」
「私にもわからん」
メフィストは背後のドアへ顎をしゃくった。
「奥にひとり死んでいる。殺害者は逃げた」
「裏の窓から跳び降りた奴ですな。運ちゃんが追っかけていきましたが」
メフィストは無言で玄関へ歩き出した。
「後ほど、事情聴取に伺います。――なに、ゴロツキの百人や二百人何とでも処理できま

すよ。例の、患者の件、お忘れなく」
刑事の声が白い背に当たった。
光の中にメフィストは立った。
昼の陽光である。なまじのメイクではすぐに底が割れる。よほどの美女でも、陰影を塗りつぶす光の中では、できのいいマネキンに見えてしまう。
この医師だけは変わらないようだった。
常人の眼には、彼にふりそそぐ光は、やがて白い紗のように見えてくる。
その美しさを守るために。
その美しさを讃えるために。
路上に転がるやくざたちの姿は、陸揚げされた魚に似ていた。
ビルから少し離れたところに止まった黒いリムジンから吐き出されたかのようであった。
車体のかたわらに、黒服制帽の姿が立っていた。
「どうした？」
ドアを開けて一礼する運転手に、メフィストは訊いた。
「逃げられました」
「おまえが逃がすとはな」
「油断いたしました。意外なスピードで。それに」

「それに？」
「おかしな女が邪魔だていたしまして」
メフィストは車に乗った。
運転手がドアを閉め、リムジンは走り出した。
「どんな技を使った？」
世間話のようにメフィストが訊いた。
「急に、違う通りに出てしまいました。走っていたせいかつまずきまして。傷をごらんになりますか？」
「うむ」
運転手は左手を掲げて手の平をメフィストに向けた。
硬貨大の青痣がついていた。
「これからは、手袋を着用したまえ」
「はい」
「夢の中の怪我が現実になるか。ビルの上から落ちたとしたら」
「左様で」
「何故、やくざどもを殺さなかったね？」
「ちょうど、刑事さんが駆けつけてくるのが見えました」

「いい心がけだ」
「恐れ入ります」
「しかし、惜しかったな」
「やくざどものことでございましょうか？」
「そうだ」
「全部で二十七体。どれほどのまともな方たちを救えたかと思うと、胸が痛みます」
メフィストは小さくうなずいた。
この会話の主が、彼と二十七人のやくざを眠らせた運転手だと知れば、聴くものはどんな反応を示すだろうか。
主人が主人なら、使用人も。
メフィストは眼を閉じた。
すぐに開いて、
「〈区外〉へ出てみるか？」
と言った。
「はい」
「鬼沢右門の屋敷だ」
「承知いたしました」

それきり黙って、メフィストは眼を閉じ、車内は青い宇宙に戻った。

2

メフィストが院長室へ戻ったのは、この日の夕刻であった。

デスクへ戻ると、すぐ、青銅の表紙の書物を開いた。

R・P・クレスペの『妖物解剖図説』である。

この書物の一ページへ眼を通している最中に、小出幸江が面会を求めたのだ。それからすぐに「鬼堂会」へ向かい、本は置き去りにされていた。

黄金のしおりを目印に、蠟細工のような指がページをめくった。

秀麗な美貌に、ある感情の色が浮かんだ。

そのページはむしり取られていた。

メフィストの右手が揺れた。指輪のかがやき。プラチナの台に、深く暗い色合いの石を象嵌したものだ。

デスクの前の空間に、もうひとつのドアが出現した。いや、出入り口のドアである。

輪郭がわずかにぶれている。

ドアの周囲の時間が猛スピードで流れ去っているのだ。ビデオの早送りというのが一番

近いだろう。
不意に、ドアが歪み、暗黒が三次元ホログラフィを包んだ。
一秒。
映像は戻った。
メフィストが部屋を出てから現在まで、院長室の何処かに仕掛けられたビデオ・アイはドアの凝視をつづけ、高速再生時で約一秒――現実時間ではほぼ三分間、その役目を妨げられた。
侵入者はこのとき訪れたのだ。
ドアの右上方に表示された時刻表示によれば、午前十時十七分四十一秒――メフィストが小出幸江に会おうと部屋を出て、ほぼ十分後だ。
無事に入り、無事に出た。
目的も達した上で。
信じ難いことであった。
メフィストは右手の人さし指で鼻のつけ根を叩いた。
考え事をするときの癖である。
そのとき、ICのライトが点滅した。
「メフィストだ」

「婦長でございます」
「どうしたね？」
「先日の刑事さんが、また――」
「先日ではなくて先刻だが。――用件は事情聴取かね？」
「いえ。その――一杯やるご相談とかで」
婦長のあきれ返った顔が想像できるような声であった。
「君をパニックに陥れるとは。――通したまえ」
「それが、もう、いらっしゃいました」
「わかった」
スイッチを切って、メフィストは椅子にもたれかかった。
一見、装飾を排しただけの王座タイプの椅子は、人間工学の粋と霊的工作の頂点技術を発揮し、数百分の一ミリ単位で、メフィストの体軀に最適な角度と強度をとる。緩衝器（ショック・アブソーバー）とスプリングを兼ねているのは、鉄ではなく霊体物質（エクトプラズム）だ。
待つほどもなく、朽葉刑事が訪れた。
「や、どうも」
とドアの前で、わざわざ警察手帳を示す。この男の癖らしかった。「しんせい」は咥えていない。

「こちらへ」
メフィストが言う前に、かがやく通路へと刑事は足を運んでいる。
十歩ほど歩いて、眼を丸くした。
「こら、おかしい。ちっとも近づきませんな」
メフィストは答えない。
朽葉は少し考え、
「走ってもよろしいかな？」
と訊いた。
「結構」
はあっ、と声をかけて、くたびれた背広の裾がはためいた。
四秒とかからずデスクの前に到着し、精根尽きたマラソン・ランナーみたいに床へ倒れる。
せわしなく息を吸う音がしばらくつづいた。
デスクに手をかけ、ようやく立ち上がっても、刑事の喘ぎは止まらなかった。
「――一体、ひい、一体――どうなっとるんですか。この部屋は？　ドアから院長の机まで、十分も全力疾走せにゃ――ならんとは……」
「私の時計では四秒かかっていないが」

「……ひい、んな、馬鹿――な」

メフィストは刑事から眼を離して、姿なき来訪者のことを考えた。

彼の許可を得ずに通路を渡れば、ある処理を施さぬ限り、侵入者は永劫にデスクへは辿り着けない。無論、後戻りはおろか、通路を出ることも不可能だ。

かつて、敵対する医療機関の派遣した殺し屋二名を、メフィストは通路の上で餓死させたことがある。朽葉が十分で済んだのは、処理のせいであり、十分もかかったのは、機能チェックのモルモットにされたためだ。

最初から通路を避けても、他の部分を通れば、さらに不気味な運命が待ち構えている上、そもそも、ドアを開くのが不可能に近い。

霊的防御を施したドアを開放するエネルギーは、戦術核をも凌ぐだろう。

それを一切無視して、来り去った姿なき侵入者とは？

鼻へと上げかけた指を止め、メフィストは断末魔寸前とも思える刑事に声をかけた。

「で、ご用件は？」

すり切れたような声が、

「――今度、いっしょに――一杯やりま――せん――か？　駅前に――いい飲み屋が――あるんで――す」

「ご一緒しましょう」

「ありが――たい」
朽葉は胸を叩き、何度も唾を呑みこんだ。呼吸は正常になりつつある。
「で――もう、ひとつ。……実保の件ですが、何故、あそこへ行かれたのか、お伺いしたい」
「あの組の女やくざが病院へ来て毒ガスをまいた。その損害賠償の話し合いだ」
「やくざ相手に金の交渉ですか。いや、それは決裂するのが当然です」
朽葉は深々とうなずいた。この場合は、ぬけぬけ、と言うべきかもしれない。
「――で、その女やくざは何故、おかしな煙をまきに病院へ？」
「さて」
「会わせてもらえませんか？」
「自分のガスを自分で吸ってしまってね。強度の腐食ガスだった。跡形もない」
ふむ、と朽葉は首をかしげて、
「これで一件落着ですな」
と言った。
この街で、人間の生命は空気より軽いが、やくざはそれ以下だ。朽葉の言葉通り、百人や二百人が不当に殺されても、気に病む者など皆無に近い。
「理解していただけてありがたい」

メフィストは無表情に言った。
「お引き取り願おう」
「ちょっと、お待ちを」
刑事は、あわてて手をふった。
「これから本題です。――例の患者、来ませんか？」
「残念だが。原因不明の衰弱と凶暴化などという患者は来ておらん。まして――」
「残念ですなあ。家のもんの話じゃ、じきにぶっ倒れるのは間違いないとか、となれば、早いとこ見つけてやらんと、行き倒れとして野犬と同じに処分されてしまう」
「患者を探しに出歩くわけにもいくまい。向こうから来ぬ限り、病院の扉は開かれん」
「冷たいですな、ドクター」
「私も〈魔界都市〉の住人でな」
朽葉は肩をすくめた。
「しかし、何故、彼は家を出た？」
「そこんとこがはっきりせんのですよ。ですから、立ち廻り先もわからない。何か、寺にまつわる事情が絡んどるようです」
「千五百年の歴史を誇る名刹の住持が失踪か。――この街を訪れるにふさわしい事情があったのかもしれんな」

「全くで」
朽葉は右手を背広の内ポケットへ入れ、すぐに戻した。
「構わんよ」
メフィストはデスクの一点を指さした。
うっすらと、靄みたいなものが集まり、形と色を鮮明にして、壺状の灰皿が出来上がった。
「こら、どうも」
と朽葉は眼を丸くして、今度は「しんせい」の箱を取り出した。
一本を口に咥えて、マッチをする。
うっとりと紫煙を吐き出す髭面は、幸福そのものであった。
「ライターをお持ちにならんのか？」
ふと、メフィストが訊いた。
「この方が目立ちますんでね」
朽葉は霊体物質製の灰皿をしげしげと眺めながら言った。
「この仕事で肝心なのは、住人と馴染みになることでしてね。マッチが止めですわ。ヨレヨレの恰好だけじゃ目立たない。このご時勢に硫黄のマッチを使うから、二度目に会ったとき〝ヨレヨレで、ライターも持っとらん、マッチで煙草を点ける刑事〟が来た、となる

んです」
「プロですな」
「いやあ。ははは」
笑い声に、インターフォンの呼び出し音が混ざった。
今度は立体像が現われない。刑事がいるからだ。
「どうしたね？」
とメフィストは尋ね、数秒後、うなずいた。
「失礼だが、急患だ。――お引き取り願おう」
「こら、失礼を」
朽葉は頭を下げた。
「ですが、ドクター・メフィスト手ずから出動する病人てのはどんなものか、署内でも話題になっとるんです。見せてもらえませんか？」
「お探しの人ではないよ」
メフィストは、とっくに刑事の魂胆を見抜いている。
「また会おう。それとも、ここでお待ちになるかな？」
「滅相もない」
朽葉は震え上がった。

こんな場所でひとりきりになるなど、深夜の歌舞伎町の裏路地に、宝石と札束だけを手に突っ立っているより危険だ。

ようやく微笑して、メフィストはドアの方を指さした。

二人の患者は明らかに、極度の衰弱を示していた。

眼の縁はどす黒く染まり、骨組を露わにした顔の皮膚は異様に青白い。体温は二十度まで低下し、脈搏も四十。——通常なら死亡値であった。

強度の精神的ショックによるもの、と担当医は判断した。

二名の職業は、取り壊し屋とアパートの大家である。年代もののアパートの解体中におかしくなり、失神状態に陥って近所の病院へ担ぎこまれたが、あまりに異常な症状に驚いた医者が、メフィスト病院へ廻すよう告げた。

症状自体は珍しくない。

妖気溢れるものや場所の集合体ともいえるこの町では、耐性のない人間は連日のごとく精神的・肉体的衰弱に襲われ、病院通いに明け暮れるのだ。

簡単な祈禱や呪術ぐらいなら、町の拝み屋でもこなすし、区で発行している憑依妖物撃退用のマニュアルを使えば、低級霊や妖夢虫程度は落とせる。区民なら、危険地帯に近づ

きはしない。

問題は、〈区外〉からの訪問者――多くは観光客である。

強力な憑依能力を持つ妖物や淫鬼に取りつかれた彼らは、初期に何らの手も打たず、そのうち深層心理や本能部まで侵蝕されて、新宿に住みつくようになる。

無論、〈区外〉の家族は捜索の手を伸ばすものの、廃墟や、危険地帯の片隅で、得体の知れぬ者たちの一員と化して、親の顔すら忘れ果てた彼らを見ると、十人中十人が連れ戻すのをためらう。父が母が夫が妻が子が、〈魔界都市〉の住人に加わったことを、本能的に悟るのだ。

現に、この状態で連れ帰ったものの九割九分までが、〈区外〉で、口には出せぬような怪異な事件を引き起こし、新宿の病院へ、あるいは発見された妖所へと戻ってくるのであった。

快癒するものもいれば、行方不明で処理されるものもいる。

そして、区の人口だけは確実に増えつづけているのだ。

だが、今回の病人たちの衰弱ぶりは、どう見ても前例のない異常さであった。

彼らが百人町にあるアパートの二階で倒れてから、メフィスト病院へ運び込まれるまで、三時間とかかっていない。

新宿特有の寄生吸血虫やマインド・パラサイトにやられていないことは、症状でわかる。

憑きものでもなさそうだ、というのが担当医の診断であった。
とりあえず、隔離病棟へ入れた。
看護婦と看護夫が二人ずつついた。
後者は、憑かれた患者には欠かせない用心棒役だ。
急速に症状の悪化する患者に限って、突発的な発作を引き起こす。
とりあえず、点滴を行うことにした。肉体の健康回復が第一だからだ。
看護婦が準備中に、それは起こった。
ほとんど同時に二人がベッドから跳ね起きたのである。
看護夫がつくのと同じ理由で、二人の身体はゴム・ベルトで捕縛されていた。
それが留め金ごと引きちぎられた。
看護婦も看護夫もあわてなかった。凶暴な患者には馴れっこであった。ここはメフィスト病院なのだ。
かといって、力で屈服させることもできない。他の病院では、憑きものが落ちた途端、通常の体力に戻った人間が、看護夫の一撃が原因で死亡した例も多い。うち何件かはいまも訴訟中である。
ここの看護夫たちは、経験と躾が行き届いていた。
ベルトにつけた麻酔銃を抜き、麻痺液を浴びせかける。

二人は跳びかかった。

衰弱の極みにあった人間とは思えぬ凄まじい力だった。体重八十キロ以上、筋力強化措置で二馬力のパワーを保証されている看護夫を、骨と皮だけの両手で軽々と持ち上げてしまう。

看護夫は轟音とともに、壁に叩きつけられた。

看護婦はすでに、奥歯に仕込まれた非常警報装置のスイッチを入れていた。

真っ先にとびこんできたのは、いま、部屋の前を通りすぎたばかりの看護婦だった。光景を一瞥して立ちすくむ。——と思いきや、可愛らしい顔に憤怒の形相で、ローヒールを脱ぐや、立ちつくす大家に襲いかかった。

あまりの場違いな攻撃に、為す術もなかったのか、ローヒールをもろにこめかみに食い、大家はのけぞった。超音波は平気だが、衝撃には弱いらしい。

「何してらっしゃるの!?」

あまりのことに、茫然と立ちすくんでいる二人の看護婦に、三人目の同僚は叫んだ。

「その人たちを連れ出して。ここは引き受けます！」

二人が顔を見合わせたとき、大家と解体屋が空中に跳んだ。

両手を伸ばして娘に摑みかかる。

看護婦が悲鳴を上げた。

その声を打ち砕くかのように、
「きえええええ」
凄絶な気合いが部屋中に満ちた。
空中の二人は跳躍の軌跡に反して垂直に床に落ちた。
きょとんとした表情で、背後をふり返る娘のかたわらを、白衣の医師と警備員が走り去り、床にへたりこんだ患者へ緊束衣をかぶせた。
A号緊束衣――一トンの衝撃に耐え得る特殊合金の糸をより合わせた衣類から抜け出た患者はいない。
「拘禁室へ入れろ」
と白衣のひとりが指示し、警備員たちは二人を運び去った。投げとばされた看護夫も、頭をふりふり立ち上がっている。
「凄いわね、あなた。――木村さんでしょ？」
看護婦のひとりが声をかけた。顔はやや青いが、表情と声音は落ちついたものだ。彼女もメフィスト病院の看護婦なのだった。
「こんな度胸のある新人さんはじめて。見直したわ。――私、憑依分析科の楠本早子。今度、飲みにいこ」
「あたし、滝辻早苗。ご一緒させて」

ともうひとりも言った。
木村道子の身体は喜びに震えた。
「いま、綿谷――看護夫にきいたよ。患者を靴で殴りつけちまったな」
いかめしい声が道子をふり向かせた。いかめしい、鬼瓦みたいな顔が荘重ににらみつけている。
「あの――」
「憑依科の医長の飛騨だ。人呼んで、『憑依科の用心棒』。患者に手を上げるとは、もっての外だぞ」
「でも――あの場合」
「言い訳は許さん」
「はい」
道子は首を落とした。その肩へ、ごつい手がそっと乗った。
「だが、僕個人に言わせれば、よくやった。えらい、胆っ玉の太いのが入ってきたもんだな。もう少し、お手やわらかにな」
「はい！」
思わず直立不動をやってしまった桜色の頬を、飛騨医長は父親のような眼差しで見つめ、身を翻した。

「今の気合い――飛騨先生よ」
と最初の看護婦――楠本早子がささやくように言った。
「あれで、ヨガと密教武術の天才なの。私たちにはわからないけれど、あの気合いを出すだけで二十年もかかるそうよ。その代わり、大抵の妖物はひと言かけられただけで逃げてくわ」
「凄い人のいる病院ね」
「あの先生ばかりじゃないわよ」
と、二人目――滝辻早苗が、何となく怖ろしそうに言った。
「院長先生は別格として、副院長先生、各科の主任クラスは、みんな突拍子もない技や術を身につけてるって話よ。私はまだ見たことがないけれど。そのくらいじゃないと、この病院では務まらないのよ」
「やだわ。まるでお化け屋敷じゃないの」
道子の脅え声に、ドアの近くから誰かが間の手を入れた。
「その通りだ」
ふり向いて、三人は硬直した。
「院長先生!?」
「楽にしたまえ」

と、しゃっちょこばった三人の看護婦へ、ドクター・メフィストはやさしく言った。
やさしく。
だが、それが、さっきの飛騨医長のような女性に対する男性の本質的なやさしさ、慈しみでないことに、この娘たちは気づいているかどうか。
女に対するとき、院長の眼も声も微笑も、世にも美しい人形のそれに変わる。
「飛騨先生からきいた。ご活躍だったそうだね？」
メフィストの視線は道子を捉え、残る二人の顔に、たちまち憎悪に近い色が浮かんだ。
「そんな……」
道子は頬を紅らめた。
「通りかかったら、急に警報装置が反応して……それで、夢中で……」
「飛騨先生は賞めていた」
「ありがとうございます」
道子は蚊の鳴くような声で言った。いくら凶人と化したとはいえ、患者の横面を靴で張り倒したのが、余程、恥ずかしいとみえる。
「あの――今の二人は何に取り憑かれていたのでしょうか？」
「これから診てみよう」
「先生が、手ずから診察なさるので!?」

滝辻早苗が眼を丸くした。
「仕事に戻りたまえ」
冷ややかな声に、三人の看護婦は夢から醒めるような、いや、なおも半ば酩酊状態にあるような虚ろな顔と足取りで病室を出て行った。
その後ろ姿へ、透き通った視線を注ぎながら、「患者が暴れたとき、あの娘が通りかかったか」
と、メフィストは錆びた鋼のような声でつぶやいた。

3

院長直々の診察は、拘禁室で行われた。
所要時間は三分であった。
異例の長さである。
三人の医師が付き添った。
「お診立てはいかがでしょうか？」
と、ひとりが控室で訊いた。メフィストは少し間をおいて、
「あの患者たち、しばらく外へは出さないでおきたまえ。——家族へは、思ったより重態

と伝えろ。全力を尽くして治療中だ」
「はい」
「一緒に来たまえ――塚田先生」
そう言われても、真ん中の、マスクをつけた医師はぼんやり突っ立っていたが、他の二人に見つめられ、あわてて、メフィストの後を追った。
「お疲れでしたな」
と廊下を歩きながらメフィストは言った。
「いや、なんの」
塚田医師は咳払いをして言った。
「声がいつもと違うようだが」
「昨夜、風邪をひきましてな」
「医者に化けるための勉強も大変ですな」
塚田医師は立ちすくんだ。
「ご存知でしたか」
と、朽葉刑事の声で言った。
「拘禁室へ行く途中で、塚田先生が見えなくなったときから」
とメフィストは淡々と言った。

議な幽明の彼方に没しつつあった。
事によったら、おれは、口をきいてはいけない相手――禁断の存在と対等に話しているのかもしれない。
急速に、精神力が低下していくのを朽葉は感じた。
メフィストの正体をおぼろげに察したものの宿命かもしれなかった。
彼は息を吸い込み、腹腔にためて、言葉を乗せて吐いた。
「本題に入りましょうや、先生。鬼堂会の主人と〈区外〉にいるその親玉、そして、いきなり衰弱し、凶暴化した二人。わざわざ見せていただいて。――お使いになる気なんでしょ、私を。なんせ、捜索中の坊さんと、全く同じ症状ですからね。あの二人は」

光は果敢に闇に挑んでいた。盲目的な挑戦の多くが脅えから生じるように、その一角を彩るかがやきのまばゆさや色彩の毒々しさは、そうせずにいては闇の狂気に蝕まれるかのごとき焦燥を観るものに与えた。
今なお東京一の歓楽街――新宿区「歌舞伎町」である。
〈魔震〉によって完膚なきまでに破壊された街区は、凄惨な死都の痕跡をあちこちに残しながら、腐敗土の中から羽撃く妖異な不死鳥のごとく、歓楽の巷に君臨していた。

覗き部屋、マッサージ・パーラーは無論のこと、はためは高級そうなバーやキャバレーの前にも、客引きはもちろん、乳房や太腿を剝き出した女たちがたむろし、人影を見つければ、男女の別なく濃厚なウインクを送り、腰をくねらせる。

店の前へ来ると、刺激的な匂いが鼻をつくのは、客を引き込むべく、店々が流す催淫性の香である。

若い盛りの客たちの中には、これだけで射精し、うずくまってしまうものもいた。

午後十時。——やって来る客よりも千鳥足で歩み去る客たちの方が多くなる時刻。

キャバレーの一軒から、坊主頭の男たちがこぼれた。四人いた。背広の襟の銀バッジを見るまでもなく、残忍な顔つきが職業を物語っている。

筋肉強化処置を受けている肩や胸部の盛り上がりを誇示しながら、通りへ出た。どいつも顔がどす黒く紅潮し、細い眼に好色の色を湛えて四方を見廻した。

嫌がるホステスの全身へ指を這わせ、よがり声を上げさせてきたばかりだ。それでも疼いていた。やらせて当たり前の女など、食傷気味だった。

素人の女とやりたい。それも、若い肌が弾けそうな娘か、しっとりと霧に濡れているような、熟し切った人妻と。

ひとりが、おっ、と叫んで通りの一方——コマ劇場の方へ眼を据えた。

残りがふり返り、喉仏を上下させる。生唾を呑みこんだのだ。

それだけの値打ちがある女だった。

白い美貌は、下劣な匂いと呼び声のかかる通りにはおよそ似つかわしくない清楚さと、どの店へ入ってもおかしくない妖艶さを備えていた。

藤色の和服がネオンを冷ややかに跳ね返し、白い足袋に包まれた足取りは、呼び込みの男や女の愚劣な誘惑を無視して歩を進めた。

眼の前を通りすぎるとき、白いうなじにからんだほつれ毛までが妖しくのぞき、四人組は思わず身震いした。

年齢は四十近い。どんな素性の女か判断しかねるが、男もなしでここを通ったのが運の尽きだ。

見合わせたやくざどもの血走った眼はそう言っていた。

和服の裾を強引に掻き乱し、剝き出た白い太腿の肉に思うさま歯をたててみたい。足袋の下から現われた足の指と股に、こってりと舌を這わせたい。わなわなく尻を鷲摑みにして、性器と肛門をよがり抜くまで舐めしゃぶってやりたい。

突風のごとき妄想の風が男たちの頭を吹き灼き、女の喘ぎと抵抗の声が耳の中を荒れ狂った。

数メートル先の横丁を左へ折れた和服姿を追って、足早に歩き出した四人組は、もはや人間の皮を被った好色鬼にすぎなかった。

「いねえぞ」
「何処いきやがった？」
「この先にもひとつ曲がり角がある。そこだ」
最後の声が、左右を石塀と街灯で囲まれた男たちの顔に、残酷な笑みを結んだ。そこを曲がれば廃墟——行き止まりだった。
うち二人がせわしない音をたてて、ジッパーを外した。
闇の中に男根が屹立した。
「おい」
ひとりの粘ついた声が、全員の視線を、その曲がり角の入り口——石塀の端に集中させた。
太腿が生えていた。
誰のものかは言うまでもなかった。
街灯の光で、白い肉どころか表面をなでる産毛と青い血管の筋まで、はっきりと見てとれた。
女は知っていた。犯られるために来たのだ。たくましい男たちに舐めまくられ、青筋の立った固い固い男根で突きまくられる自分を夢みて、歌舞伎町を彷徨っていたのだ。
石塀の陰に隠れて誘っている。和服をつけ根までめくり上げ、太腿を一本突き出してい

る。

腿が上がった。草履が地面に落ちた。白い手が伸び、足袋の止め金をひとつひとつはずしていくのを、やくざたちは男根を握りながら見つめた。

足の甲半ばまでずり落とし、手は引き戻された。

足首がしなり、白い布は小さな弧を描いて男たちの眼の前に落ちた。

剝き出しの女の足。

上品さを脱ぎ捨て、獣の野性を帯びた合図を足袋に見て、男たちは涎を流しつつ、曲がり角に殺到した。

その前から、腿がすっと消えた。

「いねえぞ！」

真っ先に石塀を曲がった男の口から絶望の叫びが洩れた。

四組の野獣の眼が狂気を宿しつつ四方を刺し、たちまち、

「いたあ！」

子供のような歓喜が夜気を震わせた。

三十坪ほどの空地――というより、ビルの廃墟である。

ただ、コンクリートの基礎部に再開発の手でも加わったのか、白っぽい瓦礫のところどころに黒土が顔をのぞかせ、奇妙な雑草が首を伸ばしている。

女は、そのコンクリートの上に横たわっていた。男たちからの距離は四メートルくらいある。

寝ていた。無防備の姿勢だ。いくらでもしてちょうだいと言っている。裾はめくれ上がっていた。片膝を立て、その足に足袋と草履はなかった。

男たちが取り囲んでも、女の様子に変化は生じなかった。

「早く言うもんだぜ、奥さんよ」

ひとりが嗄れ声で言った。人妻ともわからないのに、そう決めていた。

「してちょうだいってよ。男漁りに来たってよ」

「どうして欲しい？　言ってみな。どんな恰好でも犯してやるぜ」

「前からか後ろからか、ひとりずつか、みんな――一緒にか？」

このとき、男たちは、女の出現に伴う奇怪な消失現象を忘れた。現実に足元に横たわる淫らな肉の塊りが、思考を灼き尽くしていた。

女がにっと笑った。

やや大きめの口が開き、白い歯が光った。

雑草が揺れた。

心もち、風が強くなったようだ。

「凄いわね、あなたたち」

背筋を虫が這いのぼるような気が男たちはした。形容しがたい声だ。
「実はね、私、人を探しているの。知らないかしら？　とても大きくてたくましい男性よ」
「そんなら、ここにもいるぜ」
ひとりが男根を摑んで、振ってみせた。
下卑た笑い声。眼の前でゆれるそれから、女は眼を離さなかった。
「知らないのね。大きくてたくましい――誰が見てもわかる男なのに」
「そういや、見た覚えがあるぜ」
と別の男が言った。女の頭上で言った。
「本当に？」
女がふり向いたその顎に手をかけ、そいつは口元に突きつけた。
口を開かない。
ゆっくりと唇の上をなぞった。女は光る眼で男を見上げていた。
「いいんだぜ。すぐに舐めなくてもよ。その方が面白え」
仲間に見られているのに興奮し、男は淫猥な言葉を吐いた。口の端から涎が伝わっている。
「おめえみてえな女は、じきに興奮してくるんだ。こいつに口元をこすられてるうちにな。

見ただけで、もう濡れてるんだろ、え？　どうだい、でかいだろ？　おめえの亭主とどっちが大きい？　答えな」

「主人のよ」

女ははっきりと言った。

「野郎」

怒りにさらにそそられて、男は女の口へ押しつけた。

すぽりと呑まれた。

仲間が薄笑いを浮かべた。

「畜生」

呻いて、ひとりが女の腿へかじりついた。内側の柔肉へ、たっぷりと舌と唾液をなすりつける。

もうひとりが女の胸をはだけた。乳房がこぼれた。たっぷりとした量感と張りに男は狂喜した。声も出さずに右側のを吸った。残りを思いきり揉みしだく。乳首を嚙み、舌でこね、隆起全体を唾液でべとつかせ、首へと舐め上げた。

「後ろを向かせろよお」

はみ出たひとりが情けない声を上げた。

「尻と肛門はおれによこせ」

「あいよ」

自分も尻が欲しい、腿を責めていた男が応じ、男と女は獣の姿勢をとった。

女は逆らわず、尻を高く上げた。口には男根を入れたままだ。身体の下では乳を吸い、性器を舌が這っている。

最後の男が着物をめくり上げた。

尻が出た。

予想通りの、白くて大きくて艶のある尻だった。これまで、夫以外の何人もの男が舐め廻し、貫き、育ててきた尻だった。

ああ、と感極まってうめきつつ、男は割れ目に鼻を押しつけた。肛門が好みだった。

我を忘れ、舌を尖らせて、皺だらけの不潔な小穴をほじくりはじめた。どいつの男根も爆発寸前だった。

「おい――何してる？　舐めるんだ」

口を犯していた男が喚いた。口腔へ彼のものを熱く収めたきり、女の舌も歯も奉仕を果たさずにいた。

姿勢を変えたために、男はコンクリートの上に腰を下ろしていた。

眼の前に女の顔がある。剝き出しの肩が見える。しがみつくようにして、仲間が乳房を吸い、敗北の印に掲げた尻から、びちゃびちゃと舌舐めずりの音がきこえた。

それだけでも興奮するには十分だが、やはり——足りなかった。

「おい」

香ばしい匂いの髪を摑んでゆすった。

そのとき——先端をぬめりが這った。

言い知れぬ刺激に我を忘れて、男は放っていた。ああ、と女のような声が出た。声も迸りも止まらなかった。女の口を汚す歓びに全身が震えた。出し切った。精液はもう出ない。別のものが男根を走った。

女の口から湯気と黄金の液体が溢れたとき、残る男たちは茫然と身をはなした。こぼれた液はコンクリを黒く染めてとびちり、独特の匂いが夜気に充ちた。

女の喉がつづけざまに上下するのを、色気狂いたちの眼は見逃さなかった。

「飲みやがった。おい、小便を飲んでやがるぜ」

「おれのも飲みな」

三人は立ち上がり、女を跪かせてその前に立った。

放出し終えた男は、その場にへたり込み、虚ろな眼で宙を仰いでいる。

「誰が先だ?——おい、答えな。おめえの胃袋の中へ小便をぶちこむのは、誰がいちばんだ? 誰の小便を飲みてえ?」

三本のわなな男の印を、女は口元を拭いながら見つめた。

顎も喉もはだけた胸元も、てらてらと濡れ輝いている。最悪の汚され方だった。
「誰でもいいわ」
女は静かに言った。呼吸ひとつ乱れていないことに男たちは気がついたかどうか。
「ようし。なら、三人一緒だ」
ごつい手が顎にかかり、押し開いた。
「ほうれ」
女の口は、わななきつつ、三本の性器を受けた。
誰もが敏感な部分に触れる舌の感触を予想した。
まさか、牙になろうとは。
異様な感覚に跳びのこうとする寸前、ぶつん、と三度音を発して、三人の男根は根本から食いちぎられていった。
股間を押さえて男たちはのけぞった。
それなのに、絶叫も悲鳴も洩れなかった。男根を食いちぎられた刹那、この世のものとも思えぬ痛みと快楽に、男たちは即死していたのである。反射的に押さえた手指の間から、血と——白っぽい粘液が滴り、コンクリを打った。
妖然と立ち上がった女の足元で、三本の、ソーセージみたいなものが、はずんだ。
それを踏みつぶして近づく女体に、生き残りの男はようやく我に返った。

瞬時に、脅えは消えた。化け物じみた人間なら、この街に珍しくもなく、男はサイボーグ手術を受けている。

「あなた――主人を知っていると言ったわね。何処にいるの？　大きくてたくましい人よ」

女は胸前を合わせながら言った。

汚れが下半身にも広がり、張りついた生地が太腿の形を露わにしている。凄まじい色っぽさであった。

「何を抜かしやがる」

男は立ち上がり、身構えた。

「てめえの男なんざ見たこともきいたこともねえ。ふざけた真似しやがって。組へ連れて帰って嬲り殺しにしてくれる」

悪罵と怒りが女の面貌に吹きつけ、ふうと消えた。手に負えないという風に。

「嘘だったのね」

女の双眸が静かに男を射た。

不意に男は逆上した。怒りは恐怖を補うためのものだったが、それも意識せず、女に近づいた。舌で奥歯を押し、舌の上に五ミリグラムの薬液をのせる。弥生町の闇医者で喧嘩用に調剤させたものだ。アドレナリンの分泌を昂進させ、恐怖を抑制する。

右手で発条の音が白い光を生んだ。刃渡り三十センチに近い大型の飛び出しナイフである。戦車の複合装甲さえ切り裂く超硬度鋼の刃が鈍い青にかがやく。

「どうだ、凄えだろう。おれはな、こいつで何人も女の腹を裂いてきたんだ。おっぱいも切り落としたし、尻の肉も削いだ。みんな最初は嫌がって泣き叫んだがよ、最後にゃ、どんなにいいかわかって、もっともっとと要求しやがったぜ。噴き出す血を、こうやって、自分で身体中になすりつけてよ。へへ」

男は真正のサディストらしかった。

ナイフをちらつかせながら、左手を上衣のポケットに入れた。

何か摑んで出てきた拳の間から、黒い触角みたいなものが何本も蠢いて見えた。

昆虫の足のようであった。

男が五指を開いた。手の平で、濃い紫色をした蜘蛛がゆっくりと身をもたげた。足の端から端まで二十センチ近い大蜘蛛は、女の方に向けた顔を上げ、小さく、キイと鳴いた。

「止めはこいつだ。昆虫街の『六四曼』ってえげつない店で買った極上の毒蜘蛛よ。ひと刺しされりゃ、身体中が毒に冒されて痛みで泣き喚く。だがな、それじゃ、終わらねえ。凄いのはその後だ。そこんところは、おめえ自分で味わってみな。殺して殺してと、地面をのたうち廻って哀願するぜ」

男は、ほれ、という風にナイフと蜘蛛を女の前でふった。

女は脅えた風も見せなかった。唇には男の放った汚液がねっとりとこびりつき、別の液体が沁みこんだ和服は、腿ばかりか、尻と乳房の重い輪郭さえも露わに示している。途方もなく異常者をそそる姿だ。

それでいて——何かが違った。

「ほれ、ほれ、ほれ」

男は二つの武器をちらつかせつつ、女の周囲を右へ廻りはじめた。

女がすくんでいるのだと思った。そうとしか考えられなかった。

もし、男が自分の深い部分の脅えを悟る余裕があったら、女がまばたきしていないことに気がついたかもしれない。

「ほい！」

いい音をたてて刃が垂直に走った。

女の帯が同じ方向に裂け、合わせめが緩むや、乱熟の女体は、乳房も秘部も夜気にさらけ出した。

傷ひとつつけなかった自分の腕に満足すると同時に、白い股間でゆれるほの昏い繁みが男の淫虐心に火をつけた。

「おれの蜘蛛さんにいかしてもらいな。あの世へ行く前に、こってりと抱いてやるぜ」

唇をふるわせつつ、男の手から黒い塊りがとんだ。

女の右乳の上に落ちたそれは、体内から芽吹いた不気味な腫物のように見えた。
蜘蛛の尻が持ち上がり、白い肌へ取り返しのつかぬ毒針を打ちこむのを、男は見届けて安堵した。
市ヶ谷の遺伝子研究所は、信じ難い種類と性質の妖物を新宿中にばら撒いたが、人為的コントロール可能な毒虫の類――「新宿蜂」や「骸骨蝶」「紫蠍」等は、最も手頃な武器となった。
虫に対して嫌悪感を持たない年少のストリート・ギャングやチンピラなら、大の大人を百人まとめて殺せるだけのテントウムシを百匹もポケットに収めて歩けたし、やや大型の生物――ゴキブリ程度になれば、毒嚢に注入する毒の種類も自由にコントロールできる上、ある生物学的な暗示によって、攻撃目標や時間さえ操作可能だったのである。
ささやかな飼育セットがあれば自宅でも育成できるし、面倒だという不精者には四谷左門町の『昆虫街』があった。百軒ほどのプレハブの店舗で常時商われる昆虫の数は百万匹とも一千万匹ともいわれる。この街の面白いところは、危険極まりない生物と同時に、その対策をも売り出していることで、店員たちが当然備えている免疫性は、血清や軟膏の形で店舗の前を飾っていた。
この男も、いずれかの形で毒蜘蛛に対処しているに違いない。
女は倒れなかった。

そのかわり、蜘蛛の身体の下から、水蒸気を思わせる煙が夜気を白く染めて立ち昇った。犠牲者に与える最後の残酷とはこれであった。

蜘蛛は毒による死を与えるだけではない。断末魔にのたうつ人間に強力な酸を注射し、その肉を溶かして吸収するのだ。二重三重の苦痛に、多くの犠牲者は死ぬ前に発狂する。発狂してから死ぬ。

女の手が動き、乳の上から黒く蠢く染みを奪い去った。

男は眼を剝いた。

女が毒蜘蛛を口腔に放りこみ、何度も歯を嚙み合わせるのを見ても、信じられなかった。かすかに喉を動かして女は小さな食料を呑み込み、歯の間に残った足をつまんで指で弾いた。

「ああ、おいしい」

と、女ははじめて、人間らしい表情と声で言った。

「でも、嘘つきはもっとおいしいだろうねえ」

その言葉の意味を理解するだけの知能が男には残っていた。

反応は二つ。——逃げるか、殺るか。

男は後者を選んだ。

うおおと叫びざま、女の心臓へナイフをふり下ろした。

チーズを切るより柔和な感触が刃先から伝わり、ナイフは拳で止まった。切尖は女の背中から突き出ていた。

男が悲鳴を上げたのは、女が苦痛の色ひとすじ見せなかったせいではなく、肉感的な腕にナイフを持つ手首を摑まれた痛みのためであった。

樹脂の砕けるような音を上げて、手首は握りつぶされていた。

形容しがたい痛みに逃げることもできずにのけぞった男の腿に、女の片手が伸びた。

大量の肉がちぎり取られるのを男は感じた。

鮮血と小水を洩らす男に向かって、女はそっと耳うちした。

「動くと動脈が切れる。黙ってみておいで。自分がどうなるか。――嘘をついた罰さ」

夜気の奥から伝わる残忍な響きに、路地をやってきた人影は、ぴたりと足を止めた。

人間の坩堝ともいえる新宿でも珍しい風体。――網代笠、墨染め法衣の僧侶である。

奇抜というだけで、こんな服装を選ぶ若者もいるが、笠にも衣にも白っぽい埃が溜まり、粗末な草履の底が、夜目にも見事にすり減っているところをみると、本物だ。笠の縁からのぞく山羊のような白髯もこれを裏づけている。

「いるか」

低くつぶやき、僧侶は耳を澄ませた。右手に突いた杖へ体重をあずけ、闇の中で固着する。

かりかり
かりかり
こんな音であった。この町では誰でも聞き慣れている。肉食獣が獲物の骨を食む音だ。
僧の手元で、石と石の触れ合う音が激しく鳴った。
左手に巻いた数珠を握りしめていた。美しいみどり——翡翠の数珠であった。
次の瞬間、法衣の裾をひるがえして、僧形の姿は空地へと駆け込んだ。
コンクリートの路面に草履の底を押しつけて止まった。
数メートル先に女の姿が見えた。
服を着ていない。
よく肉のついた熟女の背中だった。
身を屈め、たっぷりした腰と尻を僧の方へ向け、両手は口元で小さく動いていた。
かりかり
かりかり
音もそこからした。
僧の鼻が震えた。あの臭いを嗅ぎ取ったのである。それは女の足元から立ち昇っていた。
足元には黒い水溜まりがあった。
そこに、人間の部品が散らばっていた。

半ば砕かれた男の顔、指一本残っていない、肩から引きちぎられた腕。肺もあった。肝臓もあった。臓器の山のふもとで、宝石のような小さな光る玉が僧侶を映していた。眼球であった。

「やめい」

短く命じて、僧侶は右手の杖を黒土に打ちつけた。

先端の鉄輪ががしゃんと鳴り、女の背にかすかな震えが走った。

「ようよう見つけたぞ。こちらを向け」

僧侶の声に、女はしばらくの間返事をせず、あきらめでもしたのか、ゆっくりとふり向いた。

並みの人間なら卒倒間違いなしの光景であったろう。

女はハーモニカでも吹いているようだった。

かわりに人間の大腿骨を口に咥えていた。白く透き通るような骨だった。肉片は破片もない。みな、女の胃の中であろう。

「来おったか、ここまで」

女が骨を咥えたまま言ったとき、

「助けて……助け……」

泣き声の悲鳴が、少し離れたコンクリ塊の陰でした。

先刻、両足の肉をちぎり取られたやくざであった。
凄惨極まりない光景を、彼は為す術もなく凝視させられていたのだった。
仲間が貪り食われている。
三人はばらばらにされていた。実に手際のいい解体作業ぶりであった。女は長いこと修練をつんだベテランらしかった。
ちらりと男の方へ眼をやり、
「むごいことをする」
と僧はつぶやいた。錆びた鉄のような声だが、同情と嫌悪感は異様に少なかった。
「むごい？」
女が骨を投げ捨てて訊いた。笑っている。凄まじい笑顔だった。
「おまえたちが私たちにしたことを忘れたのか？」
「わかっておる」
僧はうなずいた。
両脚を奪われた男には微塵も与えなかった同情と慈しみが、人骨を食む妖女への言葉に熱く流れていた。
「だからこそ、わしは来た。おまえたちをもとの家へ戻すために」
女は首を横にふった。奇妙なことに、口元をはじめ、全身のどこにも血痕が見当たらな

い。

「私はひとりでは帰らん」

「そなたを放置すれば、この世は狂悪の巣となろう。すでに芽は吹いておるはず。まして、ここはただの街ではない」

枯れ木のような腕が上がり、網代笠の端を上向けた。

白髯がなければ、土気色の髑髏を思わせる老人の顔であった。双眸のみが、ある意志の力を光に変えて湛えていた。

「百年にわたり、死者の霊と交えたわしですら、総毛立たずにはおかぬ街。人に見せてはならぬものも、自ら見たくはないものも、闇と血とに混ぜて昼の光の下にさらすだろう。ここではそれも、美に見えるかもしれぬ。おぬしも彼奴も、来てはならぬところへ来た。おぬしらに香華を捧げて来た身として、わしは連れ戻さずにはおかぬ」

「ほほほ、どう連れ戻す？」

こう言ってから、女はもう一度笑った。違う笑い声であった。

これが女の本来の声なのであろう。

男が耳を押さえて、やめてくれ、と叫んだ。

突然、笑い声は熄んだ。

僧が右手を伸ばしたのだ。

そこから棒が生えていた。
じゃらん、と先端の鉄輪が鳴った。
女の全身が硬直した。
僧の口から低い言葉の連なりが洩れていた。真言密教の呪文かと思われた。
女がにっと笑った。
先端の鉄輪が音もなく弾けたのは、次の刹那であった。
だが——鉄輪は五つ。あと四個ある。
老僧の声が、いまは地上のやぐざにも聴き取れた。
再び女は身をすくめた。
眼に見えぬ縄で全身を二重三重に巻き締められたかのように。
それを見定めて、墨衣は前進した。
左手に緑の光がゆれている。数珠のもつ力がどれほどのものなのか、女の形相が変わった。
地を蹴った。
豊満な女体は、垂直に舞い上がったのである。
それはいい。
だが——停止するとは。

か黒い陰毛を吹く風になびかせながら、女は三メートル下の僧侶を見下ろした。
地球上の重力を無視するただひとつの技――反重力。それを可能にする怪物を、人類はまだ地球上に知らぬ。
女が左手をふった。
二個の輪が弾けとぶ。
右手もふられる。
四番目、五番目も砕ける。
「死ぬがよい。老いぼれ」
女の声は何もない空中できこえた。
泳ぐように僧侶へと滑り寄ってくる。何をするとも思えず、必ず何かやると見える飛行の怪異。
緑のかがやきが空中に生まれた。
放った数珠の中心へ、僧は木の杖を投じた。
女は何を見ているのか。いや、見えなかったのであろう。
樫の棒は狙いたがわず、女の右胸に激突した。
悲鳴が上がった。
地上の男の全身に痙攣が走る。

棒と一緒にコンクリの真上へ落下した女へ僧侶が近づいた。
勝負はしかし、つかなかった。
打撃部を赤黒く染め、女は右手をびんたのごとく流した。
ごお、と風が吹いた。
黒い風であった。闇が動いたとしか思えない。
「しまった」
老僧が叫び、身を屈めて数珠を取ろうとした。
女の手がもう一度、空気を引っ掻いた。
大気が裂け、別の、汚怪な空気が吹きつけてきたようであった。
数珠を手に、老僧は五メートルも宙をとんだ。
後方にコンクリの壁が迫る。ぶつかれば、内臓破裂を起こしかねぬスピードであった。
空中で老僧が数珠をふり上げた。
「いえええい！」
絶叫が風の唸りを打ち払ったようであった。
墨色の身体は、その場で垂直に地へ墜ちた。壁まで一メートルもない。
あわてた様子も見せず、老僧は網代笠の縁に手をかけて仰向いた。
「逃がしたか」

声には無念の情が濃い。
視線が真正面にそびえる廃墟の奥の塀を射していた。
高さ三メートルはあるそれを、女は跳び越えて逃げたのである。それも着物に後を追わせて。女体が塀の向こうに消えてから、着物も夜の雲みたいにふわふわと流れ去った。
「右の肩に金剛杖が当たったか。――当分は動かせぬどころか、立居振舞いも尋常にはいかぬ。しかし、となると、動くまい。――かえって厄介じゃの」
沈鬱につぶやき、僧は残された惨状の方を向いた。
血の海に横たわる人間の残骸と、半狂乱の生き残りを。
「南無……」
枯れ切った木乃伊のような唇から、神韻縹渺たる読経の声が洩れはじめた。
「……助け……助けて……」
苦しげな声が祈りを中断させた。
「安心せい。おぬしは病院へ行けば助かる。すぐに救急車を呼んでやろう」
老僧の言葉に、やくざは首を横にふった。
「駄目だ。やめてくれ。……組へ連れてってくれ……おれは潮組の……」

〈魔カルテD〉 追いし者

1

メフィストのもとを、朽葉刑事が訪ねてきたのは、翌日であった。
すんなりと院長室へ通され、デスクをはさんで向かい合うと、
「早速、面白い情報が入りましたぜ」
と揉み手しながら言った。笑顔が浮かんでいる。この美しい妖人ともいうべき院長と話すのが、愉しくてたまらないらしい。
魔性の美しさも、この刑事の饒舌を減らす効果はない。
「何かね？」
メフィストの問いだけが、いつも通り冷淡だ。

卓上のスクリーンから眼を離して、刑事の顔を見つめる。
朽葉は今朝、歌舞伎町の空地で大量殺人の痕跡が発見されたと言った。
「残ってたのは血の痕でして。いや、それも中和乾燥剤であらかた始末はしてあったんですが、そこは蛇の道は蛇。新型の嗅覚犬が発見しましてね。よくよく調べてみると、かなり凄いことがあったらしいんですわ」
嗅覚犬を連れてのパトロールは、〈新宿警察署員〉の日課である。
早朝巡回で発見された血痕は微量だったが、規準は超えていた。殺しや喧嘩が茶飯事の新宿においては、ある程度の量が〈感知〉されない限り、嗅覚犬は作動しないよう調整されている。
「少なくとも三人分の血が流されたらしい上、あちこちを探すと、人間の指や、肉片の付着した足首の骨なんかが二、三見つかったんです。目下、鑑識で調査させてますが――」
ここで朽葉は声をひそめて、
「――私が聞き出したとこによると、どうも、双頭犬やその他の肉食獣の仕業じゃあないらしい」
「勿体ぶることはあるまい」
メフィストは静かに言った。
「この街に潜む生物の数と種類は、半分もわかっていない。また、それらの結合によって、

新たな妖物がこの瞬間も誕生しつつあるはずだ。とはいうものの――」

秀麗な顔がある興味を隠さず、しょぼくれた刑事を見つめた。

「何の歯型だったのかね？」

「人間――といったら？」

「食人鬼の活動地域は、戸山町の都営住宅付近のはずだ。あそこは昼間動けない連中が多い」

〈戸山都営住宅〉は、「陽気な人たちの棺」と呼ばれている。広大な敷地と崩れかけた団地の建物内に居住する約二百名の人々は、軒並み、日本のみならず世界各国から流入した夜のみ生ける死者――吸血鬼なのだ。

小規模な吸血事件が勃発後、事態に気づいた新宿区役所は、大々的な討伐隊を組織したものの、〈区外〉から招いた隠密学者と吸血鬼研究家の意見（加えて一般区民からも『吸血鬼といえど、この街で生活している以上、生きる権利はある』との署名が二千人分届けられた）を容れて、この伝説的な生き物の代表と交渉の席についた。吸血行為の犠牲者が数日後には回復し、首の傷痕も消失していたことが、穏健な行動を選ばせる第一条件となった。

その結果、吸血鬼たちの多くはまともな精神の持ち主であり――伝説通り十字架を怖れはしたが、信仰団体に加入している者もいた――三度の食事は自分たちの血潮を備蓄して

いるか、正当な報酬――夜警とかバーやキャバレーの用心棒をして得た――でもって〈区外〉の血液銀行から買い入れていることが判明してここに改めて、共存共栄の路が計られたのである。

現在、〈特別居住区域〉に指定された〈戸山都営住宅〉には、区民の献血の結果が毎月配達され、夜の住人たちは、その見返りとして、不老の因子を備えた血液の、救急病院への提供を惜しまない。

もっとも、彼らの血は、受給者の現状を変え得ず、例えば癌患者の苦しみはそのまま、単に生きながらえさせるのみであり、陽光やある種の植物の発する臭素に触れると生命にかかわる化学変化を生じるため、利用者は、あくまでも生に執着する老人に限られていた。夜の伝説の生んだもう一方の旗頭――食人鬼たちにとって、昼間、無抵抗で棺に眠る彼らが絶好の獲物だったことは、言うまでもない。

このため、〈戸山都営住宅〉の住人たちは、暁から日没までの間、ガードマンたちを雇い入れ、重火器による防御を固めていた。

「残念ながら、食人鬼でもないんですよ」

朽葉刑事は、例によって、ひん曲がった煙草にマッチの火を移しながら言った。

「今日は『ゴールデン・バット』かね？」

メフィストに訊かれ、おや、という風に、

「ええ。貰いもんでして。この間の『しんせい』も実はそうなんです。私の風体を見てると、みんななんか恵んでやりたくなるんですな。ただし、ご覧の安物どまりで、『ラ・コロナコロナ』だの、『キリアージ』だの、洋煙草はからきしで。『ニュー・ハイライト』さえないんです」

「受付に言っておくから帰るとき受け取りたまえ。ただし、一カートン。喫煙は待合室か外で願おう」

「そら、何と言っていいか」

朽葉刑事はまた、揉み手した。大して嬉しそうでもないのは、やはり遠慮があるからだろう。この院長を知っているものが見れば、度外れた好意といえた。

「で、君の聞き込みによれば、指や足首の骨を残したグルメの正体は何なのかね？」

「それが。——結局、わかりません」

「煙草は取り消しだと受付に言っておく」

「待って下さいよ。——ですから、うかがいに来たんで。殺しとなりゃ、私の管轄ですから」

朽葉は左手をポケットにつっこみ、四角い銀色のケースを取り出した。シガレット・ケースそっくりの証拠品容れである。三トンの衝撃と三千度、二百度に及ぶ摂氏と零下に耐える。

指紋錠に小指を押し当てると、ケースの表面は上下にスライドした。
眼の前に置かれたサービス判サイズの写真をメフィストは手に取ってじっと見つめた。
小指の写真である。土の上において撮ったものだ。現場写真だろう。
第二関節から上――爪がこちらを向いている。
切断部ははっきりと見えた。
「他の医者じゃ見当もつかんでしょうが、先生なら、と思いましてね。いかがです？」
白い美貌を覗き込む朽葉の眼に、この男が――と思われる戦慄的な光が浮かんだが、それはすぐに消え、
「もう一枚あるんですよ」
と思わせぶりに言った。
「ほう」
メフィストは写真から眼を離さない。
そのくせ、テーブルの上へ乗せられたもう一枚を見もせず、
「同じ犯人だな」
と言った。
「やっぱりね」
朽葉はテーブルの上へ眼を落とした。

写真の頭蓋骨の頭部には、三条の溝が彫られていた。
「爪ですかね、牙ですかね？」
「断定はしかねる。――預かってもよろしいですかな？」
「勿論です。その代わりといっちゃなんですが、何かわかったら、いの一番に知らせていただきたい。隠し事なんぞなしですよ」
「承知した」
「で、この頭蓋骨の出所なんですが。――ほれ、昨日、見せていただいた凶暴なの二人。あれと関係があるんで」
「ほう」
メフィストは写真を重ねて、デスクの引き出しにしまった。
「つまり、あの二人がぶっ倒れた部屋の押し入れから出て来たのが、それなんで。ひとつじゃありませんよ。ざっと三十人分の骨が見つかりました」
朽葉が語る発見時の状況を、メフィストは無言で聴いていたが、二人が倒れたところまでくると、
「部屋の主は誰だね？」
と訊いた。
「三好ふさって中年の女で。家主の話じゃ二か月ほど前にやって来て、取り壊しの話をし

「彼はどうしたね？」
「いや、申し訳ないが、トイレの隅で眠ってもらいました。傷もつけてないし、痛い目にも遇わせちゃあいません。誓います」
「安楽死させたと誓う殺し屋をどう扱ったらいいのかね？」
「きついお言葉で。――ですが、何故、患者さんを見せて下さったので？」
「これ以上、おかしな手段で付きまとわれては敵わん」
「はっはっは」
刑事は、むさい外見とは裏腹に、高く高く笑った。
「で――ありゃ、一体、何事で？」
「わからん」
「ご冗談を。わかってると、顔に描いてありまっせ。――鬼堂会と関係があるんでしょうな。わざわざ、大久保の事務所を出た後で、〈区外〉の鬼沢家まで押しかけたほどだ」
「よくご存知だな」
「そりゃあ、ビジネスでして」
刑事は白衣のふところから手を突っこんで、
「禁煙で？」
と訊いた。

「おっしゃる通りだ」
刑事は、世界も終わりだ、という表情になった。
「あちらが休憩所だ。看病疲れの家族のために、麻薬入りの煙草も販売しているが」
「やめときますよ。――ところで、鬼沢宅じゃ、何もしでかさなかったようで」
「留守だった」
「そいつは、残念」
朽葉は頭を振った。
「それから、どちらへ？」
「おとぼけかね？」
「困った先生だ」
と朽葉は、わざとらしく溜息をついた。愉しげな光が眼にあった。
「いくら何でも『邪竜浄青会』の大元締めの家へ乗り込むとは。……小早川蒼源の野郎、ゾンビみたいになって、寝込んじまったようですぞ」
「つい、でだった」
「――――」
朽葉は絶句した。
ようやく、この刑事にも、魔界医師の途方もない正体がわかりかけて――いや、不可思

ても、それまでいいからって、越してきたんだそうです。今考えると、他に住人がいなかったからでしょう。毎晩、人間をさらってきては、ムシャムシャガリガリやってたんですな。いや、凄い話です」

「人間をさらって、と言ったな？」

「はあ」

「食した方は人間じゃないとお思いか？」

「歯型が違います」

「どんな女だった？」

「年の頃は四十前後。色気むんむんの、そのくせ冷たい感じもある美人だったそうです。家主が家賃を取りにいくと、いつも和服を着て、それが匂うようにフィットしてたそうで」

「フィットかね」

メフィストの口元が緩んだ。

「いけませんかね、私がフィットっつっちゃあ？」

「いや」

メフィストは咳払いをした。少しして、

「何か顔についているかね？」

「いえ。先生もきまりが悪くなることがあるんですねえ」
「女の出身地は？」
「一応、契約書にゃ京都の右京区になってますが、出鱈目でした。ですが、京ってのはあながち捨てられないんですよ。家主に言わせると、あれこそ京美人――だったそうで」
「家主さんは京の出かね？」
「いえ、新潟で」
「なら信頼できそうだな」
「ええ」
刑事はうなずいた。声に促すような調子があった。さっき眼の中に浮かんだ光が再び浮き上がってきた。今度は消えなかった。
「京ですよ、どちらも」
「その通りだ」
「こう言っちゃ何ですが、私とドクターと、別々に手探りで夜道を歩いてったら、同じ場所でぶつかるって気がしませんかね？」
「そうならんことを祈ろう」
「たまにゃあ、素直になって下さいよ。本当のところをひとつ、お伺いしたい」
「何かね？」

メフィストは刑事を見つめた。
黒い球形の深淵。向こう側の神秘を伝える代わりに、魂を要求する眼差し。
この医師の美しさならば、誰もが羊皮紙へのサインを拒むまい。
脳ばかりか全身が熱く溶けて、虚無のさなかへ吸い込まれるような気がして、刑事は必死に眼を閉じた。
眼蓋の奥にも双眸はかがやいた。
朽葉の頭が不意に垂れた。
メフィストは凝視をやめない。
ふう、と洩らして、朽葉は顔を上げた。
唇の端から赤い筋がくねりくねりと垂れていた。血であった。
「無料で診ていただけるでしょうね、先生？」
と朽葉はハンカチを取り出して、唇を拭った。
「深く嚙みすぎましたぜ。私を誘惑するなら、署長と女房にお伺いをたててからにして下さい」
「奥さん持ちか」
メフィストの唇が心もち歪んだ。冷厳そのものの声で、
「お引き取り願おう」

「ちょっと待って下さいよ」
朽葉はあわてて言った。
「その写真を横流ししたのも女房で」
メフィストは少し沈黙し、
「何をしてらっしゃる方だ？」
「公務員で」
「どちらへ？」
「細かな仕事をするところへ」
「はて」
「鑑識課でして」
「共稼ぎかね」
「お恥ずかしい」
頭を掻く刑事を、メフィストは奇妙な軽蔑を露わにしながら見つめた。
「で？」
と言ったとき、普段の声に戻っていた。
「ありがたい。助かりましたよ。つまり、先生がなんで小早川蒼源のところまで押しかけたかです。——いや、昨日、理由は伺いました。私の知りたいのは、本当の理由で」

「ある男が私を食いたいと言ったのだ」
「はあ」
朽葉の口が半分開いた。すぐに閉じたが、呆れたような表情は隠せなかった。
「この街で、ドクター・メフィストを食らいたい、と……」
「私は彼を病院へ連れ帰って分析した。結果はまだ発表の段階ではない。その男が『鬼堂会』の人間と知れたのは、昨日、君に話した女性訪問客があったからだ」
「何て男です？」
「ヒロ、と言った」
「何処に行きゃ会えますか？」
「『病理分析室』だ。ただし、話はできん」
「大怪我でも？」
「灰だ」
刑事は少しの間、眼を白黒させたが、何とか持ち直して、
「その件について、小早川蒼源は何と？」
「彼は何も知らなかった。――仲間外れという言葉は知っておるね？」
「所詮は〈区外〉の人間ですからな」
「その通りだ」

二人の声に、はじめて、共通の意味と口調が混じった。
「すると、ヒロってやつは、『鬼堂会』が独断で先生を狙わせた鉄砲玉？」
「でもないらしい。――昨日の女は、そいつがどうなったか確かめに来たのだ。鉄砲玉の生死を気にするやくざのボスがいるかね？」
「何かの手違いで先生を襲った。そして、組にとっちゃ、なんとしても探し出さなきゃならん男だった」
「とぼけるのはよしたまえ」
「へ？」
「私は趣味で人相見もやる。ヒロという名をきいたとき、おれは知っていると筋肉が動いたよ」
「適わねえな」
朽葉はぶつぶつ言いながら、上眼遣いにメフィストを見つめた。
「ですが、大した情報はありませんよ。ヒロって奴は本名広田陽二というチンピラで。向こうっ気は強いが、力も度胸もありゃしません。そいつが先生を食らう、か――考えてみると、大問題ですな」
「組では何をしていた？」
「使いっ走りですよ。息のかかった店に酒の肴を卸したり、場所代を集金したり」

「いてもいなくても、組に損害はかからんというタイプか？」
「そういうタイプで」
「『鬼堂会』の持ち家は、あのオフィスだけかね？」
「とりあえずは。――何処（どこ）かでおかしなことをやっているとお考えですか？　それも、取るに足らないチンピラを使って？」
「性急な断定は控えよう」
メフィストはＩＣ（インフォメーション・センター）に手をかざした。
「総務です」
女の声が言った。
「〈区外〉へ出る。ヘリの用意をしてくれ」
「承知いたしました」
「どちらへ？」
と訊（き）いたのは朽葉である。
「京都だ」
メフィストは、眼前の刑事のことなど忘れ去ったかのような声で言った。

2

黒檀のテーブルは、派手な音をたてて揺れた。
部屋中が震動するような、気狂いじみた一撃であった。
奇妙なことに、室内の男女は眉ひと筋動かさなかった。
テーブルをはさんで、神棚を背に男が二名、女がひとり。
窓を背に、男が三名。
テーブルに拳を叩きつけたのは、男ばかりの一団のひとりだった。
革張りの肘掛け椅子からはみ出しそうなほどの巨軀が震えている。
化け物じみたイメージの禿頭の表面には、青筋が亀裂のように走っていた。
怒りである。
拳からテーブルへ一部を噴出したため声には出ないが、いったん口を開けば、二十畳はある豪華な応接間が爆散しかねない。
小早川蒼源は渋い茶の和服に身を固めていた。
メフィストのもとを、朽葉刑事が訪れた時刻に、野党の看板代議士も、『邪竜浄青会』会長・鬼沢右門の隠れ家に押しかけたのである。

右門は四谷左門町の製紙工場跡に潜伏していた。言うまでもなく、ドクター・メフィストの探索を怖れたのである。

〈魔界医師〉の姿が、大久保のオフィスへ現われたとの連絡を受けたとき、すでに逃亡の用意は整っていた。

工場跡への出入りは、敷地の端にある地下トンネルで行われ、「第二次危険地域」に指定された地上施設へのこのこ入ってくる人間もいないから、気づかれる心配はない。

「わしの眼が届かぬのをいいことに、貴様ら、何をやらかした？　あんな――あんな、〈魔界都市〉そのもののような化け物を、わしの家にまで乗りこませおって」

石をぶつければ、その石の方がたちまち砕け散りそうな剛直な顔が、怒りと恐怖に引き歪み、分厚い肉片を思わせる唇はわなわなと震えて、その端から涎を滴らせた。

「喧嘩屋」と呼ばれた政治家歴四十年の曲者の情緒は完全に乱れ狂っていた。

「大変な目にお遇わせしちまって。この通りです」

彼の眼の前で、七三に分けた頭が深々とお辞儀をした。

鬼沢右門である。

背後に立つ二人の男女の姿が、蒼源の背中を固める二人のボディガードの胸に、不安の小波をたたせていた。

小柄な、血の気も失せた蠟細工みたいな顔をした男の方は、杉綾三つ揃いの左袖が力な

く垂れ下がり、濃艶な美女の眼には、修羅場を踏むのに慣れた彼らですら、顔をそむけずにはいられない凄愴なものが澱んでいる。

久保寺と八代――本名・万城目史生である。片やメフィストとの一戦で左手を失った男。片や夫の生命を奪われた女超能力者。

「てめえの小汚ない頭を下げて何になる？」

蒼源の巨軀に新たな震えが走った。

「あいつが、どうやって、わしのところまでやって来たか知ってるか？　三十人近いガードマンを、傷ひとつつけずに倒してだぞ。わしの部屋でも、三人とやり合った。どいつも、空手、柔道、剣道、合わせて十段以上の猛者どもだ。一発でやられたよ。いいか、ここのところをよく聴け。殴られたんでも、投げとばされたんでもない。あいつが、あの真っ白い男の手が触れると、身体の内部へめりこんじまうんだ。血一滴出ねえ。引っこぬいても傷痕ひとつ残らねえ。ありゃ、何だ？　え、ありゃ、何だよ？　わしはピストルを出したさ。素手で勝てるわけがねえからな。ところが、あの野郎、びくともしやがらねえ。黙って近づいてきやがる。いいか、よくきけ、土足でだぞ。この小早川蒼源の家へ靴をはいたまま上がったのだぞ。わしは一発射った。四五口径だ。使い馴れた銃だし、外していなかった。それなのに、奴は平気な顔で突っ立っておる。八発全部射ちこんだとも。それでも平気なのだ。わしの弾丸が尽きたのをみると、ひょこひょこやって来て、てめえの口元に

左手をあてやがった。黒いものが幾つも口ん中から出た。奴はその手をわしの眼の前に突き出しやがった。何だと思う？　弾丸だ。いま、わしが射ったばかりの灼けた弾丸が八発だ。手の平の中に転がっていたのだ。奴は――ピストルの弾丸を、歯で受けとめやがったのだ！」

蒼源の言葉遣いには、ごろつきのそれと、大物政治家の口調とが入り混じっていた。自制力は根こそぎ吹っとんでいた。この政治家は白昼から悪夢を見ているのだった。

異次元の戦慄の夢は、昼ひなかから彼を苛み、押さえつけても、忘れようとしても、そのこころの内側から、妖々と出現するのだった。小早川蒼源は、もう一生、もとの人間には戻れないのだった。

「話はこれで終わりじゃねえ。奴は、どうして鬼堂会が自分を狙ったのか訊いた。おまえが何処に隠れているのかも訊いた。静かな声だったよ。わしは知らんと答えた。本当にそうだったからな。すると、奴は、最後にぶっ倒したガードマンの襟首を摑んで軽々と持ち上げ、いきなり、首を後ろへ廻していた。妙な音がして、奴の首は、うしろ向きに付いた。次は手だった。足もひん曲げられた。これじゃ、死んだ方がマシってもんだ。最後に奴は、手も足も首もおかしな方を向いたガードマンを持ち上げ、その首をわしの鼻面に押しつけたのだ。ガードマンは眼を白黒させていたが、わしは死ぬか狂うかと思った。それきりで暗黒の中に沈んでしまい、気がつくと周りには誰もいなかった。奴は去ってしまったのだ。

しかし、わしの見たもののショックから立ち直るには、これから一生かかるだろう。――鬼沢」

「へい」

「なんで、あんな化け物医者を見つけてきた？　貴様、わしの眼が届かんのをいいことに、この卦体糞悪い街で何やってやがるんだ？　今度、あんな奴がわしの前に現われたら、自衛隊を動かしても食い止めてくれる。いいや、この街も貴様も只では済まんぞ」

鬼沢は頭を下げたまま身じろぎもせずにいた。

「わかったのか、おい？」

テーブルがもう一度跳ねた。

「承知いたしました」

鬼沢はうつむいたまま言った。

「では、ごらんに入れましょう」

「なにィ？」

蒼源の顔に新たな怒気が昇ったのは、鬼沢の声に横柄な響きを感じたからである。

ひょい、と上がったやくざの顔は、しかし、いつも無心に訪れるときに似た、卑屈な笑みを浮かべていた。

「こちらへ」

と立ち上がっても、腰を折っている。
蒼源もわざと重々しく立ち上がり、鬼沢を先頭にドアを抜けた。二人のボディガードは、久保寺と史生を先に歩かせ、その後につづく。おかしな素振りを見せれば、背後から一発、というわけだ。
狭い廊下を何度か曲がると、鉄扉の前に出た。
「この奥に、野郎の探してるものがございます」
ごらん下さい、という風に脇へのき、鬼沢は左手で錆の浮いたドアを示した。
「先生から頂戴した資金は、すべてこれに注ぎ込みました。それだけの値打ちはあると存じますが」
「見せてもらうぞ」
「もちろんです。ですが――他言は無用に」
「それは、中身次第だ」
威圧するように言ってから、小早川蒼源は鉄扉へ顎をしゃくった。
「開けい」
鬼沢がポケットから四角いリモコンを取り出し、真ん中のボタンを押した。
モーターの回転音と同時に、鉄扉は左から右にスライドしはじめた。
かなり厚い。二十センチはある。

蒼源の眉が寄った。

一メートルほど向こうにもう一枚の鉄扉が立ちはだかっていた。

「三重構造で」

と鬼沢は言った。はっきりと、笑いを含んだ声である。それをいぶかるよりも、好奇心と不気味さに促され、蒼源は自分がとんでもないところへ追いこまれたような気がした。引くことはもうできない。

「開けい」

と言う声に、脅えのないことを確かめ、安堵した。

鉄扉は開いた。

一行は奥へ進み、やがて、もう一枚の障壁の前へ出た。今度は真新しいコンクリートで、人間の眼の高さに長方形の窓がついている、鉄の蓋が下りていた。

異常な用心深さであった。

蒼源が扉と扉との間の壁を見つめ、

「あいつは何だ？」

と訊いた。

「ガス探知器でして」

「毒ガスでも製造しとるのか？」

「いま、窓のシャッターを開けます。入るのは、一応、内部を見てからになすって下さい」

「よかろう」

それからの行為に劇的なところはなかった。

鬼沢は無言でリモコンを操作し、窓は内側の光を洩らした。

蒼源が魅かれるような足取りで近づき、高密度ガラスに眼球を押しつける。

一秒とかからなかった。

見たものを理解するまでの時間である。

巨軀がよろめいた。

眼は見開かれていた。

小早川蒼源は二、三度、それをしばたたいたが無駄だった。目撃したものは、脳と精神の印画紙に灼きついていた。彼は一生、それを抱いて生きねばならなかった。

「なんだ……なんだ、あれは？……」

よろめきながらつぶやく蒼源へ、ガードマンのひとりが駆け寄った。もうひとりは、壁を背に鬼沢たちへ武器を向ける。

スターム・ルガー〝シャワー〟――二二口径百連発のマシン・ピストルは、その通称通り、超小型炸裂弾を迸る水のごとく標的に浴びせかける。無差別殺戮にはもってこいの武

器だ。

「ごらんの通りで」

動じた風もなく、鬼沢は言った。

「あれを見た以上、先生にも私どもの計画に一枚噛んでいただきませんと」

「無礼もの」

ボディガードの銃口が威嚇するようにゆれた。

その身体が急に前へのめった。高層ビルか崖のてっぺんで、バランスを失ったように見えた。

体勢を建て直そうと、ガードマンは右足を一歩前へ踏み出した。

ぐしゃり、という音がした。柔らかいものと固い物質が同時につぶれたような音であった。

男の足は爆発した。肉も骨もスラックスごと、ミンチ状になって跳び散った。

「よしなよ」

久保寺が言った。

拳銃を抜きかけたもうひとりのボディガードを制止したのである。

その足元で、最初のガードマンは原形を止めぬ原色の粘塊と化していた。

「こうはなりたかねえだろ。場合によっちゃ、ご主人様も後を追うぜ。話だけでも聞いて

みな」
「わかった」
死人のような声は、小早川蒼源であった。
「あんなものを見た以上、何も知らずに生きるのも死ぬことも断わる。——鬼沢、おまえ、わしが考えていた以上の男かも知れぬな」
「恐れ入ります」
鬼沢は頭を下げた。意気揚々と。
それから、
「応接間に戻りましょうか」
と言った。

小早川蒼源とボディガードを、四谷ゲートまで送り届けてから、久保寺と史生は、駅近所のラブ・ホテルへ入った。
久保寺が誘ったのである。
史生は黙ってついてきた。部屋へ入ると、壁に背をつけ、
「私——人妻よ」

と言った。

「もと人妻だろ」

久保寺は史生に近づいて、スーツの上から胸のふくらみを揉んだ。

それだけで、史生は呻いた。黙って乳房を男にまかせている。

「大した術だな。――催眠術か？」

久保寺は、舌で仰向いた女の顎を舐めた。唾液が白い肌の上に、なめくじの這痕みたいに光った。弱々しく顔をそむけながら、

「そうよ」

と喘いだ。厚ぼったい唇の間へ、久保寺の舌が入った。

史生が頬をすぼめて、それを強く吸うと、久保寺は歓喜した。

史生の手が上衣の内側へ伸びても、史生がその気になったとしか思わなかった。

四枚の唇の間から、凄まじい悲鳴が走った。

久保寺の左肩のつけ根――失われた腕の切り口を、何かがえぐったのである。

それが史生の五指だと気づいた瞬間、彼は身を離そうとしたが、今度は唇のつけ根に同様の痛みを感じ、その場に硬直した。

「ちぎれるわよ、舌」

と、唇も自分の舌も動かさず、史生は嘲けるように言った。

「いいぜ」
久保寺が苦痛に歪んだ顔で首肯した。彼の舌も動かない。
どちらも〈魔界都市〉の住人であった。
「あいつは、ビルの上から落ちたのか？」
「そうよ」
「凄え術だな。だがよ、それでも〈魔界医師〉は殺せねえぜ」
「わかっているわ。でも、奴は私の夫を殺した。借りは返さなくっちゃね」
「惚れてたのか、亭主に？」
「いいえ。いずれ始末するつもりでいたわ、お互いに」
史生の指に力がこもった。久保寺の傷口には殺菌用の人工皮膚が付着していた。鋭い爪は容易にそれを貫き、ようやく盛り上がりはじめた肉芽にめりこんだ。
くう、と久保寺がのけぞる。史生の眼は妖しくかがやいた。法悦のひかりであった。
「痛い？　痛いわよね。腕一本なくした傷口をえぐられてるんだもの。あら、濡れているわ。あたたかい。ぽちぽち垂れるわよ。いいこと教えてあげましょうか。ここへお塩を塗りつけるの。効くわよ。ショック死する人もいる。やってあげましょうか？」
「おお。よろしく頼むぜ」
久保寺の声を、史生は恍惚たる忘我の脳で聴いた。その股間に、想像を絶する刺激が走

ったのは次の瞬間だった。
「これは――これは、何？」
叫んだ途端、久保寺は舌の自由を取り戻した。
「子宮の中でとぐろを巻いているものかい？　え？」
舌舐めずりする彼の左袖は、ぐっしょりと赤く濡れている。
「そうよ、そうよ、ああ」
「蛇さ。鋼で出来た蛇だよ。そいつが、子宮の敏感な壁をこすって、針みたいな舌で、あそこを舐めてるのさ。おまけに、そいつは穴が好きでな。へへ、女にゃもうひとつあるだろ」
言葉と同時に、史生はのけぞった。蛇が肛門から侵入したのを感じたのである。氷の刺激が腸を胃を貫き、駆け昇り――
げえ、と叫んで、史生は口を開いた。
その内側からのっそりと鎌首をもたげたのは、まぎれもない蛇の頭であった。
それはちろちろと、針金の舌を吐きつつ、向きを変えては未亡人の舌を舐めた。
自分の吐いた爬虫類に口と性器を犯される女。
「嫌ならよすぜ」
勝ち誇るような久保寺の言葉に、史生は夢中で首をふった。

「駄目。やめては駄目。つづけて。もっとえぐって。もっと強く、もっと何匹も絡ませて」

「いいともよ」

久保寺の懐から、さらに何条もの針金がうねくり出、たちまち蛇の形をとるや、白い喉や、脚に絡みつき、女殺し屋の衣服を剝ぎとりはじめたのである。

小さな口がジッパーを下ろし、ボタンをはずした。

ブラウスが左右に開かれると、豊かな胸がブラの中でわななき、ブラジャーもずらされた。

スカートも、パンティも、悶える下肢からずり下げられ、史生は堪らず床に転がった。

鋼の蛇どもは、女体の扱いをこころ得ているようであった。

開いた口の上下には小さな爪が生え、それが乳首や内腿につっ立てられると、史生は狂ったように身悶えた。

「いいぜ、もっと、もっとよがりな」

久保寺は仁王立ちの姿勢で、ズボンのジッパーを下ろした。

男根を露出させ、彼はしごきはじめた。

この世のものとは思えぬ倒錯に充ちた光景であった。

たっぷりと肉のついた女体の口から、二匹の光る蛇がのぞき、左右の乳首を嚙み舐めて

いる。

腋の下、脇腹、足指の間、尻——女が感じずにはいられないところを責め抜き、いびり抜く。いつの間にか、史生の全身は妖しく濡れ光っていた。分泌される体液や涎ばかりでなく、明らかに、鋼の蛇どもが洩らす汁のせいもあった。

「おれと組むな、え？」

眼下の光景に、手の動きを早めつつ、久保寺は強要した。

「おめえひとりじゃ仇は討てねえ。おれの力を貸してやる。なに、おれも、いつまでも下っ端の——鬼沢の走り使いじゃいねえさ。でけえプランがあるんだ。そのとき、おめえが必要だ。な、相身互いといこうじゃねえか？」

「……いい……いいわ……」

史生の洩らした意味は、官能の喘ぎとも、久保寺への返事ともとられた。

それを聞いた途端、久保寺も達していた。

顔と胸にとび散った男の汚液を、史生は自ら、乳房と下半身になすりつけた。

3

メフィストの美貌が病院へ戻ったのは、二日後であった。

彼が〈区外〉へ出たと知っているわずかなメンバーは、その動揺とこれから生じる結果とを想像して、途方もない恐怖と期待の混交に胸を高鳴らせたが、メフィストは新しい入院患者の人数と容態、治療法を聞いただけで、音もなく院長室へと去った。

数分後、滝辻早苗という看護婦が、禁断の院長室を訪ねた。

早苗は眼を閉じていた。何処を向いても、青白くかがやく美貌が、瞼の隙間からそっと入りこんでくるような気がする。

院長と直接会話する看護婦たちの常套手段だった。面と向かって、三十秒も正常な会話が成り立たないのである。

「用件は何かね？」

彼女だけにかけられる声は、美しく冷たい海のように頭の中で鳴った。

「病院の中で、おかしなことが起こるのです」

「それは私でなく、警備員に話しなさい」

「駄目です」

早苗は口をつぐんだ。身体が小刻みにゆれている。脅えだった。

「――駄目とは？」

「警備員じゃ、駄目なんです。他の先生でも――院長でなければ……」

「君以外にそれを知っているものは？」

「いえ」

「話してみなさい。看護婦の精神状態も院長の管轄下にある」

「ありがとうございます」

直立不動の姿勢を苦にもせず、滝辻早苗の話したことは、異形の物語であった。

この病院に、おかしなものがいるというのである。

二日前――メフィストが〈区外〉へ向かった晩、滝辻早苗は夜勤であった。

夜のナース・センターには看護婦二人でつめる。調剤や病室との連絡はコンピュータが行う。それでも人間が当直に立つのは、万が一の場合、顔を見ただけで患者が安堵感を覚えるためである。

零時を廻った頃、相棒をセンターに残して滝辻早苗は巡回に出た。

全く個人的な行為である。

病院全体は、コンピュータ連動の無数のモニター・カメラでスキャンされ、わずかな異常でも警備課へ通報がいく上、ロボット・パトロールが一時間おきに巡回に当たる。

不穏な侵入者には、高圧放電、麻酔ガス、麻痺銃が浴びせかけられ、それ以上の敵には容赦なくレーザー砲や超震動波が放射されるのだ。

それを知りながら、早苗が広大な病院中を廻るのは、純粋な癖であった。異常無しを自分自身で確かめないと安眠できないのだ。

手首に埋めこまれたインディケーター・リングで、モニター連動のコンピュータに本人だと証明しながら、早苗は外科病棟を巡り、内科の建物も廻った。

異変に気づいたのは、最後の難物――地下の死体置場の前を通りかかったときである。

〈置場〉は〈安置室〉とは異なる。

メフィスト病院において、後者はあくまでも患者のためのスペースであり、従って、滅多に使用されることはない。

それに反して〈置場〉には、やはり間接的に患者の役に立つもの――解剖用、ないし、部分提供用の死体が並べられる。多くの場合、警察のモルグや区の特別鑑察医務院から流れた、引き取り手のないやくざやゴロツキの遺体だ。無縁仏として葬るなどという麗しい風習は、〈魔界都市〉にはない。

中身が中身――服を着たままのもある――だから、ここだけはいつも足早に通りすぎるのだが、早苗は足を止めた。

「音が聴こえたんです。こんな――」

かりかり

かりかり

硬いものを嚙むような音。

妖夢のごとき情景が、早苗の頭に灼きついたのは、場所柄のせいだろう。

だが、それから後の行動は、ある意味で看護婦の鑑とも無謀とも言えた。

「どうして、インディケーター・リングで警備室へ異常を報告しなかったのか、今考えてもわかりません。ロボット・パトロールの巡回時間でもありませんでした。いいえ、私の行動は逐一カメラがとらえていたはずですから、看護婦がたったひとりで深夜の〈死体置場〉へなど入ったと知れたら、五秒とたたずに警報が鳴り響き、パトロールが駆けつけるはずなのです」

それに、〈置場〉のドアは超合金製の密封式である。よく考えたら三十センチの厚さを通して、音など聴こえるはずもないのだ。

インディケーター・リングを操作し、早苗は内側へ入った。

もともと、メフィスト病院がどんなところか承知で就職した娘たちだ。胆はすわっているし、感情抑制訓練も受けている。それでも、〈夜〉と〈死者〉と〈密室〉の醸し出す原初的恐怖は克服できない。

——人間の証だ。

ドアが開くと、同時に、音は熄んだ。

早苗は足を踏み入れた。

また。

かりかり

かりかり
ドアが開くようリングを調整し、早苗は音のする方へ歩き出した。
影がおちている。入室と同時に、照明が点いたのだ。
壁際にも、床の上にも、ガラス・ケースが整然と並び、人の形を呑んでいた。
死体の状態ごとにグループが分かれ、奥の方の分は、人間の頭をつけたバラされた鮪のごとき惨状を呈している。
音はその少し手前、かろうじて人間の形を保ったグループのケースから聴こえていた。
そのとき——
ふっ、と照明が消えた。
漆黒を防いだのは、ドアから洩れる廊下の光だった。
コンピュータの故障か？　あり得ないことであった。
闇色の陽炎のごとき光の中で、早苗ははっきりと見た。
ケースの前にうずくまる人影と、足元のものを。
かりかり
かりかり
「和服の——女のひとでした。猫か何かみたいに身を屈めて、両手をこうやって口にあてて……」

かりかり
かりかり
薄明りのさなかでも、手にしているものははっきりと見えた。
「骨でした。人の骨でした。女の人の足元に、誰か倒れていました。それでわかったのです」
誰かとは死体だった。
早苗には不思議と、そのかたわらに立つケースの中身がはっきりと眼についた。だから、床の死体が凄まじいまでに破損しているのがよくわかった。
両手はもぎとられていた。腹部はぱっくりと口を開け、虚ろな空洞が見えた。中身は入っていなかった。右足も消えていた。女がかじっているのは、そこの骨らしかった。
耳の奥で音が鳴った。
かりかり
かりかり
それが急に熄んだ。早苗の心臓は凍りついた。食人鬼の噂はきいている。射殺された実物を見たこともある。だが、これほどの恐怖は感じられなかった。
女はしばらく動かずにいた。
見つけたのは誰か、これからどうすべきか考えている風だった。

早苗も動かなかった。手のインディケーター・リングは、脈搏や血流、体電圧の異常を寸分もらさずコンピュータへ送りつづけているはずであった。じきにロボット・パトロールが来る、と思った。

「見たわね」

と、女が言った。早苗の方を見もせずに、そのくせ、気づいているのだった。この事態をどう処理すべきか、やっとわかったのだろう。

「あなた、どなた？」

早苗はしっかりと訊いた。訊いたつもりだった。本当はこうだった。

「……見ません。何も……」

「嘘」

と女は言った。どうして立ち上がるの、と早苗は思った。このまま座っていて。私のことなど放っておいて。

からん、と音がした。

女が骨を捨てたのである。

立ち上がった。

「見たわね。あなたは見た。——おいで」

手が上がった。

手招くつもりなのだろう。そうなったら。
奇妙なことに、恐怖が早苗の呪縛を解いた。
後ろを向いて走った。
追ってくる気配はなかった。
ドアもあっさり抜けた。
廊下を走り、手近の階段を上がった。自走路もエスカレーターも使わなかった。
一階の標示を見て、ようやく落ちついた。
ふりむいたが、人影はない。廊下にへたりこんだ。
このとき、気がついた。
首の右脇に白い足が見えた。首だけ動かして左を向いた。そこにも足が立っていた。白足袋と病院のスリッパをはいている。
両肩に誰かが乗っているのだった。
顎に冷たいものが触れた。手であった。力が加わるのがわかった。
首をどうかされる。
このとき、不意に力が消えた。
耳もとで世にも美しい声がささやいた。
「今晩、見たことを他人に話したら」

その先は言わず、顎にかかる感触はかき消えた。
両肩の足も消えていた。
早苗は床の上に座りこんだまま、前方を見つめた。何も考えられなかった。自走路だけが、白い水の流れのように音もなく走っていた。
その奥から、ロボット・パトロールのものらしい影が近づいてきた。

「君の超感覚レベルは？」
聴き終えてからメフィストは尋ねた。声に変化は見られない。
「2（ツー）です。最高は『気感応』」
レベルとしては最低値だ。気感応とは、物体が放つ「基礎的存在感」の認知能力をさす。2では〝勘がいい〟程度だ。早苗が、ドアを隔てて骨をかじる音を聴きつけたのは、相手の放つ〝気〟が凄（すさ）まじい故の〝幻聴〟であろう。
「女の顔は見たのかね？」
「はい。でも、まるっきり覚えていません」
早苗は落ちついた声で言った。話しているうちに、恐怖は淡雪のように溶けていた。二人の関係は、医者と患者になっているのだった。

「覚えていない？」
「はい。はっきりと見ました。それなのに、憶い出そうとすると何ひとつ浮かんで来ないのです」
「その後で〈置場〉へ行ってみたか？」
「はい。ガードの人と一緒に。でも、何もおかしなところはありませんでした。——夢ではなかったと思います」
「この件を誰かに話したかね？」
「いいえ」
「ここへ来る間も、その女は何かをしでかしたかもしれん。我が病院の看護婦としては致命的なミスだ」
氷のような声に、早苗はうつ向いた。
「君には護衛をつける。——本日付けで退職したまえ」
早苗は眼を丸くした。
「——そんな」
「私の考えでは、それくらいはしなければならん相手だ。ガードマンと一緒に外国へでも行くといい。退職金と旅費は経理で受け取りなさい」
訳もわからず院長を見つめ、看護婦は茫然とうなずいた。

「滝辻くんだったな」
とメフィストは静かに言った。他の人間が聴いたら卒倒しそうな、あたたかい声であった。
「はい」
「外科第二病棟専属。勤続年数四年。賞罰は無し」
「ご存知だったのですか？」
「二年前、看護した新大久保の稲垣（いながき）みやさんを覚えているかね？」
「はい」
「半年ほど前に亡くなった。最後まで君の看護に感謝していたそうだ。私も鼻が高い。何処（どこ）へ行っても、これを忘れるな」
「はい」
早苗の声は誇りにみちていた。
「行きなさい。外にガードマンが待っている」
早苗は眼をしばたたき、背を向けた。
奇妙な通路の手前で、娘はふり向き、胸に手をあてて何か言おうとした。
声は出なかった。
すぐに彼女は頭を下げ、足早に通路を歩み去った。

無表情にそれを見送ってから、メフィストは「憑依病棟」を呼び出し、二日前に入院したアパートの家主と現場監督の容態を尋ねた。どちらも昨夜、衰弱死していた。

4

〈死体置場〉の中で、木村道子は身震いした。

滝辻早苗が女と遭遇したケースの陰である。

早苗の話が凝縮された情報と化して脳裡に閃く。

道子はそれをメフィストからきかされていた。院長室へ彼女を呼び出し、すべてを話してから、メフィストは、今夜の彼女の予定を訊いた。

「何も」

正直に答えると、

「今夜、付き合ってくれないか？」

と来た。

来ましたよ、と道子は天にも昇る心地で思った。予想もしなかった、と言えば嘘になる。少なくとも、期待していたのは確かだった。

メフィスト院長じきじきのお呼び出しである。口には出さないが、誰もが願っていたこ

とだ。理想の実現といってもいい。

何故選ばれたのか、尋ねるどころではなかった。

三度つづけて、「はい」と叫んだ。

「承知していただいて感謝する」

とメフィストは言って、場所と時間と「内容」を指定した。

道子は溜息をついた。

変わったデートにはちがいない。

それでも断わらなかったのは、院長の申し込みだからという雇用関係に基づくものではなく、メフィストという男性の申し出だったからだ。黒い瞳の奥にきらめくある光に会うと、女は蛇に魅入られた美しい昆虫のごとく金縛りになって、いかなる理不尽な要求にも従ってしまう。

無論、メフィストはそれを「悪用」はしない。彼の行動の一部を担当させる女性は、到底「並み」の女ではあり得ないからだ。

彼とベッドをともにできる女は、伝説の魔女のみであろう。

それでいて、なお。

道子はドアの前で耳を澄ませた。ロボット・パトロールは来ない。メフィストがそう仕向けたのだ。

滝辻早苗と全く同じ条件でその女に会えと、メフィストは命じた。
その代わり、自分は必ず何処かで君を護衛している。女に気づかれぬよう君にも告げないが、安心して行きたまえ。
考えてみれば、無責任そのものの台詞だが、道子は従った。
何故そんなことを命じられるのか、さっぱりわからない。メフィストも説明はしなかった。
午前三時。
早苗が遭遇した時間だ。
道子は周囲を見廻した。透明なケースと、その中に封じ込められた死体の山。メフィスト病院の看護婦でなければ耐えられる環境ではなかった。
内側で待つ方がいいだろうと闇の中に身を潜めてから二十分近く経つ。右手は制服のポケットに入っていた。
来ないのかもしれない。では、明日だ。道子は胸を撫で下ろした。
すう、と部屋の中が白くかがやいた。自動照明ON。ドアが開いたのだ。
光は二、三度点滅し、すぐに消えた。
ドアからの光が影に当たっていた。
そこに黒い影が漂ってきた。

和服を着た女であった。
道子はポケットから麻痺銃（パラライザー）を抜いた。メフィストに手渡された品である。近距離ならアラスカ罷（ひぐま）もダウンさせ、後遺症は残さない。
女は二度、室内を見廻し、にやりと笑った。
道子は総毛立った。人の顔がこんなに凄（すさ）まじい笑みを浮かべられるものだろうか。
女はすう、とケースに近づいてきた。
道子は身をすくめた。
気配が近づいた。行きすぎて、と念じた。止まった。ケースの反対側であった。
それきり、沈黙。
道子の心臓は鉛に変わりつつあった。
裏にいる。
様子を窺（うかが）っている。
道子のことに気づいている。
耳もとで美しい声が言った。
「何をしている？」
悲鳴を撒（ま）き散らしつつ、道子は身をひねった。同時に跳（と）びすさった。舌を巻く体さばきであった。

麻痺銃の銃口を向ける。
いない。
驚愕は、着地と同時に戦慄に変わった。
「何をしている？」
声は背後できこえた。
ふり向かず、道子は手だけ逆向けにして射った。
手応えはなかった。
ほほ
と、女が笑った。
ほほ　ほほ　ほほ
ほほ　ほほ
ほほ
その声を、何と形容したらいいのだろう。
道子は戦慄した。
怒りが腹腔に狂った。
哀しみが瞼を濡らした。
気がつくと笑っていた。



ほほ　ほほ　ほほ
ほほ　ほほ
ほほ

果てしない虚空へ届くような、あるいは虚空が笑い崩れているような声であった。
脅え怒り哀しみ笑いながら、道子は背後をふり返った。
ドアの陰へ、和服の裾が消えるところだった。
うす紅の色彩が鮮麗に眼に沁みた。
後を追った。
せめて、笑い声の理由を知りたいと思った。
〈死体置場〉から跳び出した女は、一気に階段を駆け上がった。
身体はゆれなかった。地を踏む衝撃を感じていないのだ。足は空中を滑っていた。
ひと気のない夜の病院を、和服の女が翔ぶ。
カメラが捉え、ロボット・パトロールの眼が捉え、そして、何も映さなかった。
女は、「外科病棟」の七階へ辿り着いた。
廊下を走った。
「751」のランプが青くかがやいた。
ドアが開き閉じた。

室内に忍んだものがいないのを確かめるように、光る眼を一巡させ、帯に手をかけた。みるみる着物は剝げ落ち、息を呑むような肉感的な裸身が露わになった。乳房も尻もこぼれ落ちそうだ。

ロッカーへ着物を押しこみ、ベッドの上に置いた寝巻に着替えるまで、三秒とかからなかった。

上掛けはめくってある。

ふわり、と身体が浮いて、シーツに横たわった。音はしなかった。

上掛けを胸元まで引き寄せたとき、チャイムが鳴った。

左手に巻いた通話器へ口を寄せ、女は、

「どなたでしょうか？」

と尋ねた。

「院長です」

ぞくり、とするような声。

「何の御用でしょうか？」

「ご挨拶がまだでしたね。外出しておりまして」

「もう休んでおります。明日に願えませんか？」

「京へ行って参りました」

女の眼がぼう、と燃え上がったようであった。
「お入り下さい」
通話器のボタンを押して、女はドアのロックを外した。
長方形の空間に、世にも美しい姿が刻まれ、それは音もなく病室へ入ってきた。
「メフィストです」
「二木里でございます」
女は丁寧に頭を下げた。妖しい雰囲気など破片もなかった。
「こんな時間に、何の御用でしょうか？」
と顔を上げて訊いた。
「二日前――私が外出してから入院なさいましたな。それから二晩にわたって、うちの看護婦が深夜、お目にかかりました。奇妙なところで」
「あら」
「そして、私も――今夜」
「……」
「ご存知ないかもしれんが、廊下の端の闇にまぎれておりました」
「これはこれは」
女――二木里もえは低い声で言った。ある決意をこめた声であった。

「で？」
「原因不明の胃痛で入院なすったそうだが、担当医も重態と報告してきた。当分、ここにいらっしゃるといい」
「ご親切に」
「夜出歩くのも結構。なにをなされても当病院ではとがめだてをしない。ただし、どのような形であろうと、病院の不利益になる行為は許さん」
メフィストの声に力がこもった。
女の身がぞくっと震えた。
「死体ならばともかく、スタッフや患者が消えれば悪い噂が立つ。患者は治療を求めてここを訪れ、我々は治療をして送り返す。この関係は誰にも崩させません。たとえ――汝でも」
「承知いたしました」
と、もえは首肯した。
「結構」
とメフィストはうなずき、
「では、ごゆるりと養生なさるがいい」
澄んだ闇のような言葉を残して部屋を出た。
こちらも、滑るような足取りでエレベーターのところへ行き、指輪をきらめかせた。

ドアが開き、メフィストは指輪の操作で〈死体置場〉の階へと降りた。
半開きになったドアの前に、若い娘が倒れていた。
メフィストは近づいて、横を向いた顔を眺め、鼻先で指を弾いた。
ぴしり、と鼻でも打たれたような気になり、木村道子は眼を開いた。
「先生!?」
自分が誰の腕の中にいるかを知り、大あわてで身を起こした。
「具合はどうだね？」
「か、快調です」
と答えてから、道子はいきなり、左右を見廻した。
「おらんよ。あの女には、いま、会ってきた」
「やはり——病院の中に？　患者ですか？」
「外科の二木里もえだ」
「やっぱり」
「気がついていたかね？」
「事件が起こった日から今日までに入った入院患者の中で、和服の似合う女性といえば、二木里さんしかいません。——あの人はどこに？」
「病室だ」

「どうなさるおつもりです？」
「放っておく。世話はロボット・ナースの専属にしよう」
「どうしてえ!!――あの人は一体何者なんですか？」
「わからんかね？」
「ええ」
「まあ、よかろう。今夜はご苦労だった。すぐ夜間病棟で検査を受けたまえ。明日から一週間、有給休暇だ」
ぽかんと聞き終え、少しして、道子は眼を丸くした。
「あ、ありがとうございます！」
と、とびあがり、
「でも、あの女を野放しにしては」
「彼女は彼女なりに、ここへ来たがる理由があったのだ。それはいずれわかるだろう。特に、君にはな」
「どういうことですの？　それに、今夜、私を選ばれた訳は？」
「行きたまえ」
そう言って、メフィストは背を向けた。
ひるがえったケープの白い裾が、決定的な拒絶を示していた。

歩み去るその表情は、一看護婦との俗事など遠く離れ、幽明境の論理に想いをはせているように見えた。

〈魔カルテE〉　幸運な刑事

1

もと日赤産院近くにオフィスを持つ暴力団「潮組」は、歌舞伎町近辺を縄張りとする弱小組織のひとつだった。

構成人員は十五名。弱肉強食の〈魔界都市〉で何とか生き延びてこられたのは、組長・潮武光の才覚と、抗争用のサイボーグ手術、武器購入に惜しまず金を使ったためであるとされる。

だが、真の理由はもうひとつあった。

メフィスト病院での怪事の翌日、縄張巡りに出掛けた潮が蒼白になったのは、このせいであった。

やくざの大鬼門――もと区役所跡に建つ病院――を彼方に望む一角で、潮はささやかな喧嘩に出喰わした。

「ありゃ、真二じゃねえか？」

と若いのに訊くと、へえ、と返ってきた。

「血の気の多い野郎で困ります。止めてきますわ」

「いいから、つづけさせろ。おれの縄張でおかしな真似をした罰だ。足腰が立たなくなるまで可愛がってやりな」

のんびり言うほど勝敗ははっきりしていた。すでに地面へ這いつくばっていた相手は、一方的に蹴りまくられ、真二は唾を吐きかけたのを止めにして、潮たちの方へやってきた。

「どうしたい？」

と兄貴分が訊くと、

「なあに、おれが縄張荒しを見張ってたら、聞こえよがしの声で、〝潮武光の女房は子分と出来てる〟なんてわめき散らしてやがるんで、ヤキ入れてやったんでさ」

と、媚びるように潮を見た。

「ふざけた野郎だ」

潮は激怒した。

「おい、事務所へしょっぴいてって、こってりと可愛がってやりな。いざとなったら、

〈新宿流砂〉へぶちこんじまやあ済む」
「へい」
と二人の子分が駆け寄り、この野郎、起きねえか、とののしるのを、潮は満足そうに残忍な笑顔で見物していたが、急に、
「おい、ちょっと待て」
逆上してるといってもいい声で叫んだ。
「この人――朽葉――」
やくざ二人が愕然と立ちすくんだとき、
「遅いねえ、潮さん」
ぶっ倒れていた男から、何とも嬉しそうな声が漂ってきた。
左手がひょい、と空中へ持ち上がり、どうやら最初から袖口にでも隠していたらしい黒革金文字の手帳が得意気にふられた。
「殺人課の朽葉だ。おめえら全員、殺人未遂で逮捕する」
くたびれたような口調で言い終えると、もっそり立ち上がった男の口には、ひん曲がった煙草がへばりついていた。
「この野郎――まだ懲りねえのか」
吐き捨てるや、凶暴な怒りを全身に宿して突っかかろうとする真二の腹へ、凄まじい勢

いで兄貴分の拳がめりこんだ。
百五十馬力に達するパワーが炸裂し、真二は即死した。
それを素早く肩に担ぎ、
「寝かして参ります」
と駆け出す兄貴分を、朽葉は呆れたような顔つきで眺めた。
「確かに二束三文の生命だがな。——あの野郎、必ず首を吊らせてくれるぞ」
筋金入りのやくざも震え上がるような声で言い、
「それはそれだ。おい、潮、結構な子分を飼ってるじゃねえか」
と、上衣の泥を払い落としながら、上眼遣いにやくざの親分を見つめた。
「知らなかったもんで」
潮は顔の汗を拭いた。
「なにとぞ、穏便に」
「そう焦るなよ。——おい」
朽葉は顎を突き出した。
「火だ！」
潮の叫びに、子分のひとりが大あわてで金張りのライターを取り出し、点火した。
大きく息を吸いこみ、蒼白のやくざの顔へ紫煙をたっぷりと吹きかけて、朽葉が言った。

「腹が減ったな」
「その辺でご一緒に」
「なんでそう気を遣うんだよ、潮？」
朽葉は面白そうに訊いた。
「おれの評判は知ってるんだろ？　新宿署はじまって以来の能無し刑事だ。体力、知力ともに最低。やくざに喧嘩で勝った例しもねえ。逆に拳銃で射たれたこと六十回以上、ナイフの刺し傷九十箇所、手榴弾を投げつけられたこと二十二回、流砂へ放りこまれた回数九度。表彰ゼロ回。幸運にも見放されてやがる」
「それでも、あんたは生きて帰ってきた。その代わり……あんたを狙った奴あ、みんな死んだ。……ひでえ死に方で。……そいつらの組も徹底的につぶされ、跡にはペンペン草も生えやしねえ。当人ばかりか家族ん中にもひどい目に遇った奴が大勢いる。……あんた、幸運に見放されたんじゃねえ。悪運がついてるんだ。それも、とびっきり強え奴が」
潮の眼は刑事の形をした死神を見つめているようだった。
「おれにとっちゃ同じことさ」
と朽葉は片手で胸を押さえた。
「両肺は五度ずつ取り替え、心臓もつくりもんだ。ま、肝臓と腎臓をやられた日に、どっちも人工のものが完成してたのは多少、幸運だったがな。それを今日、おめえとこの餓鬼

が派手にやりやがった」
「だから……手違いだったんだ」
「おれにゃそうは思えんがな」
「一体……何が望みだ？」
潮はついに口にした。
「おれの首か？　女房の肉体か？――好きなものを持ってってくれ」
「困ったな」
朽葉は喫ったばかりの「ゴールデン・バット」を足元へ落とした。
「そんなつもりじゃないんだよ、変に気ィ廻すなって」
「わかってますよ。何でも言ってくれ。こりゃ、純粋にお詫びの印だ」
「ふうん」
朽葉は勿体ぶった。潮と子分どもは震え上がっている。それを眺めるのが楽しくてたまらないのだった。悪趣味な男だが、やくざ側にしてみれば、組の存亡がかかっていた。
「風の噂だが、おまえさんたちのところに、おかしな客人がいるそうだな？　今どき墨染めの衣を着て、翡翠の数珠なんか持ち歩いてるなんざ、只者じゃねえ。そりゃ、高野山の大上人にちがいない」
「何のこってす？」

「とぼけなさんなよ」
と朽葉は、メフィストに言われた口調もそのままに再現し、
「昨日、署のそばで野良豚に小便ひっかけられてな。叩っ殺して豚カツにしてやろうと思ったら、外谷ってでぶ情報屋の飼豚だった。おれに食わせるんなら自分が食うってんで、交換条件が今の坊主の話さ。何処にいる？」
「うちじゃねえ。――病院だ」
「病院？」
「えらく衰弱してな。放っとくと死んじまう」
「男は何という？」
「暁雲」
「何処から来た？」
「訛からして京都かその近辺だな」
「京都ねえ」
朽葉は何気なさそうに言った。
「こいつはどうしても会いにいかにゃなるまいな。その前に、おまえのところに世話になる経緯、きちんと聞かせて貰おうか」
横柄な刑事の宣言に、潮組組長は一も二もなくうなずいた。

2

新宿五丁目の、小さな総合病院の前へ、月輪を思わせる姿が立ったのは、それから二時間後であった。

汚れたポスターの端がこびりついた電柱も小便の染みが濃い土塀も、生ぐさい空気も、すべて現在の汚れを失い、玲瓏たるかがやきに包まれる。——そんな、天上の浄化を思わせる美しい影であった。

ドクター・メフィスト。

リムジンは少し離れた幅広の道路に停車させてある。

「こいつあ、どうもです」

門前に立っていた朽葉刑事が、ぺこぺこしながら近づいた。

「わざわざお越し願えて恐縮です。いや、たとえ家族に引き合わせなくても、先生にゃ会わしておかなきゃならんと思いまして」

「君には借りがある」

メフィストは素っ気なく言った。

「あれ。——じゃ、興味はありませんか？」

「他の病院の患者にはな」
「それが、どんなに珍しい症状でも？」
「そうだ」
メフィストの本心であったろう。
救いを求めるものを死しては帰さず、求めぬものは、眼前で悶死しようと一瞥も与えない。
だからこそ、彼はこう呼ばれる。
〈魔界医師〉
と。
「何にせよ、事件は解決した。おめでとう」
「とんでもない」
朽葉は手をふった。
「こいつあ、家出人の捜索じゃないんで。殺人犯の逮捕なんですよ」
「もう伺ったよ」
「京でも一、二を争う名刹の主人が、突如、家人を惨殺して行方をくらました。よくあることですが、原因は毎度のことながらわからない。ひとつ、お力添えを――」
「新宿警察には、尋問能力がないのかね？」

「仰せの通りで」
「妻帯者への協力はご辞退申し上げる」
「そんなあ」
朽葉は落胆そのものの表情をつくった。今にも死にそうだ。この男のどこに、やくざを脅えさせる器量がひそんでいるのか皆目わからない。
「とにかく、会うだけは。よろしく頼みますよ」
二人は門をくぐった。
緊張の面持ちで待つ院長へ、メフィストは優雅に一礼した。
待合室の患者や廊下の看護婦が全員、金縛りにあってしまう。
廊下を案内もなしで歩きながら、
「院長にゃ事情は話してあります。ここは、その筋の連中がよく利用する病院でして」
「逃亡の怖れはないのかね？」
「院長には他言無用で、と伝えてあります。私もまだ会っちゃおりません」
「新宿のやくざと通じた院長が、しゃべるなと言われて従うとはな。——私は刑事の能力を見る眼がないらしい」
「は？」
「いや」

歩きながら朽葉は潮組と入院患者の関係をざっと説明した。メフィストは終始無言だった。

朽葉は足を止めた。木のドアであった。名札には『山田』となっている。

「ここです」

ノックしようと踏み出しかけた肩を、メフィストの手が押さえた。

凄まじい勢いであお向けに引き倒された刹那、ドアがおびただしい黒点を吹いた。

空気が灼かれ、向かい側の窓ガラスが霧のように砕け散る。

小口径弾の猛射だった。

ドアには巨大な穴が穿たれ、SMG短機関銃を構えた人影がのぞいた。超小型消音機の銃口からは紫煙の筋が立ち昇っている。

メフィストが進んだ。朽葉を引き倒しても自分は伏せるなどという不様な真似はしない。自らにふさわしい行動だけを選ぶのだろう。

固い音をたててその足元へ散らばる小塊を、朽葉は眼を丸くして見つめた。

ドア向こうの影が弾倉を抜いた。それが宙にある間に、停滞もなくもう一本を叩き込む。

メフィストがドアノブに手を伸ばした。

「先生！」

シャンペンの栓をぬくような音が連続した。毎分三千発の猛打だ。小口径といえども近

距離なら、軽く人体を引きちぎる。
弾丸はすべてメフィストのケープに吸いつけられた。
白い生地は波ひとつ打たなかった。
纏うものにふさわしく、喧騒を忌うて。
きらめきが、飛滴のごとく床へ散った。
生地に受けとめられた弾頭であった。
敵は無謀ではなかった。効果無しとみるや部屋の奥へ身を翻した。
開け放された窓と人のいないベッドをメフィストは見て取った。
黒い強化ビニール・スーツに身を包んだ影が窓へと飛んだ。
その足で小気味よい音が弾けた。
メフィストの右手が伸びていた。その手にかかるケープは、白い泉水のようであった。
ひょい、と引くと、男は腹這いにベッドへ落ち、勢いよく床へと引きずられる。
光る一線が二人を結んでいた。
その正体は見極めないまま、男は運命を悟った。
右手のSMGを引き寄せ、銃口を口へ突っこむ。
後頭部が西瓜のような色を見せて剝がれ、舞い狂った。ドクター・メフィストを敵に廻したものの、敗北の掟だった。

患者ならざる死に行くものへは眼もくれず、メフィストは窓の外をのぞいた。
二つの人影が裏庭を木戸の方へ移動していく。寝巻姿の方は、黒くたくましい影にもたれていた。木戸は開いている。出た。
「ドクター」
と塀の向こうで朽葉の声が飛んだ。
「廻ります。——ゆっくり来て下さい」
裏木戸がどこかは、病院へ来たとき調べてあった。
角を廻ったとき、滑らかなエンジン音が朽葉を仰天させた。
「畜生」
吐き捨てて、スタートしつつある前方の車体へと走った。
ブルー・グレーのセダンである。
全力疾走に移ったとき、朽葉はある決意を固めていた。
うおおと自分へ吠えながら車を抜いた。前へ廻った。
エンジンが吠えた。小石をはねとばしてダッシュする。
朽葉はにげなかった。
思いきり息を吐いて跳んだ。眼は開いていた。真ん中へ出る勇気はなかった。車の右角を選んだ。

猛烈な衝撃が腹腔を裂いた。やったと思った。胃か腸かわからないが、どこか破裂したのは間違いない。これくらいやりゃあ——。

車は彼の右足を踏みつけて走り去った。

「折れたな。……気前がいいこった。あいつら……これで逃げられっこねえ」

両手を地面に突いて上体を起こしたとき、かたわらに黒い影が滑り寄った。

リムジンのドアが開き、黒ずくめの運転手が降り立った。

「どうなさいました？」

「わからねえ。おれのことはいい。——追いかけろ」

「待ちたまえ」

別の声が、安堵を運んできた。

「私の診察を受けるかね？」

「よろこんで。——こ、光栄です」

顔前にかざされた白蠟のような手を、朽葉は陶然と見つめた。

指のサイズ、手の平とのバランス——おれが見ても完璧とわかる。この医者をつくったのは、造形の神と契った女だ。そして、美の神と浮気してやがる。

メフィストの手は数センチの距離を置きつつ、朽葉の顔から足先へと触れた。

「打撲と右膝骨折だ」

「そんな。――内臓がパンクしてますよ！」
「していないと困るのかね？」
「そらあ、もう」
「歓迎すべからざる患者だな。――同乗したまえ」
「轢いてってくれませんか？」
「愚かもの」
メフィストが立ち上がると同時に、朽葉の身体も持ち上がった。メフィストの手でないのを、残念がっている自分に気づき、朽葉は少し焦った。
幸い、席は後部だった。リムジンは路上を滑りはじめた。
「追いつけますか？」
「どうだね？」
メフィストが運転手に訊いた。
「はて」
「何とかしてくれよ、運ちゃん」
朽葉は檄をとばした。やっぱり、ど真ん中へとび出せばよかった。
不意に身体が重くなった。スピードを上げたのだ。
風景が絵具のように溶けて流れ去る。

朽葉は震え上がった。
住宅街のど真ん中で百六十キロは出ている。
「先――先生」
「彼は慣れている」
「いつもやっとるんですか!?」
「君はおかしな特技をお持ちのようだな」
「は？」
「少し調べさせてもらった。失礼だが、この街で長生きできるようなタイプには思えなかったものでね」
「照れるじゃありませんか」
朽葉は肩をすくめた。筋肉の動きが腹に伝わり、彼は悲鳴を上げた。
「君のような人間を何と呼べばいいのか、私にもわからんのだ。運がいいのか悪いのか？」
「見りゃわかるでしょうが。うおおお」
「この負傷が重ければ重いほど、担当の事件は早目に解決する。死にさえすれば、犯人のいない事件でも、犯人が名乗り出てくるだろう」
「あんた、本物のメフィスト先生ですか？」

メフィストが返事をしないので、朽葉は何故かぞっとした。
窓の外を眺めようとしたとき、
「見つけました」
運転手が主人に似て無感情な言葉を吐いた。
「どういたしましょうか？」
「どうするかね」
「そりゃ、おカマ掘ってもとっ捕まえにゃあ」
「というわけだ」
「承知いたしました」
リムジンがスピードを増した。
メフィストは前方を見つめた。
目ざす車は二十メートルほど先を疾走している。
明治通りであった。じき、大久保通りと交差する。
左右は中程度のビルと商店街だ。歩道には露店も多い。車は意外と少なく、相手も器用に列の間隙を縫っていく。
車は大久保通りを右へ折れた。若松町、原町を貫通し、やがて神楽坂へ至る。
リムジンも追随した。

周囲の光景が変じたのは、この刹那であった。
朽葉は窓外に鮮明な青空を見た。綿のような雲が浮いている。雲は眼の下にあった。
車は板のような狭隘な岩壁の上を突っ走っていた。
朽葉は右足に力をこめた。激痛が走った。夢ではない。
「メフィスト様」
「止まらず走れ」
「んな、無茶な」
ぐん、と車体が前方へ傾いだ。
落下の掻痒感が足底から湧き上がってくる。
落ちていく。
朽葉は悲鳴を上げた。
声が終わらぬうちに、鈍い衝撃が車体を受け止めた。
腹膜を激痛が襲ったのは数秒後であった。悲鳴を洩らしつつ、メフィストの様子を窺う。
「逃がしたか？」
「左様で」
「先生――こりゃ、一体……？」
朽葉は会話に加わろうとした。

「万城目卓という殺し屋には妻がいた」
メフィストが相手をしてくれた。
「あの女ですか!?」
「恐らくはあの車に乗っていたのだろう。大久保の一件で、私と君がつるんでいると知ったのかもしれない」
「つるむ？」
高雅な院長の口から洩れた下世話なひと言が、必ずしも似合わぬわけでもないことを知り、朽葉は軽いショックを味わった。
赤ちょうちんで一杯やれそうだ。——そんな、親しげな感慨がかすめた。
「潮組と鬼堂会の関係をご存知か？」
「いやあ。——潮組ほど孤立主義の組はないんで油断してました。安全保障条約は内密に結ぶに限りますな。——しかし、あの女が出ばったとなると」
「職業は夫と同じかね？」
「夫より凄腕です」
「では、ここで決着をつけるつもりだろう」
朽葉は窓の外に視線をとばした。
「まだ空中ですな」

声は愉快そうとは言えなかった。
「一体、どうなっとるので？」
「女の幻術だ。あのまま走っていれば、数センチの溝に落ちただけで、アルプスのてっぺんから地上へ激突したのと同じことになったろう」
「すると、術は解けたんで？」
「そう見えるかね？」
「いえ」
腹と足を泥みたいに取り巻く熱い痛みをこらえつつ、朽葉はさらに眼をこらした。
光る筋が虹色のきらめきを帯びて四方へ走っている。
それが空中へ張り巡らされ、車の落下を食いとめたと、すぐには信じられなかった。
網——というよりも、無際限の空中に張られた巨大な蜘蛛の巣といえばよかろうか。
メフィスト病院特注のリムジンは、微細な針金の糸に支えられ、高さも知れぬ超高空に静止しているのであった。
「ひとつの術が破られても解けない以上、次の手を打ったか」
朽葉も幻覚術の基礎ぐらいは心得ているとみえる。
しかし、その手は何か。そして、メフィストの対抗手段は？
車内に沈黙を落としたまま時だけが幻の世界へ流れ、しばらく経った頃、

「メフィスト様」
と、運転手が静かに主人の名を呼んだ。
「あれも、先生の術でございますか？」
「いや」
即座に答えたところをみると、メフィストも気づいていたらしい。
へたりこんでいた朽葉が上体を移動し、シートの上から前方を覗きこんだ。
眼だけが大きく剝かれたせいで、沈黙は破れずに済んだ。
遠くかすむ針金のきらめきを踏みつつ、こちらへ近づいてくる醜悪な黒い塊りがあった。
「蜘蛛だ」
と朽葉は妙に落ち着いた声で言った。
「その通り」
と運転手が同意した。
女の第二の手とはこれであった。
それは夢の中でしかあり得ぬ、汚怪な色彩に塗りたくられた、途方もなく巨大な蜘蛛であった。

3

朽葉は痛みも忘れた。

〈魔界都市〉に生きるものの常として、彼も怪異との遭遇には慣れている。幻術使い、妖力師とやり合ったこともある。新宿署に配属されたものは、それから五日間、この街特有の犯罪について特別ゼミを受けなければならない。わずか五日なのは、それ以上、警官を遊ばせておく理由がないからだ。加えて、新宿署――〈魔界警察〉の国家公務員たちの給料は、〈区外〉の平均値に比べて基本給で五十パーセント高いだけだが、危険勤務手当は四百パーセント――四倍に上るのだ。

しかし、朽葉はその額すら忘れた。

「先生、あれにやられたらどうなりますかね？」

「どうなるとは？」

朽葉の質問はやや、医者の興味を引いたとみえる。

「つまり――おっしゃったじゃないですか。この世界は女の術の中の世界――夢だって。大抵の夢は、崖から落っこちりゃ醒めますぜ」

「君の足は痛まないか？」

「いえ、ズキズキしてます」
「それは現実の痛みだ。従って、この世界で与えられる痛みも傷も現実となる」
「すると、ここで死んだら……？」
「死ぬ」
はじめて、朽葉はメフィストを「こん畜生」と思った。
「何とかなりませんか。――先生？」
「それは君の担当だろう」
メフィストは情ない口調で言った。
「どんな角度から検討しても、これは公僕が民間人を守る場面だ。医師が刑事のために努力してもはじまるまい」
「そんなあ」
朽葉は哀れっぽい声でメフィストの反応をうかがい、即座にあきらめた。
その途端、激痛が腹部を襲い、彼は両手で患部を押さえて呻いた。
いきなり閃いた。
逆転の一打が。
ゆっくりと顔を上げた刑事の眼には、得意絶頂のひかりが宿っていた。
「先生」

「わかっている」
メフィストは相も変わらず無表情に言ったが、その奥に、苦笑ともうんざりともつかぬ翳が一瞬動いたのを、朽葉は見逃さなかった。
「私は患者でした」
「承知だ」
「先生の治療もちゃんと依頼しましたぜ」
「受けた」
メフィストは窓の外を眺めてから言った。
「運のいい方だ。――出るぞ」
「承知いたしました」
この医師の命令は絶対なのか、運転手は危ないとも言わず、メフィスト側の後部ドアを開いた。
「せ、先生――大丈夫ですか？」
代わりに朽葉が腹を押さえ、苦しげな声で訊く。
「幸運を祈りたまえ」
メフィストはふり向きもせず外へ出た。圧縮されたような、くぐもった唸りが鼓膜を打つ。

青空だ。絵に描いたような、と言ってもいい。抜けるような、と言ってもいい。彼方を流れる雲も、背伸びしたくなるような解放感を与えこそすれ、青い悠久のイメージを崩しはしない。

だが、これは偽りの空なのだ。

見よ。何処とも知れぬ高みから、永劫に果てのない下方へときらめきつつ縦横に流れる鋼の糸を。

リムジンはそれに支えられ、そして、一匹の蜘蛛が不気味で凶暴な毛むくじゃらの足をこすりこすりやって来る。

距離は二十メートル程か。

メフィストの髪がゆるやかに後方へ流れた。風がある。透明な風が、この医師に触れるとかがやくようであった。

双眸は空の青を映し、グロテスクな生物の色彩を捉えた。

どちらも、この医師には同じかもしれなかった。空も蜘蛛も患者ではないのだ。

飄然と歩き出したのも、蜘蛛に興味を引かれたと見えないこともなかった。

自らが明言したように、鋼の糸は彼が張ったものなのか、大地を行くがごとく従容と進む足取りを支える筋の一本は、数瞬前まで存在しなかった品であった。

蜘蛛も止まらなかった。

メフィストを圧倒する小山のように眼前に迫る耳を覆いたくなるような音が空気に満ちている。

蜘蛛の鳴き声であった。

長さ一メートルはありそうな大顎がせわしなく開閉し、その先端に毒腺の小穴がはっきりと見えた。ひと噛みで牛どころか象も即死。人間なら毒が廻る前に、首をちぎられておしまいだ。

頭部も乗用車ほどのサイズの胴も剛毛で埋めつくされているが、黒い地平を思わせて左右に伸びる四対の歩脚の表面で震えるそれは、胴の怪異な色彩と異なるだけで、遥かに現実的で生々しい印象を与えている。黒い針の海だ。

ドクター・メフィストの針金細工を蜘蛛の巣と見たてたか。だとすれば、洒落た真似ともいえた。

蜘蛛の歩みが止まった。ひとりと一匹の間には五メートルの間隙があった。

メフィストは進んだ。

蜘蛛は後退した。

獲物のあまりの美しさに、自らの姿を憶い出したのかもしれない。

何処からともなく、白い糸状の線が降ってきた。

現実の蜘蛛とは異なり、背中から吹き出す蜘蛛の糸であった。

それが触れた刹那、リムジンのボンネットは白煙を噴き上げ、天井は溶けた。
「面白い芸をする」
そう言うと同時に、メフィストの周囲で、固いものが弾けとぶような金属音がつづき、白い姿は大きくバランスを崩した。糸の毒が針金の糸を腐蝕させたのだ。
軽やかにメフィストは宙に舞い、何のつもりか、着地したのは蜘蛛の大顎の前であった。蜘蛛は下がった。下がりながら糸を放った。猛毒を含んだ粘着繊維は、びらびらとメフィストを押し包み、例外は許さぬのか、全身を白煙で包んだ。
声はその中からきこえた。
「ここまでは、おまえたちの世界。だが、これからは私の夢だ」
白煙は消えた。
絡みついた糸をメフィストが払うと、それはあっけなく滑って足下に落ち、粘ることもできずに、だらしなく蜘蛛の背から垂れ下がった。
おびただしい白い蔦が、風になびいた。
メフィストの言葉に含まれた意味は、この幻夢世界の法則を支配する力の意味か。
為す術もない蜘蛛を無感情に見据えながら、ドクター・メフィストは、靴先で自らの踏む糸を蹴った。
糸の切れる音が一気に蜘蛛めがけて押し寄せ、脅えたものか後方へ下がる怪生物の後ろ

に踏むべきものはなかった。

突如、消失した糸の端から、極彩色の影はゆっくりと傾き、風に吹かれる黒いゴミのような動きで地上へ落ちていった。

何条かの糸が噴き上がり、針金に絡みついては滑って、すぐに主人の後を追った。世界の覇権はドクター・メフィストに移ったらしかった。

何処かで誰かが笑った。

女の声であった。

メフィストの視線が胸元に落ちた。

白いケープの上に、ぽっと真紅の突起が生じた。

見る間にふくれ上がった。

薄皮が剝がれるように、頂点から外側へめくれ上がったのは花びらであった。

空気に芳香がみちた。

純白の医師にふさわしく、その胸に絢爛と咲き誇るのは、真紅の薔薇であった。

メフィストは手首を見た。そこにも薔薇があった。肩を見た。色彩が開いていた。手首に咲いたつぼみは刺青のようであった。

この医師ならば、誰ひとり驚きも嘆きもせず、新たな美しさを加えたと噂するだろう。

不意に香りが変じた。

光る線がメフィストを貫いていた。空中を渡る針金であった。
薔薇は消えていた。別の赤がメフィストを染めている。四肢を貫通した針金がもたらす出血であった。
ドクター・メフィストの周囲を血の香りが巡った。
風が吠えた。
暗天と変わった空の何処かで、また女の声が笑った。
「どうした、ドクター・メフィスト。この世界はあたしの夢。見事、脱け出してみるがいい。そこから落ちればおまえの四肢は原形も留めず砕け散り、そのままでおれば血を失った蠟人形と化して死ぬ。そこにいるがいい。それがおまえにはふさわしい」
その通り。
風狂う暗黒の空で、ただひとり紅に染まって立ちつづける白い医師。かがやくばかりに美しいだけに、凄絶など遥かに遠く、妖艶とすらいえる姿であった。
メフィストの右手が動いた。肩も肘も手首も自らの針金に貫かれている。肉が裂け、骨がきしんだ。構わず、彼は右手首の針金を引き抜き、血まみれの手をそれに近づけた。いつの間にか、一本の鋭いメスが握られていた。
そして、引き抜いたばかりの針金の一か所に刃をあて、軽く切り離すと、メフィストは長さ三十センチばかりのそれを口に咥えたのである。

虚空を動揺の気が伝わる。

針金を投じるのに右手をふりかざすなど、この医師は考えもしなかったに違いない。

ひそやかな吐気に押されたそれは、メフィストのみがわかるスピードと精確さで飛翔し、やがて、遥か彼方から女の苦鳴が雪崩のように近づいてきた。

けたたましいクラクションがそれに混った。

メフィストはふり向き、リムジンへと歩き出した。その美貌で正体を知ったのか。耳障りな音はぴたりと熄んだ。

大久保通りの真ん中に止まった車体の背後で、他の乗用車が鈴なりになっている。幻夢の中で耳にした圧縮音は、進行を促す警笛だったのだ。

「ご無事で」

と、朽葉が安堵とも怖れともつかない表情で言った。

「治療は終わった」

メフィストはそっとシートにもたれた。確かに悪夢から脱け出すための手当だったにはちがいない。症状と治療とを熟知した名医が、手術の結果にさしたる感動を示さぬことが、メフィストの沈黙と無表情の理由なのであろう。

「どちらへ？」

運転手が訊いた。

敵の車は影も形もない。

「戸山住宅へ廻したまえ。――あそこの住人に往診を頼まれている。後は、こちらの刑事さんにおまかせしよう。幸運の女神に愛されたようなお方だ。何とかして下さることを期待する」

〈魔カルテF〉　鬼女の舞う夜

1

「何だあ？」
鬼沢右門はなまこみたいに太い眉を思いきり吊り上げた。
「おめえ、気は確かか？」
鬼沢の眼と言葉の前に、久保寺が腰を下ろしていた。
左脇に史生が立っているが、こちらは当面の対象ではなさそうだ。
「正気です」
と久保寺は青ざめた顔でうなずいた。
「しかも、生まれてこの方、これくらい頭を使って出した結論はありませんや」

「なんで、そんな真似をしたがる？　仇討ちか？」

そう言って、鬼沢は一の子分の左肩を眺めた。白地に黒いグレンチェックの背広は、そこから袖口までだらしなく垂れている。中身は大久保の事務所でドクター・メフィストに切断されたままだ。

「それもあります」

久保寺はうなずいた。精気のない顔は仕方がない。痛みは薬で何とでもなるが、体力の消失と精神的ショックは、無理に押さえようとすれば、感心しない副作用を生む。

「いや、そのせいだと言っていいでしょう。ですが、このままじゃ、いくらおれが復讐しようと思っても、あの医者にゃあ手も足も出せねえ。認めるのは癪だが、桁が違いすぎるんです」

「そりゃあ、な」

鬼沢は執念の漂う顔から眼を逸らして、小さく認めた。

「しかし、それはおまえだけじゃないぞ、久保寺。どんな化け物だって、あの医者には手が出せない、出しちゃならんてのが、〈魔界都市〉暗黙の掟のひとつだ。おれも一度、遠くから見たことがあるが、いや、魂が吸いとられたかと思ったよ。それくらいいい男だ。だがな、すぐに思い直した。あれは人間の美しさじゃあない。別のものが人をたぶらかすときにかぶる仮面だ。あの下には、ひと目見ただけで人間が首をくくりたくなるようなも

のが隠れているんだ。だから、下手に思いつめるんじゃない。こっちの計画も今のところ順調に進んでいる。あの医者が首を突っこんできたのは——何のためかは今イチわからない——確かだが、正面から牙を剝くのは利巧なやり方じゃない。騙し騙しだよ、久保寺。あいつには、これがいちばんいい手だ」

鬼沢の言葉の中に、隠しようのない恐怖が流れるのを久保寺は感じていた。メフィストに関する部分であった。片肩を失ったやくざは、再び闘志を燃やした。

「ですから、考えてみて下さい。あいつの化け物ぶりが喧嘩のときだけ発揮されると思うのは間違いです。ですから親父さんみたいに手さえ出さなきゃってことになる。化け物なら、ここを見つけるときも、化け物じみた力を働かすって考えられませんか？　万が一、そうなった場合、どうやってあいつを食い止めるんで？　あいつがドアの向うにやって来たら、責任者は病気です、お引き取り下さいっても、通用はしませんぜ」

鬼沢は痛いところを突かれたことを知った。それは彼自身考えていた恐怖の現実であった。ドクター・メフィスト——この男を敵に廻した組織が、どのような無惨な目に遇ったかは、いやというほど耳にしている。そのうちのいくつかは、彼自身も叩こうとして、手を出しあぐねていたグループだ。正直言って、今回の仕事を決めたとき、鬼沢が抱いた唯一の不安材料は、西新宿に住む人探し屋と——ドクター・メフィストの介入であった。

しかも、人探し屋の方はあくまでもビジネスにこだわり、依頼人がいなければ動き出し

はしないが、この美しい医者の方は、何のつもりかわからない——全くの気まぐれとしか思えぬ動機で足を運んでくる。

それが気に入らないのなら、射ち合い、殴り合い、殺し合い——怪我人の発生しそうなトラブルを生じる仕事はよほど用心せねばならず、かといって、懐を肥やすためには、大きなスケールのごたごたほど抱えこまなければならない。

〈魔界都市〉に生きるやくざたちが最も苦悩するジレンマがこれであった。

苦り切った顔でソファにもたれた鬼沢を、久保寺は痛切な眼差しで見つめた。

かたわらの史生を指さし、

「こいつを見て下さい。亭主ともども『民衆の敵』ナンバー1と呼ばれてた殺し屋だ。それが、初対面で亭主は殺され、ついさっき、おれと組んだこいつの妖術も、あっさり破られちまったんです。度量がちがう、桁がちがうんですよ、親父さん。たったいま、あいつがここへやって来たら、おれたちが何をやっても、全ては根こそぎ、あいつの『治療』を受けることになるでしょう」

意識して脅かすような口調を採用した子分の話を、鬼沢は黙然と聴いていたが、不意に身を乗り出し、

「わかった」

と言った。

「だが、おまえ——久保寺よ。それがどんな結果を招くか承知の上だろうな？　後で人間に戻りたい、と泣いても、おれには何もしてやれないんだぜ」
「わかってますよ、親父さん。おれは別段、人間なんぞに戻りたくはねえ。要はメフィストの野郎を始末できりゃあいいんで。この腕の怨みがおめおめと生きてる原動力になっているんでさ」
「研究室の方でも、意識を留めておく段階までは成功したようだし、——よかろう。で、いつやる？」
「いつでも」
「今からじゃ、どうだ」
鬼沢がにやりと笑った。
久保寺も笑い返す。歯を剝き出した顔はもう、人間以外のものに変じたようであった。
しかし、この小さなやくざは、人間以外の——何に自分を変えようというのか？
「願ってもねえ」
と彼は震え声で言った。
それから、史生を見つめて、
「もうひとつお願いが——いえ、もうひとり」
と言った。

鬼沢の顔が、今度こそ驚愕と恐怖に彩られた。
「おい」
と言うのが精一杯だった。
妖艶な女妖術師は、ゆっくりと頭を下げた。
「すべて承知していますわ。あたしにとっても、あの医者は夫の仇。よろしくお願いいたします」
鬼沢は答えず、ドアの方へ向かった。なぜかいらだたしかった。これから処置するようなことを、自ら望む人間のこころに、冷酷なやくざの親玉は本気で腹を立てていた。せめて、人間以外のものを相手にできるのは、同じ存在だけだ、と思うしかなかった。
十数分後、三人は「工場」のコンクリート扉の前に立っていた。
最後のドアであった。ここを開けば、鬼堂会の秘密が眼の前に広がる。
内側の連中に連絡はとってあった。
「前にヒロって組員がいた」
鬼沢は美しい殺し屋の方を、どこか痛ましい眼で見ながら言った。
「こいつが、ある間違いでここから洩れたガスを吸ってしまったのさ。組を逃げ出し、結局、メフィストとやり合って灰になっちまった。ああなっても敵わなかったんだぜ。いいのかい、あんたは？」

「心配して下さるの？」
史生は艶然と微笑した。凄まじい笑顔だった。鬼沢は股間がこわばるのを感じた。もっと早目に知り合っておけば……
まさか、そこへ、白い女の手が上から触れようとは。
「ほほ、男の考えていることはみんな同じ。女と別れるとなると、一度だけと思うのね。もし、生きてこのドアを出てこられたら、お相手してさし上げますわ」
「ああ、よろしく、頼むよ」
と鬼沢は、自分でも馬鹿な挨拶だと思う言葉を口にした。
扉横のスイッチを押す。これは信号で、ドアは内側からしか開かないシステムだ。
扉についた窓の向うでは、すでにこちらの確認が行われているはずであった。
モーター音は地の底から響いてくるように聴こえた。
コンクリートがゆっくりと右へずれていく。
「達者でな」
と鬼沢は低い声で別れを告げた。

真っ白いベッドの上に横たわった男は、臨終の床にいる患者を連想させた。

ベッドに固定された竿状の支持架が、ギプスに包まれた右脚を吊り上げ、はだけられたパジャマの胸もとには白い包帯が巻かれている。一見して、やくざ者のさらし風で、巻かれた男もそう見えないこともない。ただし、出世の道には程遠い三下の兄貴分クラスだ。

しかし、この男の奇妙な実力は、誰よりも手ずから彼を診察した院長が知っている。

朽葉刑事は退屈しきっていた。

昨日、新宿五丁目の小病院で、敵の乗用車にはねとばされた上、踏み砕かれた膝の治療中である。院長の診断は三日間絶対安静。骨折ぐらい、今日ではその程度の療養で治るのか、この街だけ、あるいは、この病院だけ特別なのかはわからない。

どちらにせよ、無精でのっそりした外見に比べ、意外に行動的な朽葉にとって、耐え難い時間なのにかわりはなかった。

「おかしい」

さっきから飽きもせず繰り返している言葉を、彼はまた口にした。

「こんな筈はねえんだ。おれともあろうものが、右膝をへし折って全身打撲ともなれば、逃げる車ぐらいはとっ捕まえられる筈なんだ。畜生、どう考えてもおかしい。先生は嫌がったが、やっぱりあのとき、もう一度轢いてもらって、内臓破裂ぐらい起こしゃよかったぜ」

彼は恨めしそうな眼で、空中の右脚を眺めた。

「ここはひとつ、思い切って、完全に――」

何やらとんでもないことを考えついたらしい。——そこへ、かすかなチャイムの音がした。ベッドに取りつけられたインターフォンから、

「お邪魔するよ」

ドクター・メフィストの声が響いてきた。

「あ、こら、どうも」

ドアが生んだ長身の影を、刑事は恍惚と見つめた。ひょっとしたら、どんな病気でも、この院長の来診をひと月も受けたら、完治しちまうんじゃなかろうか。

「具合はどうかね？」

メフィストはひとりだった。

「何とか。いやあもう、えらい目に遇いましたわ」

「その割りに効果はなかったようだね」

「はは」

朽葉は軽く頭を掻いた。脂肪じみた髪からフケが雪片に似て舞った。

「もう、ご存知で」

と、探るように訊く。

メフィストは、うなずいた。

「しかし、幸運と呼ぶべきか不運と言うべきか。少なくとも、君の怪我の程度と舞い込ん

だ幸運とがバランスを保っているのは確かなようだ。二年まえ、腹を射ち抜かれたときは、駆けつけた救急車が逃亡中の犯人を跳ねとばして、君の重傷を無駄にはしなかった。それから七か月後に右胸を刺されたときは、緊急輸血用の血液を街頭採血する際、何のつもりか犯人が献血にやってきて逮捕された。調書によると、君と取っ組み合いの最中にニンニクの匂いをかぎ、後でたらふく餃子を食った。そのせいで、血が余ったから、少し分けてやろう。――そう思ったらしい。大したものだ。君が死んだら、どんな大事件でも解決するのではないかね。一度、やってみるか？」

「冗談はよして下さい！」

刑事は、震え上がった。それから、少し興味を引かれた様子で、

「先生なら――生き返らせてくれますか？」

メフィストは首をふった。

「残念ながら。ただし、動かすだけなら」

「ゾンビですか!?――願い下げですよ。女房と寝ることもできないなんて」

「それが君の限界か。もう少し骨のある男かと思っていたが」

メフィストは露骨に軽蔑の視線を浴びせ、

「女の尻に導火線があり、真に絶望を感じた場合、それに火を点ければ一秒で燃え尽きるようにできていたら、人類は三万年前に、神の座へ王手をかけていたかもしれんな」

「そんな無茶な、先生」
朽葉はあわてた。メフィストの声は極めてシリアスであった。本気で女性の臀部に火を点けて廻る、いや、導火線を植えつけそうに思えた。やりかねない男だ。
「うちの女房は抜かして下さい」
「それでも刑事かね」
メフィストは冷え冷えと言った。嘆かわしいと言うも愚か。——そんな口調である。
「よくそれで幸運が舞い込むものだ。神は間違っている」
「それが患者に言う言葉ですか」
朽葉は絶望をこめて言った。
「失礼」
メフィストは咳払いをした。本気で後悔しているらしいと感じて、朽葉はまたあわてた。
「ところで、鬼沢右門の行方は突き止めたのかね？」
院長の次の言葉は、慈愛にみちていた。
ただし内容がそぐわない。
「私は病人でして」
朽葉は少し憤然と言った。
「私は医者だ。そこに電話もある。例外的に外部へも通じる。気がつかなかったかね？」

「いいえ」
朽葉は苦笑した。
「目下、本署へ照会中です。じき、連絡が入るでしょう。この足さえ自由なら、私がじきじきに動くんですが」
「今回は不運のみか。――習い性にならなければいいが」
「先生」
朽葉が呻いたとき、メフィストがふと宙を仰いだ。
「どうしました？」
「断定が早急にすぎたか。――君を過小評価しすぎたらしい。お詫びする」
「だから、どうしたんです？」
「電話を拝借してよろしいか？」
「ここは先生の病院でして」
メフィストはベッドに取りつけたハンド・トーキイを取り上げ、
「いまの連絡を繰り返したまえ」
と言った。
「院長先生にご面会です。万城目史生さんとおっしゃる女性が、ご老人を連れて」

2

名前だけではなかった。女の顔は確かに、鬼堂会の事務所で出喰わした女殺し屋のものであった。

しかも、同行の老人は、つい先日、五丁目の病院から拉致された京都名刹の住職と、病室の宙に浮かぶホログラフィを見て探していた朽葉自身が証言したのである。

私も行きますと血相変える刑事を押し留めて、メフィストは診察室で史生と面会した。

住職は集中治療室へ急行した。

「ようやく二人きりになれたわね」

と、史生は診察室の椅子の上で艶然と微笑した。

凄まじい色気がある。

前は妖艶なだけだったが、いま、眼の前の椅子にかけた女体からは、蜜のような色香がしたたり流れ、メフィストの全身を、いや診察室すべてをくらくらするような成分で染め上げようとしていた。

それが、突然消えた。

どこか寒々とした本来の診察室に、ドクター・メフィストと女は向かい合っていた。

「さすがね、ドクター。――〈魔界医師〉」
「前は精神の病いだけだった」
とメフィストは静かな声で言った。
「だが、今は別の治療を受ける必要があるな。住職よりも、むしろ君の方が医者は喜ぶだろう」
史生は立ち上がった。
それだけで、空気に濃密な香りがこびりつくようだ。この女が留まった場所は、それがどんな短時間でも、清浄な空気の入れ替えを行わねばなるまい。もっとも、ひと呼吸でも女の吐気の混った空気を吸いこめばどんなことになるか。
史生はチンチラのコートを椅子にかけ、自分は黒いワンピースを着ていた。
素肌に墨を塗ったのではないかと思われるほど、きわどいカーブが露わに浮き出ている。下着はつけていない。乳房の豊満さも、先端の突起も一目瞭然だ。医者を色気狂いにする使命を帯びてきた、色情協会の刺客であった。
メフィストの前までくると、史生はゆっくりと後ろを向いた。
最も悩殺的な部分――ヒップを大胆に突き出す。
薄いシルクを通して、肉のかたまりとくびれまでがはっきりと見えた。
誰もいない診察室で、医者に尻を見せくねらせる妖艶で肉感的な女。

何が起こっても不思議はなかった。

「医者が喜ぶとおっしゃったわね？——先生はいかが？　女のお尻に興味はなくって？　ただのお尻とはちがうのよ」

「色情霊に取り憑かれた患者のための病棟もある」

メフィストは、ゆっくりと淫らな動きをつづける黒い肉に眼をやりながら言った。いつもと変わらぬ冷静で分析的な声である。

その首に、白い蛇が二本、ねっとりと絡みついた。

メフィストの眉がわずかに吊り上がった。

熱い肉がたわわに膝の上に崩れた。

「色情狂？　あたしが？——このくらい冷たい女は世の中にいないわよ」

メフィストの口元で、甘く、饐えた息が蠢き、赤い唇を裂いて濡れ光る舌が爬虫類のようにのぞいた。

「あたしが何をしに来たか訊かないのね、お医者さん」

女はゆっくりとメフィストの頬に唇を近づけた。

「あなたを食べに来たのかもしれないわよ、こうやって」

白い歯が医師の耳たぶを嚙んだ。

「では、訊いておこうか」

「もう、あなたと戦うのはやめにしたのよ、あたし」
「……」
「夫のことだって恨んじゃあいないわ。あいつは殺人狂だった。正直言うと、別れてほっとしているの。しかも、絶対に後くされのない別れ方でしたしね」
いつか、メフィストの耳は濡れていた。女の涎だった。舌は耳孔に入りこみ、ねっとりとえぐりはじめていた。
それなのに、女は声を出した。
「あなたには感謝していいくらいよ、ドクター。そんな男の人が、腰の抜けるほど、いい男で、しかも、あたしや組織なんか及びもつかない力の持ち主だったとしたら、どう？　鞍替えしたくなるのも当り前じゃなくって？　お願い――裏切り者と呼ばないでちょうだい。手土産は二つも持参したわ。あの坊さんと――あたし」
女の舌はたっぷりと涎を分泌しつつ、メフィストの頬を辿った。
膝の上でつぶれた尻は、およそ人間には不可能としか思えないいやらしい動きをつづけている。
右手がそっと離れた。鋭い爪先で首筋を撫で、ケープに隠れたたくましい胸をこすり、一気に股間へと降りた。
「あなたに手を触れた女――あたしがはじめてね。ドクター、あたしがあなたのものじゃ

ない。あなたがあたしのものになるの」

そして、それ自体蛭みたいに見える赤い唇は、欲情にわななきながら、メフィストの唇に吸いついたのである。

重なった四枚の肉の間から、次の瞬間、うっという呻きが洩れた。

跳び離れたのは、黒い布に包まれた柔肉であった。

両眼が形容しがたい憎悪を込めて、メフィストの右手を見つめ、人さし指の上できらめく細い光の輪に焦点を合わせた。

丸めた針金であった。

どこからか忍び入ったそれが、史生の乳首をちぎれんばかりに締めつけたのである。

「やはり、色情狂かしらね、あたし」

片手で右の乳房をゆっくりと揉みながら、史生は微笑した。

「どうなさるおつもり？」

「どうして欲しい？」

「あなたの口からお伺いしたいわ、ドクター・メフィスト」

史生はゆっくりとドアの方をふり向いて言った。

どんな部屋も、こんな男に占められたいと願うのかもしれない。

白いケープのゆれる長身の影は、ドクター・メフィストであった。

「今度は本物ね」
「いつから気づいていた？」
「最初から――と言いたいけれど、この唇が頬に当ったときに。男と女が相手のことを理解するには、やはり、肌を交わすのがいちばんよ」
「私の質問はドクター・メフィストと同じだ」
椅子にかけた自分の姿へ、ドクター・メフィストは顎をしゃくった。
「そうね。あなたをあたしのものにするまでこの病院へ置いてくれない？」
「よかろう。私にとっても、興味深い患者だ」
「主治医はあなた。じっくりと診て欲しいわ」
「ひとつだけ言っておく。この病院を根こそぎ吹きとばそうと構わんが、患者に傷ひと筋、痣ひとつつけることは許さん」
「遵守するわ、その命令」
史生は首を斜めにかしげて同意を表わした。普通の人間なら、心臓が跳ね上がりそうなくらい、妖美な動作だった。
「では、看護婦に案内させよう。診察は明日の朝から行う」
「今夜はどうお過し？」
「私は院長室にいる。君の出入りは自由だ」

「うれしいこと」

メフィストは脇にのき、それと同じ速度でドアがスライドした。

二人の看護婦が立っていた。

「憑依病棟の特別室へお連れしろ。一切の行動に制限を与えてはならん」

史生はドアをくぐる手前で、椅子の上のメフィストをふり返った。

「あなたも素敵よ。――最初のメフィスト」

女が歩み去ると、ドクター・メフィストは史生が腰を下ろしていた椅子にかけた。

じい、と前方の自分に眼差しを注ぐ。

恰好こそ違え、鏡を見ていると思ってもほぼ間違いない類似は、精巧この上ないダミーだろう。

どちらが愛を感じてもおかしくはない。いや、どちらも熱愛の炎に胸を灼くか、嫉妬の情に狂うであろう。

そんな奇怪な現象も決しておかしくはないと思わせる二人の男の美しさであった。

二人とも動かない。

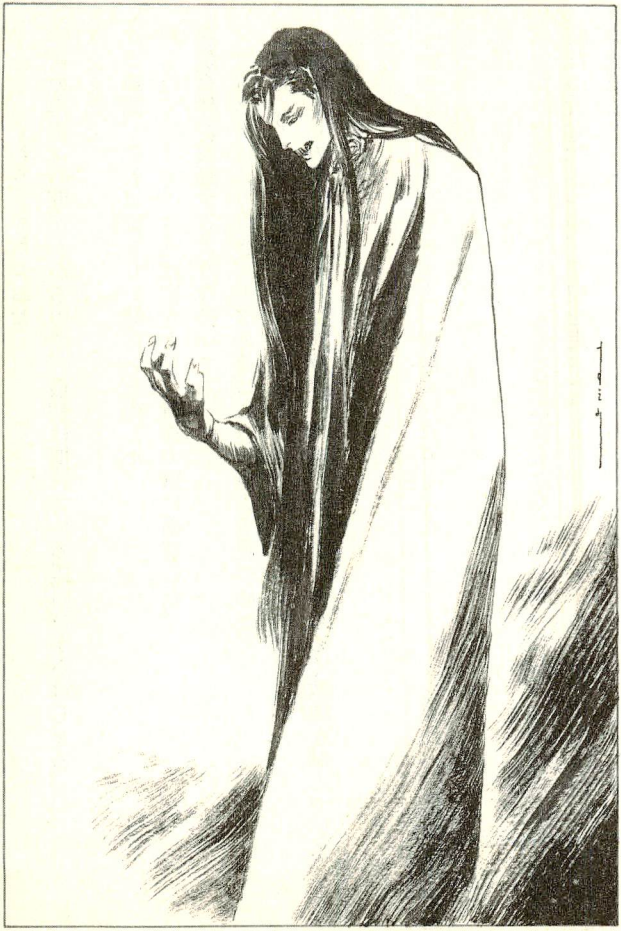
窓からさし込むのは午後近くの、朝の清澄さに乳のごとき倦怠が溶かれた光であった。

部屋は重い光にしどけなく崩れるかと思われた。

ふと――

「どうした？」
と、第二のメフィストが訊いた。
女の口づけを受けたメフィストに変化が生じたのである。
額が光りはじめた。
噴き出す汗を、彼は左手でこすり、その手にも光る珠が結ばれていた。
「苦しそうだな？」
と、メフィストが確かめた。
「いや……このような快楽は……久しぶりだ……」
メフィストはケープの襟元をゆるめた。声もなく顔を伏せる。
上がった。
歯を剝いていた。
槍の穂のごとき牙の列であった。
それでもなお、メフィストの美貌は夢の美しさを保っている。
透き通った牙のすべてに、牙剝かぬメフィストの姿が映っていた。
「やはり、な」
と、メフィストは納得するように言った。
「ここにも絶好の患者がいたか。——我慢できるかな？」

メフィストの問いに、メフィストは首を横に振った。
「無理だ。いま、やっとわかった。変身とは至福の別義だよ。……わかるまいな、おまえには……この感覚……魂から震える陶酔感……体温は約二七度低下……脈搏数二五……血圧は、おお……三七から一七だ……」
メフィストは眼を開けた。
腐った墓地の土に百年も浸しておいたような、光のない眼であった。そのかわり、真摯な歓びの色がみなぎっていた。
「わかる、わかるぞ……変身してるのが、なぜ怖れられるのか……わかるとも……おお、殺さずにいられるか……」
一気にメフィストの顔が変わった。
すう、と光が褪せた。
光量が減ったのでも、窓の外が曇ったのでもない。室内のかがやきのみが薄れたのだ。その中で、けものの咆哮を放つ声が言った。
「欲しいぞ、メフィスト、おまえの肉が」
言われて、メフィストは肩をすくめた。
「自分に食われるならばよかろう。どこでも取っていけ」
ぐわう、とそいつは牙を剝いた。



ぐわう　ぐわう　ぎおおおお

声帯の再現は時間がかかるので、最初は慣れている雄叫びからはじまる。

きえええええ

次の瞬間、それは凄まじい気合いと化した。

声もなく、メフィストは宙をとび、背後の壁に衝突した。

病院全体が震動するような勢いであった。

メフィストはふり向き、ドアのそばに立つ老人を見つめた。

色艶はなくなり、眼はくぼみ、頬はこけて、死人そのものだ。

ガウンからのぞく右手も静脈が浮き、紫斑が浮かび、きらめく数珠を摑んでいることが不思議だった。

「ご坊――」

と声をかけるメフィストと、壁際にへたりこんだメフィストとを見比べ、怪訝な表情を浮かべる老僧へ、

「部屋へお戻りなさい」

こういった刹那、メフィストの身体は音もなく、地を蹴った。

真紅の舌を吐きつつ、空中を走った。

きえええ！

二度目の絶叫は効いた。
声だけで、人間の身体が二つに裂けるものかどうか、ドクター・メフィストも眼のあたりにするのははじめてだったに違いない。
左右に弾けた身体は見事な対称形を形造っていた。
だが、飛び散ったそれが空中でしぼみ、水蒸気を噴き、灰色の燃えかすとなって床を汚すとは、そうさせた僧にもわからなかったろう。
最後の気力をふりしぼったものか、その場に膝をつく老僧のもとへ、メフィストはケープを翻して近づいた。
「お見事――さすがは『鬼林寺』の大僧」
肩を支えるメフィストの腕にもたれ、僧は荒い息をついた。紫の濃い唇が震えた。
「我が法力、いまだに効あり――と言いたいが、彼奴、本物ではないな」
意外としっかりした声であった。
「どこにいても、あ奴らの気配はわかる。しかし、今は……この距離でなければ区別もつかん……」
メフィストは指のリングを閃かせて看護婦を呼びながら、
「御寺へ参上しました」
と言った。

衰弱し切った死相が彼をふり仰ぎ、
「――どなたかは知らんが……すると……我が恥をご存知か？」
「少しは。後ほどゆっくりとお話し願えませんか？」
「……ならん……いまの愚僧には、小僧たちに……法話を語る資格もない。……人とともにいても……いかんのだ……」
「憑かれながらも、その法力。……この病院ならば、お力になれましょう」
老僧の眼にある光が点ったとき、ドアが開いて、白衣の姿が滑りこんできた。
「部屋へお連れしたまえ。二度と外へ出してはならん」
一行が立ち去ってから、メフィストはすぐデスクへ近づき、インターフォンのスイッチを入れた。
「ナース・センターです」
威厳のある女の声が応じた。
「院長だ。木村道子は出ているかね？」
「いえ。昨日から一週間の休暇届けが出ています。院長直々の許可だそうで」
声には覆いようのない怒りと嫉妬が滲んでいた。
「ありがとう」と言って、メフィストは宙の一点に眼を据えた。
「惜しいな。いまの病院ならば」

その声と言葉の意味を知るものは誰もいなかった。
理解できるものは常にいない。
だからこそ、人は〈魔界医師〉と呼ぶのだった。

3

入院患者（クランケ）――万城目史生の診察は翌日から行われた。
疾患があるわけではない。いわば精密検査である。ただし、それに〝超〟と〝精密〟が付くだけだ。
脳のCTスキャン、内臓の超音波診断、尿検査、血液検査はもちろんのこと、細胞原形質、核、遺伝子の分析に及ぶ徹底ぶりは、検査馴（な）れした医者や看護婦たちの眼も剝（む）かせた。すべて院長の指示によるものであった。
報告は、早朝からの検査が正午に移る寸前に届いた。
「どうした？」
とメフィストは院長室で訊（き）いた。立体ホログラフィに浮かび上がった保安室長は緊張の面持ちであった。
「第一総合検査室で異変が生じました。目下、保安ＡＡ隊が出動して鎮静に当っておりま

す」
「銃器の使用は許さん」
「フォノン・メーザーとガス弾の使用になると思います」
「結構だ。万城目史生かな？」
「左様で」
「どういう状況だね？」
空中のホログラフィ像が変わって、白衣の担当医になった。
「検査病棟主任の小金井です。状況をご説明いたします」
「よろしく」
小金井医師の告げた状況は、凄まじいのひと言に尽きた。
内臓の超音波照射中に、患者のかたわらの看護婦が突然狂躁状態に陥り、室内の機器を破壊しはじめた。
隣室のモニターで超音波操作を行っていた小金井医師は、その有様に極めて危険なものを感じ、検査室に入室を厳禁、一時的にドアを封鎖すると、保安部を呼んだ。
二十秒で保安係が駆けつけるまでに、狂った看護婦は検査室内の機器をほぼ完全に破壊し、患者に襲いかかったが、間一髪で保安係に阻止された。
看護婦の怒りは彼らに向けられた。

腕のひと振りで、大の男二名がふっとび、ひとりは脳天を壁に打ちつけて重傷、もうひとりも肩の骨を折った。

危険と見た最後の一名が麻痺銃（パラライザー）を照射し、何とか人事不省に陥らせたものの、瞬間的に象すら失神させる高周波を浴びながら、女は二分も暴れ廻ったのである。

その間、患者はベッドの上で、身じろぎもせず一切を見守っていたが、口元には邪悪とさえいえる薄笑いを浮かべていたという。

「その保安係三名はどうした？」

看護婦のことは気にもせず、メフィストは訊いた。

「三名とも、目下、隔離状態で傷の手当てと精密検査を受けています。看護婦の狂躁状態の原因が判明しない以上、あらゆる可能性が考えられますので」

伝染性のヴィールスという可能性もあるわけだ。

「適切な処置だ」

とメフィストは、お世辞ではなく言った。

「ありがとうございます」

「今後、万城目史生は私個人の管轄に置く。他のものは一切手を出してはならん。――どうかしたかね？」

「いえ」

釈然としない翳をふり落として、小金井医師は答えた。

院長――メフィストの返事から、あの女患者を診察すれば何かが起こると見通していたのではないか、との疑問に捉われたのである。それなのにどうして、看護婦をつけたのか？

釈然としない表情の中に、底知れぬ恐怖を灼きつけたのも一瞬で、小金井医師は分子に散逸した。

メフィストは「外科病棟」のナース・センターを呼び出して、７５１号室の患者はいるかと尋ねた。二木里もえは在室していた。

メフィストの訪問に、美しい人妻は少し驚いた風だった。

「具合はいかがです？」

「もう、随分良くなりました。でも――」

「でも？」

「こんなに何度も院長先生に来ていただけるなんて思いませんでしたわ」

「必要とあれば、何度でも伺います。でなければ、医者の資格はありません」

メフィストは静かに言って、

「今日、面白い患者が入りました」

「まあ」

もえは表情を変えた。期待が切れ長の眼に満ちた。
「どんな方でしょう」
「女性です」
「そうですの」
整った顔へ四方から失望の色が押し寄せた。
「――でも、それが私と何か？……」
「同じような症状の持ち主なのです。彼女も多分、夜歩き出すでしょう」
「先生――私、そんな……」
「失礼――少なくとも、あなたはそんな症状の治療が目的ではありませんでしたな。胃の方は如何です？」
「ええ。もう、大分よくなりました」
「胃自体に異常はありません。心因性――霊的なものかもしれない」
「何も知らずにこの街へ来たものですから。まさか昼日なか通りを歩いている最中に痛み出すなんて」
「ゆっくりご養生なさい。片づくまで」
もえは落ち着いた眼つきで、メフィストの顔を見つめた。
「もちろんです、わ」

「この街のことなど何も知らないとおっしゃったが、何故、やって来たのです？」
「話さなければなりませんでしょうか」
深山のひなびた空気のような声が訊いた。
「治療の一環と思っていただきたい」
「夫を探すためですわ」
「ご主人を？」
「京都へいらしたのじゃございませんか。おとぼけですのね」
もえは微笑を浮かべた。どこか怖い笑顔だった。
「貴重なお時間を拝借して構いませんこと？」
「無論です」
「――どこからお話しすればよいものか。……わたくし、長いこと、夫と暮らしておりました。本当に長い長いあいだ。京の夜空の星がまだずっと大きく高くかがやいていたころ、大覚寺の池に映る月が、天上のそれこそ偽ものではないかと思われるくらい美しかったころからです。
夫は、とても大きな、力の強い、胸の厚い人でした。足など私の胴の三倍もたくましく太く、手を伸ばせば月へも届き、食卓を囲めば、高雄の山くらいの料理を平らげ、喉が渇いたと言っては、琵琶湖の水を呑みほすほどの人でした。その声は、貴船山の頂きから軽

く御所にも聴え、京の人たちを青ざめさせたのです。——もちろん、誇張ですわ」

と、もえは笑った。

「ですが、あの人はそれくらいのスケールの男でした。あの人のそばにいるだけでわたくしは幸せでしたわ。昼も夜も、わたくしたちはお互い愛し合い、貪り合ったものです。——これは、はしたないことを」

「いや。——同じことが趣味だと言った娘もいます」

「まあ」

もえは、つつしみ深く笑った。

「看護婦さんですの？」

「いまは休暇をとっておりますが。——昨夜、私と組んで院内を歩き廻った娘です。近頃では珍しい、優秀な人材だ」

「そうおっしゃったら？　きっと喜ぶでしょう。先生に言われれば。——でも」

もえは少し眼を伏せて、すぐに言った。

「そんなこと、死んでも口にする方じゃありませんわね」

「ご主人はどうでした？」

メフィストは——この医師としては——驚天動地の質問を放った。

「まるで逆。——私のことを好きだと朝から晩まで繰り返し、その言葉に興奮して抱きま

した。それはもう、とても激しく、いっぱいに」
「何処にいらっしゃるのです？」
「そのあたりの事情はご存知では？」
「ええ。――ですが、あなたの口から伺いたい」
もえはメフィストを見上げた。怒りのようなものが瞳をかすめたが、表には出なかった。
「二年ほど前に夫はわたくしの前から姿を消してしまいました。それ以来、わたくしは異邦の町と村ばかりを探し歩き、いま、ようやく、目的の地と覚しい街に辿り着いたのです」
「いかがですかな、この街の感想は？」
メフィストが訊いた。普通の医師ならともかく、この院長がするところを目撃したら、病院に大パニックが起きそうな質問であった。治療とはまるっきり無関係な話ではないか！
もえは、窓の方を向いた。
「雨ですのね」
と言った。
外は灰色に煙っていた。
「人間がいてはならないところだと思います。この世界の、悪い部分だけを集めてこしら

えたような街。入る人を哀れむべきでしょう。ですが――」
「ですが？」
「夫にはふさわしいところだと思います」
メフィストはうなずいた。
窓ガラスには二つの顔が映っていた。
夫を探しに来た女と――〈魔界医師〉と。
女の眼もとに光るものが浮かんだ。雨の滴であった。それは糸を引いて窓ガラスを女の顎の方へ流れた。
「今日、お伺いしたのは、ひとつお願いがあるのです」
とメフィストは言った。
「何でしょう？」
「さきほど申し上げた奇妙な患者に会っていただけませんか？　あなたのご主人の居場所を知っているかもしれない」
「どうして、それを早く――!?」
もえはまた、身を乗り出した。
「どこにいるのです？　いつ会えるのでしょう？」
「よろしかったら――今夜」

「今夜？」

「おかしな時間ではありますまい。この街に、最もふさわしい時刻です。多分、あなたにも」

もえは沈黙した。メフィストの言葉の意味を測りかねているようでも、反駁（はんばく）のひと言を探している風でもあった。

「承知いたしました」

と、もえは少し間を置いて、冷たく乾いた声で言った。

〈魔カルテG〉　弔花淫殺

1

病院という場所は、光と闇（やみ）の境界を最も明確にさせるところだ。
朝六時起床、午後九時消灯。
例外は許されない。
一本の確固たる意志の線が、鋭利な刃に似て光と闇とを裂く。
いまは、闇の領域であった。
午前零時まで、あと数分。五分はあるまい。
静かな闇が病院に満ちていた。
闇には香りがした。

死の香りだった。
誰もが知っている。誰もあざむけない。
だからこそ、スタッフは消灯をやかましく言い、患者たちはそれに従うのだ。
闇の中を女が舞っていた。
白いガウンの女だった。
豊かな肉体が、奇怪な動きを示しつつ、闇の中に踊る。
大胆にゆれる乳房、わななく太腿(ふともも)。
首は右に曲がり、上半身は左にねじれ——
右手は闇を抱き、左手は股間に忍び——
それが女の本来の動き。
この世界では禁じられた動き。
それ故に、女は歓びにみちていた。
解放の歓びに。
空中でとんぼを切り——
天井を歩き——
四つん這(ば)いで壁を渡り——
床に触れずに床の上を走った。

ああ　ああ　ああ
長い長い廊下の果てから、ひとつの影がやって来た。
漆黒のただ中でも、仄かにかがやいて見える影であった。
途方もなく遠いところからやって来たにちがいない。
ドクター・メフィストの前に、白いドアが一枚浮き出ていた。
脇に小さな名札が、

「万城目史生」

ノックをすると、どうぞ、と返事があった。
病院の冷気とともに、メフィストは入った。
史生はベッドの上に起きていた。
白いガウンは同じ色の毛布カバーとシーツに溶け込んで見えるのに、異様にはっきりと浮き上がっていた。
「ようこそ、先生。いらっしゃると思っていましたわ。来て下さるようにと、ずっと念じておりましたのよ」
「効き目はあったかな」

「そこにいらっしゃるわ」
「明日、退院したまえ」
自分を見つめるメフィストの視線から、史生は眼を逸らした。唇がいやな形にねじれた。
「いいんですの、先生？」
「いや。この病院から出てはならん」
「すると……？」
「君は何をしに来た？」
「先生に協力をしに。坊主という手土産を持参して」
変わった質問であり、答えであり、時刻であった。
「君をそう変えたものは、何処にいる？」
「すぐに教えてあげるわ。協力者として信用してくれたら」
史生はゆっくりと、思わせぶりな動作でガウンの襟元に右の人さし指を当てた。
いつ切ったものか、よく尖った爪がいちばん上のボタンに触れて、固い音をたてた。
するり、とガウンが落ちた。
陶器の像に打ち寄せた波のように。
史生の裸体は、昼間よりいっそう淫猥さを増したかのようだった。
淫気が蜜みたいに、毛穴という毛穴から噴き出ている。

「やっぱり本物ね。昼間と同じコピーなら、とっくの昔に、あたしを押し倒しているわ。……いらっしゃい、先生。協力者になるにはもっと深く知り合わなくては」

史生は手を広げた。

腋には黒い毛が密集していた。

メフィストは立ち尽している。

「なら、こちらから行くわ」

史生は立ち上がった。膝からガウンが落ちる。

ほの黒い谷間の藪も、はっきりと見える。

白い手が再びメフィストの首を抱き、史生はベッドへ倒れた。

メフィストは抵抗しない。その鉄の意志も潔癖さも、この女殺し屋の淫らな誘いの前に脆くも崩れ去ったようだ。

女を下に重なって、二人はベッドへ倒れた。

史生はメフィストの手を乳房へ導いた。女だけが持つ熱い肉の球は、意志を有するかのように、メフィストの手の平に灼きついた。

「揉んで。——もっと強く」

すぐに、女はのけぞった。

「なんて、素敵な……ドクター・メフィスト。世間の評判ほど当てにならないものは。さ

あ、言う通りにおし。喉を舐めるのだ……」

勝ち誇った声が、苦鳴に変わったのは、次の一刹那であった。

メフィストは女の命令に従った。

わななく喉に、史生の十倍も美しい唇が蛭のごとく貼りつき、離れた。

その跡に、文字通り黒い蛭が残っていた。メフィストのキス・マークが。

そこから何が走ったのか、史生は人間にあげられるとは到底思えぬ絶叫を放ちつつ、ベッドで痙攣した。

「戸山住宅の住人に、治療費のかわりに教わった技だ」

苦しむ女体を冷ややかに見下ろしながら、ドクター・メフィストはベッドのかたわらに立っていた。

「残念だが、女の術は私には通じん。しかし、今宵は私ではなく、別の女性がおまえに会うはずだったものを——何処へ雲隠れしてしまったのか」

美貌に淡い翳があった。ここへ来る前に訪れた二木里もえの病室は、もぬけの殻であった。

何故か、メフィストはモニターでの調査を命じなかった。

「今夜は特に、病院の闇が深い。香りすら濃厚な。一緒に味わいに行くとするか。立つがいい」

メフィストは手招きした。
すると、五指の先から出た見えざる糸に操られる人形のごとく、のたうつ史生は起き上がったのである。
戸山住宅の住人といえば、言うまでもなく吸血鬼たちだ。
メフィストの操りの法は、彼らに血を吸われた犠牲者が諾としてその命に従う現象を、彼なりに応用したものであったろう。
また、犠牲者に遺された怖るべき主人の所有印ともいうべき歯型が、美しい口づけの痕に変わっていることも、この医師にはふさわしい怪異であったろう。
二人は外へ出た。
闇だけが広がっている。深く黒く静かに。
二人の頭上を、女が舞っていた。
声もなく、嬉々として。
「私は、おまえたちの黒幕が何をしようと興味はない」
何処とも知れぬ廊下を歩きながら、メフィストは告げた。
史生は黙々とついてくる。
「私が知りたいのは、そいつが奪ったものだ。病院のスタッフまでを狂わせた、未知の病源体としてのそれだ。見つけたら——見つけたら、はて、どうしたものかな」

いつの間にか、二人は病院を出て、人知れぬ小路を歩いていた。
これもいつの間にか、史生が先頭に立っている。
あの「工場」への道を辿っているのであった。
荒涼たる廃墟へ出た。
ほとんどならされているが、まだ、あちこちに、盛り上げられた瓦礫が眼につく。
だしぬけに、史生が小走りに前へ出る。
メフィストは追わなかった。
月はない。星も出ていない。
しかし、〈魔界医師〉の眼には、十メートルほど向うの瓦礫の山と、そこから出現した人影がはっきりと見てとれた。
「また会ったな、ドクター」
久保寺は異様に押さえた声で言った。
「計画通りだ。よくやったぞ、史生」
史生はにんまり笑うと、メフィストをふり向き、白い喉を上げた。
医師の唇が、すうと薄れていった。
「効かなかったか。——さすがは人鬼」
「ほう、見破ったか」

久保寺が憎々しげな笑いを吐き出した。
「もう、以前のおれじゃねえ、史生じゃねえ。たっぷりとお返しをさせてもらうぜ、おれはこの腕の、女は亭主のよ」
「忘れるな」
あわてた風もなく、ドクター・メフィストは悠揚と言った。
「闇はおまえたちが棲むところ。だが、ここは〈魔界都市〉だ」
きいん、ときらめく音が走った。
軽く右へとんだメフィストの鼻先を、地上から跳ね上がった銀色の線がかすめた。
久保寺の針金であった。
「動かないで」
史生の声がメフィストの鼓膜をけずった。
「一歩でも足をずらせば、京王プラザの屋上から落ちるのと同じ衝撃がおまえを襲う。覚悟するがいい」
その通りだろう。
メフィストを取り巻く妖気圏は、以前と比較にならぬ強力さであった。
がるる
と久保寺が吠えた。

史生もまた。
その姿は変わっていきつつあった。
闇の成分を服んだとでもいうように。
爛とかがやく双眸。
めくれ上がる唇からせり出す牙。
口の端からしたたる涎は、黒い地面に落ちて白煙を噴き上げた。
そして、頭頂を盛り上げ、突き破って露出したものは——角だ。
ああ、人鬼ならぬ、真の鬼。
メフィストの前後左右を針金が流れた。
男鬼の手から放たれる死の糸であった。
それは方角を転じ、組み合い絡み合い、巨大な輪郭のみの像をつくった。
全長三メートルもの鬼の針金細工を。
メフィストは動かない。
女鬼の妖力に金縛りになっているものか。冴えた瞳のみが、脅えもなく、ぬうと伸びてきた針金の腕を映した。
五指の爪が美しい——史生よりも美しい喉にかかる。
「やっとわかったぜ、メフィストよ」

すでに勝敗は見えたと思ったか。男鬼が久保寺の声で言った。悪鬼の形相に、はっきりと久保寺のイメージを遺しているだけに、想像を絶する不気味さであった。

「おれが、こんなになってまで、おめえに執着するかがよ。どうやら、惚れたらしいんだよ、おまえにな。わかるだろ、そうなると、人間がどうなるか。おめえだってあるだろ、女としたことがよ。そのとき、女の肌をおっぱいを、舐めるだけじゃ物足りねえと思わなかったかい？　キスしたり、咬んだりするだけじゃいやだと思わなかったかい。食いてえんだよ。あの最中に、女の肉を。思いっきり肌と肉に歯ァたてて、ずたずたに食いちぎってみてえんだよ、泣き叫ぶのを押さえつけてよ。――わかるだろ、え？　好きな相手ほど、そうしてやりたくて、堪らなくなるんだよ。骨まで嚙み砕いてやりたくなるんだよ。そうしてやるぜ、メフィスト。おれを惚れさせた男」

針金鬼の腕の筋肉が、ぐり、と膨れた。

そうさせた力が、一気に爪へ！

世にも美しい音をたてて、腕の一線が弾けとんだのは次の瞬間だった。

男鬼がのけぞったのも次の瞬間だった。

濡れたような音をたててその頬が鳴ったのだ。

すでに毛むくじゃらとなった手で、彼はそこを押さえた。

頬の肉はこそげとられていた。指の間から血潮が奔騰した。

「なにを――する!?」
愕然と叫んだ眼の前で、もうひとつの鬼面が眼から赤光を噴いた。
「よくも――男となんか。この大うそつき!!」
なんとも生々しい嫉妬の激情をこめて、女鬼はもう一度、男鬼の顔を打った。
今度は鼻がもげ、鋭い爪先に引っかかったのは右の眼球であった。
「馬鹿野郎」
メフィストのことも忘れて、男鬼の右手が一閃した。
女鬼の胸から、これは変わらずついていた女の乳が二つ――丸ごともっていかれた。
絶叫が飛び交い、闇を鮮血が朱に染めた。
そのとき――
形容しがたい鬼気が二人――二匹の全身を打った。血狂いも憎悪も彼らは忘れた。
ともにメフィストを見た。
魔界医師の手には、黄金色の輪が握られていた。
黄金の針金であった。
「そいつと同じ技――私も少し使う」
と、ドクター・メフィストは言った。
「愛を打ち明けてくれた男に酷い仕打ちかもしれんが、私は愛するものの肉など口にした

くもない。そのような粗暴汚怪な愛を至純としたのは、遠い遠い過去のことだ」

この医師の過去とはどのようなものか。それに興味をひかれて、二匹の瞳に妖奇な色が動いたとは。

メフィストはしかし、それ以上言わず、前方に立つがらんどうの巨軀を見つめた。

「『鬼堂会』の事務所でのようなわけにはさすがにいかんが、ここはドクター・メフィストの針金細工――とっくりと照覧するがいい」

その右手から光がとんだ。

鬼が跳ねとんだ。銀色の腕に、胴に、首に。金色の細光が巻きつき、澄んだ音をたてた。

「いかん！」

男鬼が叫び、右手を引いた。

巨鬼を分解しようと思ったのである。

できなかった。

彼は、メフィストの喉をつかんでいた鬼の手が、弾けとんだことに気づいていた。針金のその部分に、実は傷があったのだ。事前に知ってはいたが、大したものではなく、大丈夫と踏んだ。まさに不運だった。

銀の鬼には金の鬼が絡みついていた。

これは、久保寺のつくった鬼と寸分違わぬもう一匹の鬼であった。

「では――」

メフィストが右手を引いた。

ぎいん、と鳴った。

巨鬼の身体は次の瞬間、粉々の小片と化して宙に舞っていた。

「野郎」

男鬼――久保寺は呻いた。声に含まれた憎悪を感じただけで、並みの人間なら発狂しかねない。

ひっぱがされた頬からは、涌水のように鮮血が噴き出して、口の脇から歯を濡らし、いましも人肉を貪り食ったかのようだ。

服が膨れ上がった。

すぐにしぼんだ。

その代償に、針みたいなものが全身からそそり立っている。

剛毛であった。

久保寺は、まことの鬼と化したのだ。その身体へ、これも毛むくじゃらの女体が躍りかかって、胸の肉をむしり取った。

「この裏切り者。よくも、あたしを捨てて、男になんか」

荒い火のような息を吐くたびに、女鬼――万城目史生の爪は男鬼の肉をえぐり、むしり

取った。

だが、彼女自身も二つの乳房を失い、ぱっくり開いた傷口からは、とめどなく朱色の帯を引いている。

それが触れたガウンは燃え、地面は音をたてて溶けた。

絡み合った身体は転がり、もつれ合って、二つの声には、やがて別の感情がこもりはじめた。

男鬼の唇へ女鬼の唇が吸いついた。

舌と唾液が男の口腔へ流れた。

男鬼が口を閉じた。

のけぞった女鬼の口に舌はなかった。

「この馬鹿女が、こんなときに色情狂いか」

ののしりながら、男鬼の喉仏が動いたのは、食いちぎった肉片を飲みこんだのである。

メフィストは、というと、何とも奇怪なことに、逃げることも攻撃もせず、二人——二匹の狂態を見つめている。

白い美貌は、修羅の巷さえ怜悧な眼差しで本質をえぐることを忘れぬ、研究者の涼しさを持っていた。

彼は学んでいるのである。人間が鬼と変わる現象も、ある意味で病いといえぬことはな

い。そうなってしまった人間の感情の起伏や生態も、医者にとっては限りなく興味深い素材といえる。眼前で繰り広げられる凄惨無比の妖闘が、彼の学究心どころか魂までも捉えるのは当然の極みであった。

女鬼が男鬼の股間に顔を埋めた。

男根はそそり立っていた。

女は呑みこんだ。

舌はない。半ばから食いちぎられている。口からは血が溢れている。

ずるずると、女鬼は吸いはじめた。口腔性交のやり方は人間と変わらぬようである。

頬ばったそれを、女鬼は内側の肉に押しつけ、こすり、血まみれのそれに歯をたてた。

男鬼が吠えた。

女の尻をつかみ、顔の上へ引きつける。パンティはいつの間にかない。

剝き出しの性器へ、男の口がめりこんだ。

女鬼の全身に震えが走る。それでも口は男のものから離れない。

男鬼は舐めはじめた。人間にはあり得ない固さと長さを持った舌が、ずぶりと柔肉へ吸いこまれた。

すでに女は分泌していた。

女の狂気が伝染ったのか、男鬼もメフィストのことは忘れた。

ぐるぐると喉を鳴らしながら、女のもらすものを飲み、舌でこねくり廻す。
女鬼が低く呻いた。
男鬼も叫んだ。
女鬼の口の端から、白濁の汁がこぼれた。女鬼の喉が動いた。飲みこんでいる。ちぎれた舌で、女鬼は舌舐めずりをした。
恍惚たる表情であった。
性器を責めている男鬼が、ひと声高く吠えてついに、尻の肉を食いちぎった。
がむしゃらに食った。
女の尻は妖しく悶えながら小さくなっていった。
満足したのか、男鬼が女鬼を押しのけて立ち上がった。
「やはり、おれに食われたかったか、メフィスト？」
血まみれの口で訊いた。待っていたことを言っているのである。
「面白かった」
メフィストは、闇にふさわしい声で言った。空気には血の香りが混っているが、この医師の周りだけはすべてが玲瓏と澄み切っているようだ。
「おまえたちのどちらか、一緒に来てもらおう。治療の参考にさせてもらう」
「臨床実験かい？　おれを腑分けにでもするつもりか？」

男鬼は嘲笑した。凄まじい自信に満ちた笑いであった。
メフィストはひっそりとうなずいた。
男が何者であろうと、彼の笑いも変わらないだろう。
「そうなってもらおうか。保存は確実だ」
鬼の形相が変わった。
ああ、脅えるのだ。鬼に変わっても。その手が閃き、数条の細線が闇の中で、幾つもの形をとった。
野獣が吠えた。——巨大な虎であった。
大地がゆれた。——大犀が前足で蹴ったのだ。
空気がしゅっと鳴った。——大蛇が舌を吐いたのだ。
久保寺の針金の技だ。だが、つくったのは彼ではなく鬼——その醸し出す妖気は以前のものとは比べものにならない。
「今度は気の入れ方が違うぜ。あいつの肉を食って、精がついたしよ。針金に食われるのかって、心配いらんぜ。どうせ男は言わ無えんだ。嚙み切られたら、すぐに引っぱり出しておれがいただくさ」
「やはり、病んでいるな。私は病人が好きだ。私を求めてくれる」
「おお。——おれのものになりな」

鞭うつように、鬼は手をふった。
三匹の獣が走る。
虎が跳んだ。
犀が突進した。
蛇が躍りかかった。
虎の顔を金色の光がかすめた。空中から降下し、その眼球――針金の輪をちぎって急上昇したものは、力強く羽撃いた。大鷲であった。
地上から逆流れに銀光が走り、猛禽に巻きついたのは次の刹那であった。
大蛇の、中身のない胴――まさに〝がらん胴〟に巻きとられ、黄金の鷲はどっと地に墜ちた。バキバキと骨の砕ける音がした。
これですら、幻妖極まりない光景であった。それなのに――
いつの間にか、のたうつ虎と、大鷲をからめ取った蛇との間に一条の黄金の線が引かれていた。
一条ではあったが、実は二本が重なってそう見えていたにちがいない。
それは左右に裂けた。
ただの針金が、眼の前に広がっただけだ。しかし、その広がりの中に地面はなかった。あるのは黄金の深淵であった。そして、二頭と一匹と一羽がその中へ落ちるや、みるみる

小さくなっていくその姿を待たず、針金の生んだ裂け目は再び重なり、ただの一条の鋼線に回帰したのである。

一瞬の出来事であり、残る一頭——大犀に生じた現象もまた一瞬であった。

虎の両眼がえぐり出されたとき、この巨獣は地響きをたてつつ、メフィストの眼前三メートルにまで迫っていた。

鬼の生んだ針金細工の重量は二トン——その角にかからずとも、はねとばされただけで人間はバラバラだ。

まさか、その頭を、稲妻が直撃しようとは。

それは天空から落ちた。世界はかがやいた。黄金の色に。

そして、大犀の頭頂を貫き、火と煙で包んだ稲妻は、外枠のみを残して内側は闇そのものであった。

ドクター・メフィストの針金細工——それは自然現象にすら及ぶのか。

数万ボルトの直撃を受け、大犀はどっと地面に倒れている。

「二木里さんなら、こうはいかなかったろう。まがいものの造りしものは、所詮、まがいものに終わる」

茫然と立ちすくむ男鬼の耳に、澄んだ声が妖々と響き、

次の瞬間——

男鬼の周囲を黄金の光が躍り、彼の身体は十数個の部分に分断されていた！
熱い湯気をたてながら地面に転がった状態は、文字通り腑分けに等しい。
「残るは、おまえひとり――」
メフィストの瞳に見据えられ、女鬼は悲鳴を殺して後方へ跳んだ。
身体は宙で乱れ、どう、と瓦礫の上へ落ちた。砂埃が血まみれの身体を包む。女鬼の足首もまた、一条の黄金の針金に捕捉されていたのである。
「よからぬ計画をたてている場所を言うか？　ここに眠るか？」
低く穏やかな、しかし、有無を言わせぬドクター・メフィストの声であった。
「死にはせん。私は医者だ。殺すことはできんが、しかし、永劫の眠りにつかせるのはたやすい」
女鬼の裂け上がった口が、震えつつ動いた。
「……四谷左門町……製紙工場跡……」
その頭上へ、白いものが降下した。
二木里もえ、とメフィストが見たのは一瞬のことだ。
高い破砕音とともに、頭と顎を押さえつけられて史生の首は一気に百八十度旋回し、頸骨はへし折られていたのである。
どっと女鬼は倒れた。

もしも、今の攻撃者が単なる力自慢の人間であったなら、彼女はあっさりと起き上がり、いや、その前に、攻撃すら許さなかったであろう。

すっ、と立ち上がったもえへ、何か言おうとして、メフィストは口をつぐんだ。

夜の見せた錯覚だったのか。

そこにいるのは、白衣姿の木村道子であった。

その手を、泡を吹いて息絶えた女鬼の角と顎とにかけて。

「驚きませんわよね、先生？」

と道子は言った。

二木里もえの声で。

メフィストは軽くうなずいた。

「私にもわからなかった。自分が、こんなものだなんて」

道子の声であった。その両眼から、涙が滑り落ちていった。

二木里もえが、すべての記憶を失い、木村道子という人格になる。必ずしも驚くことではなかったかもしれない。

ここ——「魔会都市〈新宿〉」では。

「いつから、気づいていらっしゃったのです？」

「君は、死体置場のものがなくなったとき、新しく入った患者は二木里さんだけだと言っ

た。私が読もうとした鬼の資料を破り取ることは、それまでのスタッフには不可能だ。すると、君しかいない」

「最初から……」

道子は茫然とつぶやいた。

「なのに、どうして私に、死体置場の見張りを……？　二木里さんを見張っていれば済むことでしょう？」

「君がどうするのか見たかった。――私はどちらに言っているのかな、木村くんか、二木里さんか。医師なら誰でも確かめたくなるだろう。私と病室で会ってから、すぐに下へ戻って倒れていたのは見事な早業だ。木村くんでいる間は、自分で自分を騙していたのかね。二木里さんの声を聴いたつもりになって」

「多分」

と二木里もえは言った。

「事情はご存知ですね？」

「京へも行ったし、住職からも伺った。君のご主人の骨を、鬼沢たちが掘り返し、住職の寺から持ち出した再生の秘法を使ったらしいな。愚かなことを。体内から発する妖気を吸わせ、彼らのような類似人鬼（じんき）を送り出して、何をするつもりだったのか」

「参ります」

女が、背を向けた。
「私も同行する。それから、そこの刑事さんも」
メフィストの視線が半回転して、後方の瓦礫を射た。
「どうも」
ひょっこりと現われたのは、朽葉刑事だった。頭に手をあてている。メフィストの眼は、もり上がった大きなこぶを見ることができた。
あれからひと晩——歩くのに差し支えないほど回復したらしい。
「いつから気がついてました？」
と、訊いた。
「君が私を尾行しだしたときから」
「なら、今日の朝からですか。——やってられねえなあ」
「ところで、どうする？　すべてを最後まで確認したいかね？」
「そりゃ、もちろんです」
と言ったものの、自分を見つめる女の、凄まじい視線に出会い、たたらを踏んだ。
「あの男が自分の頭を殴りつけたおかげで、鬼の腕が切れたのかもしれん。借りは返さなくてはな」
刑事はあわてて手をふった。

「そんな――先生の実力ですよ」
「お好きなように。そのかわり」
メフィストは沈黙した。
「――夫は常態ではありますまい。手当てを願います」
「よかろう」
「では」
朽葉が駆け寄った。
三つの影は、黒い黒い闇夜を、風を巻いて歩きだした。

2

四谷左門町。――製紙工場跡。
メフィストの調査によれば、何か、とんでもない狂気が形をとっている場所だ。
あの、三重の扉に守られた奥。
久保寺と史生が入り、鬼と化して戻った場所。
いま、そこで、異変が生じつつあった。
三重の扉の最後の一枚――厚さ七十センチのコンクリートの扉に亀裂が入りだしたのだ。

うっすらと、蜘蛛の糸みたいなはかなさであったものが、みるみる黒髪に変わり、裂け目となり、その端がつながって、ぼろぼろと床にこぼれ落ちた。

外側から凄まじい力が働いているのだ。

重々しい響きとともに、子供の頭くらいもあるコンクリ塊が二つ抜け落ち、その空洞から現われたのは、信じ難いものであった。

白い女の手だ。

と——それは、素早く外側へ引っこみ、今度こそ、もの凄い衝撃が一気に扉を襲った。

わずかに残っていた結合力を根こそぎ打ち砕かれて、床に崩れ落ちた破片の向うから、スーツ姿の若々しい顔が悠然と部屋へ入ってきた。

奇妙な眼つきで、木村道子は「工場」の内側を見つめた。

あちこちに黒い塊りがどんよりと広がっている。

二百坪はある床の上に、不気味な沼みたいによどむそれは、明らかに血の池であった。

様々なメカニズムの並ぶ床の中央に、巨大な鉄の台があった。

縦横五メートル、三メートル、高さは一メートル弱というところであろう。

その上に、あお向けになったものが、道子の双眸をかがやかせた。

ものという意味は、生物もその中に含む。

だが、どちらにしても、信じ難い存在であった。

肌はグレーがかった紺というのが最も近いが、その濃淡は刻々と変わり、時折り、この世のものならぬ色彩に見える。

台を埋め尽すほど巨大な肉体は、サイズを除けば人間と瓜二つだ。

熔岩を押し流して固めたような胸部、丸石を並べたイメージの腹筋、どんな格闘士も戦意を失うにちがいない猛烈な太さの腕と脚、そこから林立する剛毛の鋭さは、猛獣も刺し止めてしまいそうな凄まじさであった。

だが、何よりも注目すべきなのは、たくましい肩にはさまれた巨木のような首と、それを支える頭だった。

眼も鼻も口も、形は人間と同じだ。むしろ、その辺の二枚目よりは美しい。

問題は眼の中の苦痛と憎悪だ。耳まで裂けた口の間からのぞく、虎の頭も噛みちぎりそうな牙だ。さんざしの繁みに似た毛髪を押しのけてそそり立つ三本の角だ。

そして、何よりも、全身から発散するその臭気だ。——妖気だった。

何か、底知れぬ力で台の上に押さえつけられている顔が、何を察したか、死に物狂いの意志を湛えて、三十度ほど右へ旋回した。

何色かわからぬ地獄の瞳が、ぴたりと娘に焦点を結んだ。

「あなた……」

木村道子の口から、信じ難い言葉が洩れた。

「やっと……やっと……見つけました。こんな……腐り切って……でも、ふさわしい場所で……さ、一緒に帰りましょう。……懐かしい京へ。高雄の山へ……」

道子の声は感極まって泣いているように聴こえた。

いや、その両眼からは、確かに涙でしかあり得ない線が頬を伝わり、顎へとのびている。赤い。真っ赤な紅だ。血の涙であった。

そのとき——

不意に暗黒が落ちた。

動揺ではない緊張の色が、道子の眼に揺れた。

天井のおびただしいライトは、そのまま光っている。

放つ光が電球の外へまったく届かない。——そうとしか思えぬ妖異さであった。

道子は眼を少し左へずらした。

その先の闇に、二つの緑の炎が燃えていた。

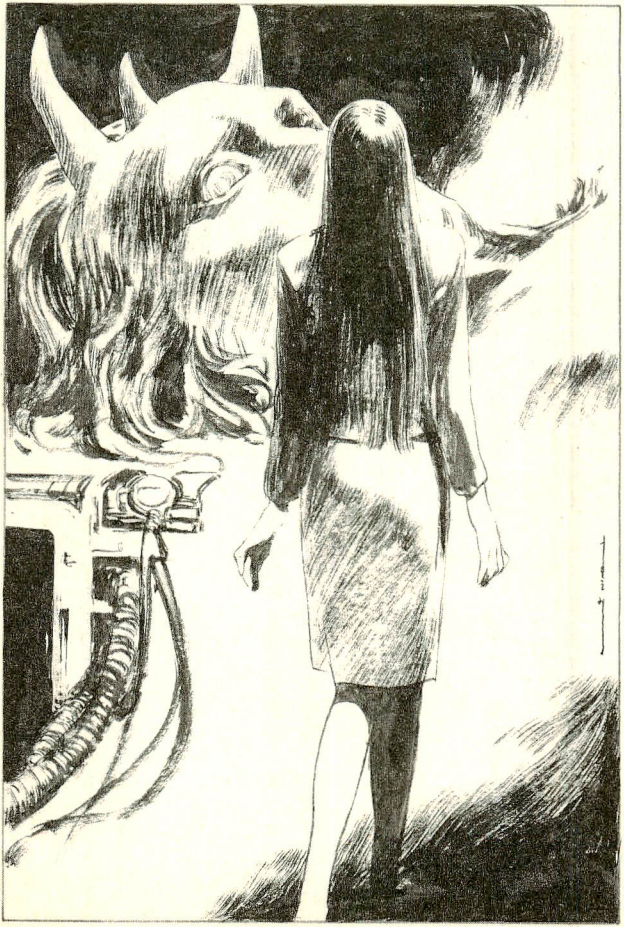
それも眼であると、彼女だけが理解した。

「やっぱり来たな」

と男の声が言った。

鬼沢右門。

先刻のメフィストたちの会話の内容が正しいとすれば、二木里もえの夫の骨を持ち去っ



た張本人だ。

それがこんな時間に、何のためにひとり、工場にいるのか？

「そいつの骨の話をきかせてくれた坊主が、夫の骨を守る妻の話というのもついでにきかせてくれたが、そうか、やはり本当にいたか。よく、ここまで来た。誉めてやるぜ」

「おまえ……」

と、木村道子が無感情な声で言った。

「うちの人の『気』を吸い取ったな」

道子の眼には、闇を通して、工場の一隅に設置されたある種の装置群が映っていた。

二木里もえの意識では理解できなかったが、メフィスト病院の看護婦の知識は、それが『気』の分析・収集メカニズムだとひと眼で見抜いた。

「こんなものを使って、人間をあたしたちの仲間に変える気か？」

「その通りだ」

と、鬼沢の声は応じた。

「人間へのアレンジの仕方も、大いに進歩改良されたぞ。じきに、意志なき鬼の力をもった軍隊が、世界中の戦場の帰趨を決めることになろう」

「そうはいかない。おまえもそのおかしな機械も、すぐにここでおしまいになる。その後で、あたしたちは、仲良く高雄の山へ帰るのよ」

「そうはいかねえ」

ぼう、と闇の奥に人型の影が浮かんだ。その周囲は青い燐光に縁どられていた。鬼火というやつだろう。

「そいつには、まだ用がある。おれの『気』じゃあ、十分な儲けにならないんだよ。ただ人を食らうだけの化け物をこしらえてしまうんでな。見ろ。その辺の血の痕を。作業員どもが、お互い食い合った結末さ。もとはと言えば、久保寺の馬鹿が変な気を起こしたせいだがな。知ってるかい、奴を？」

「殺されたよ、ドクター・メフィストに」

道子の口元がにい、と吊り上がった。

白い牙がのぞいた。あどけない顔立ちはそのままだけに、これまでの人鬼より数倍凄まじい。

「そうかね、それは、よかった。さすがは〈魔界医師〉だ。あんな化け物を二匹も世に出しては、人間がひとり残らず食い殺されてしまう。はは、おれを襲って、この仕事を乗っ取ろうなんて、過ぎた了見を起こした罰さ。生憎、おれはピンピンしている」

「いずれ、メフィスト先生がここに来る。でも、おまえはその前に、あたしが始末してくれるわ」

「おおっと。――そう簡単にはいかないさ。この鬼――おまえの亭主だな。どうだ、この

まま、生かしておきたいとは思わないか？」

道子の顔にもえの面影が重なった。心中の動揺であったろう。

「おまえが、おれを殺ろうとするんなら、おれはこいつにかけた復魂の術を解く。そうしたら、また、ただの骨の破片さ。そいつを抱いて、これから何百年も、あの薄暗い寺の隅で暮らすか？　お前の胸三寸で、愛しい亭主と生身の身体で一生連れ添えるんだ」

「どうしろというの？」

揺れ動く女の顔が尋ねた。その中に、切実なものがはっきりと感じられた。

「おれと組め」

鬼沢は威圧するように言った。

「昔のおれなら、こっちから願い下げだが、今となっては、少しはおまえたちに近い。お互い、我慢できないこともあるまい。おまえの仕事は簡単だ。邪魔なものを消せばいい。おれと、おまえたち夫婦のしあわせを壊そうとする奴を」

青い光は悄然とする道子＝もえの前に立った。

「たとえば――ドクター・メフィストを」

二つの顔は道子に戻った。

その身体が地を蹴って鬼沢にとびかかると、男と女の身体は、重力の支配を脱したかのように、垂直に宙へ舞い上がったのである。

鬼沢の顎には道子の指がめりこんでいた。
「やめろ――亭主がどうなってもいいのか？」
鬼沢は絶叫した。
道子の顔が崩れた。
二重映しの幻影を乗せたまま、二つの身体は、もんどり打って地上へ激突した。
「こいつは面白い」
鬼沢右門が舌舐めずりをした。異様に長い舌であった。彼はそれで唇の端から流れる血を舐め取った。
「おまえ、あの医者に惚れたな」
舌がぬらりと伸びた。その先に、道子＝もえの脚があった。
「まあ、いい。いまの亭主は耳もきこえん。眼も見えん。ただ、鬼の『気』を発散するだけだ。だが、おれが何もかも教えてやったらどうなると思う？」
道子＝もえの身体が震えた。鬼沢の言葉のせいではない。足首に絡んだ舌の仕業であった。
「鬼の夫婦の仲を裂くとは――さすが〈魔界医師〉。あの色男ぶりなら無理もないが。しかし、女の鬼にも、淫蕩な血が流れているとはなあ」
「お黙り」

と女は命じたが、声に人外の迫力はない。

「亭主にきかせてやろうか、おい。おまえの女房は、おまえを生きさせるより、人間の医者を救う方を選んだってな？」

鬼沢の声に合わせて、長い舌は道子＝もえの腿の上で動いた。そのたびに、白い肉には涎がこびりつき、女は牙の間から、熱い息をもらした。

掛け値ない情欲の吐息であった。相手が人間ならこうはならない。やはり鬼沢が、半ば鬼と化したせいである。

舌は、危険な部分へ入っていた。

はあ、と呻いて、道子＝もえは身悶えした。鬼沢に指摘された焦燥が、秘部への刺激を一層強めていた。

「いいぞ、たっぷり濡れているな。あそこのつくりはどうちがうかなと思ったが、やはり人間と同じか。おお、こいつはいい。人間の女よりずっと粘っこいし、ふう、匂いがまた堪らないと来ている。鬼には鬼が似合うようだな」

舌が深くもぐりこんでくるのを、道子＝もえは感じた。

男は近づいてきた。

鬼沢は道子＝もえの前に来ると、両肩に手をかけて床に押し倒した。

「亭主とあの医者とどっちが大事だ、え？」

問いに合わせて舌が動き、道子＝もえは白い喉をそらせて喘いだ。
そこから白い生々しい胸の隆起へと、血走った眼をねっちり走らせながら、
「面白え、こんな面白い女の嬲り方ははじめてだ。え、亭主を取るか、恋人か？　どっちも愛してるんだろうが？」
と鬼沢は訊いた。
言葉は責めに等しい。
女には答えられなかった。
その震える白い肩に、鬼沢は口をつけた。
牙をたてた。歯ではない。めりこんだ。
「あ、あああああ」
道子＝もえのたてる苦鳴には、官能の呻きがあった。鬼沢は口を離した。牙の先は赤く濡れていた。
「どっちだ、答えろ。亭主にはきこえやしない。だから、正直に言うんだ。亭主が好きか、メフィストが大事か」
鬼沢はもう一度、女の肩に牙を突き入れた。いやな音が長くつづいた。口から垂れ下がった肉片を、鬼沢はずるずると吸いこみ、咀嚼しはじめた。
「言いなよ、でないと、もっと食うぜ」

返事をきかず、鬼沢は身体の向きを変えて、道子＝もえの太腿にかぶりついた。

3

メフィストは、工場の建物を前に立ち止まった。
背後の朽葉をふり向きもせず、
「ここにいたまえ」
と告げる。
「殺生な。——ここまで来て。手柄をたてさせて下さいよ」
刑事は、この人非人という眼付きをした。
「わからんかね。この土地全体に鬼気がみなぎっている。放っておくと、居住区にまで広がるぞ」
「すると——どうなりますんで？」
「みなが、君の追っかける相手になるな」
「先生ねえ」
「冗談ではないよ。新宿区の住民全員を、あの住職と同じ目に遇わせるだけの鬼気だ。君もそうなりたいか？」

「とんでもない」
「では、ここにいたまえ」
「わかりました。あの、いざってときは、応援を呼んでもいいですか？」
「三十分待ちたまえ。よく聞くんだ。十分たって、私が戻らなければ、あのバリケードから五十メートル――向うの土塀まで後退したまえ。二十分後はさらに五十、三十分たったら、走れるだけ走って、警察へ電話するといい」
静かな口調だが、その内容の凄まじさを理解するだけの知能を、刑事は備えていた。
うなずく彼を妙にやさしい眼で見、メフィストは悠然と前方の建物へ歩きはじめた。
真っすぐ、工場へ入った。
妖気の源が、この医師には容易に感知できるのだろう。
明りは消えず、闇だけが落ちていた。
すべてを、メフィストの眼は見ることができた。
鉄台の鬼と、かたわらの鬼沢と。
「とうとう来たな、〈魔界医師〉」
鬼沢は鬼の顔で言った。
「おまえが絡んだと知ったときは、これでおしまいかと観念したが、今はちがう。名前通り、あの世へ送ってやるぜ、え、メフィストよ」

「発音が違う」
とメフィストは、悠然たる足取りで台の方へ近づきながら言った。
「メフィストではない。MEPHISTだ。それに、私はおまえたちと同じ地獄へはいかん」
「そうかい」
鬼沢がにっと笑った。
「やれ！」
メフィストの頭上へ白い姿が舞い降りたのは、次の瞬間だった。
白い女の手がその頭と顎を押さえても、メフィストの表情は夢のように美しかった。
「やれ。やるんだ！」
鬼沢の声に、道子＝もえは、白い肩の上でためらった。
「何をしてる？〈魔界医師〉を殺せるのは、本物の鬼だけだ。殺れ、殺るんだ。でないと、亭主は――」
「やりたまえ」
そっとメフィストは言った。
「でも――私――先生を……」
「殺すのだ。それが女の務めだ」
「殺れ！」

鬼沢が絶叫した。
女の手が激しく旋回した。
ごきり、とメフィストの首が鳴った。
その身体が崩折れた瞬間、鬼沢の身体は硬直した。
全身を光るものが巻いた。——メフィストの針金が！
愕然と、彼は破壊された戸口に立つ、もうひとつの美しい影を捉えていた。
「お初にお目にかかる」
と、ドクター・メフィストは言った。
「そして、これが最後だ」
次の瞬間——
鬼沢の全身が、ぎゅう、とすぼまり、同時に——膨れた。
燻製にするため、糸で巻かれた豚肉塊のように。
鬼沢は絶叫した。しかけた。声は出なかった。肉に食い入る鋼の痛みのせいであった。
その激痛が、じわじわと、骨へ内臓へ進行してくるのを感じても、彼は狂えなかった。
「おまえは、私の患者の家族を殺した」
とドクター・メフィストは言った。
「我が病院の門をくぐったものへの不幸が、どのような形にせよ悪意によるものである以

上、その持ち主は罰を受けねばならぬ。これが主治医の診断だ。あと三十分——苦しみ抜いて死ぬがいい。その瞬間まで、意識は確かだぞ」

そして、声もなくわななく鬼沢へは目もくれず、彼は床上の道子＝もえをふり返ったのである。

まさか、女の足元に倒れた彼が、ダミーだったとは。

「君が先行した後で呼びよせた。私より始末はしやすかったろう」

寂たる声に悪意はない。しかし、何と冷たく、何と無惨な言葉であることか。

道子＝もえの目から、再び血の糸が流れはじめた。

「見ていたのですね。わたくしが、ダミーの首を折るまで」

「その通りだ」

「夫を——夫を……診てやって下さい」

「もう済んだ」

女は台上を見て、かすかな呻きを発した。

白い——骨らしきものだけが小さな山をつくっていた。

「それで、ご主人は本当に君のもとへ戻った」

メフィストの眼の中で、女は立ち上がり、台に近づいて、その骨を胸に抱いた。

「そうですのね……本当にそうなのですわね。……これが、魔界医師の治療なのですわ

ね」
「満足してもらえたかね？」
女の首がゆっくりと上下した。それは、道子であったのか、もえであったのか。
「二度と山から降りないことだ」
「そうします。……なんて、なんて怖いところ」
「ここは〈魔界都市〉だ」
メフィストの声が終わらぬうちに、女の姿は闇に同化した。
「鬼は鬼」
天のどこからか、遠ざかりゆく声が言った。
「でも、わたくしは——人間でいたかった」
遠くで風が鳴った。
メフィストは黙然とドアの方へ歩き出した。
地上でただひとり蠢く鬼沢の断末魔になど、一瞥も与えずに。

数日後、メフィストは院長室で老僧と向かい合っていた。
「お世話になった。あの二匹も、いまは安らかに眠っておるじゃろう。ただ、うちの山に

は戻らなかったようじゃな。よほど、人間の世界が怖ろしかったものと見える。あらゆるつながりを断ちたかったのじゃろうて」

「おっしゃる通りです」

「彼らの――影響は残らんのかね？」

「ご安心下さい」

その保証にどんな裏づけがあるのか、老僧にはわからなかったが、彼は皺深い慈顔でうなずいた。

「では、失礼する」

「お達者で」

老僧が立ち去るのを見送り、メフィストはデスクに戻った。

少しして、インフォメーション・センターのブザーが鳴り、空中に婦長の厳格な顔が浮かんだ。

「木村道子の処置、いかがいたしましょう。もう二日の無断欠勤になります。近頃の若いものは――」

「残しておきたまえ」

「は？」

「戻ってくるまで、行方不明扱いだ。給与は口座へふり込みつづけたまえ」

婦長はすぐさま黙礼した。
「承知いたしました」
「ご苦労」
婦長が消えると、メフィストは、何となく疲れたような顔でデスクの書類に眼を落とした。
また、ブザーが鳴った。
今度は——ドアの外からだ。
「何だね？」
冷淡な声に、
「せんべい屋です」
澄んだ声が応じた。
不思議な感情の色が、白皙（はくせき）の顔をかすめた。
長い旅の果てに、ようやく故郷の街へ帰り着いた旅人のように。
しかし、すぐにそれを消し、あくまでも氷の冷ややかさを顔上に湛（たた）えて、
「入りたまえ」
と、〈魔界医師〉は、闇色の声で言った。

解説

メフィスト狩り

朝松健

魔界医師メフィスト。
魔術師にして医師。
類い稀なる美貌と、大いなる悪魔の名を併せ持った謎の男。
ここに筆者は魔界都市〈新宿〉に隠秘学的興味を持つオカルティストとして、かれの背景を探ってみることにしよう。ひょっとすると、そこに照射された結論にこそ、魔界都市の謎を解く鍵が秘められているかもしれない、と直感するからだ。
まず、注目すべきは、かれの名である。
ドクター・メフィスト。——これが、メフィストフェレスの略であろうことは疑問の余地はない。メフィストフェレスとは、十六世紀にヨーロッパを放浪し、ルネッサンス期の文化人や政治家に（良きにつけ悪しきにつけ）影響を与えた魔術師ヨーハン・（ゲオルギ

ウス）・ファウストゥス博士と契約し、その魂を遂に奪ったことで知られる大悪魔である。メフィストの名が初めて活字になったのは、一五八七年、フランクフルトのヨーハン・シュピースが公刊した民衆本『実伝ヨーハン・ファウスト博士』が最初であった。

ここにおいて、メフィストフェレス（Mephistopheles）は、メフォストフィリス（Mephostophilis）と表記されている。

これはギリシア語の mē（否定形）、phōs（photos 光）、philos（愛する者）の三語より成る名前で、その意味は 'not light living' すなわち「光を愛さない者」となる。この名は、そのまま、ルシファー（Lucifer＝光をもたらす者）に対峙する存在として、またパロディとしての性格を表わしている。語末の philos が philēs に変化したのは、標準ギリシア語の慣用に従ったためで、深い意味はなかろう。ただし、シェイクスピアは『ウィンザーの陽気な女房たち』において、Mephistophilus とラテン語の語形を用いている（同戯曲 I、i、117）。

J・B・ラッセルは、その著『メフィストフェレス』において、「Mephost- が Mephist- に転じたのは、ラテン語の mephitis（刺激のある、硫黄の、悪臭のある）に引かれたものであろう」と述べている（野村美紀子訳／邦書58頁／教文館）。ちなみに、硫黄や悪臭は中世悪魔学において、悪魔の属性と考えられていたためで、別にメフィストがそのような臭いを帯びていた訳ではない。

一方、ドイツの象徴学者マンフレッド・ラーカーは、その著“Dictionary of Gods and Goddesses, Devils and Demons”において、「その名はヘブライ（ヘブル）語のmephir（破壊者）とtophel（虚言者）が語源であろう」と定義している。

いずれにせよ、ここに、メフィストなる存在の秘密や性格が、その名前に隠されていることを我々は記憶しておくべきだろう。

○光を愛さない者（ルシファーの対峙者）

○刺激のある者

○破壊者にして虚言者

さらに、アト・ド・フリースが『イメージ・シンボル事典』（大修館）でメフィストの象徴として挙げた次の三項目も特記せねばなるまい。

「②独立と真の自己を獲得するため、全なるもの（the All＝神）から離脱した魂の否定的な側面。③ゲーテの『ファウスト』では両性具有者。④狡猾さ、冷笑的な態度」

これらもまた、我等が〈新宿〉のメフィストにも見られる特性ではないか。

旧区役所を勝手に病院として使用し、クローン人間を大量に生産し、興味や学術的好奇心が赴けば、己を実験台にすることさえ辞さぬ、女子高生たちの言う「おちゃめな」メフィスト像と完全に一致してしまうのである。

ところで、独文学者の種村季弘氏は『悪魔礼拝』（河出書房）で次のように言及してお

られる。

「メフィストもまたファウストの魂と引き替えに地上の財宝を授けてさえくれる。契約によって堕落に誘いはするが、この悪人の誘惑はあらかじめ神の承認を得ているのである。（中略）それゆえにメフィストフェレスは神の絶対的反像ではなく、神自身が人間の試煉のために派遣した神の暗い部分であるにすぎない。メフィストフェレスの方も神と決定的な敵対関係を結ぶことを望んではいない。（中略）要するにゲーテの悪魔はすこぶるトリックスター的であって、（中略）神との契約につながれている限り無害な悪魔である」（同書210～211頁）

トリックスター。

これこそ、〈新宿〉のメフィストの矛盾に満ちた言動の謎を解く、秘密の呪文ではないか。

魔界都市〈新宿〉において、ドクター・メフィストは、トリックスターなのである。それゆえ、かれの介入によって事態はややこしい方向にこじれ、人間関係は険悪化し、常識に縛られたギャングどもは自滅せねばならないのだ。

が、どうして、悪魔が医師なのか？　医師というのならば、むしろ、ファウストの名を名のるべきではないのか。

（もっと正確を期すなら、ドクター・パラケルススと名のるべきである）

一部の穿鑿好きのマニアが、そう問う声が聞こえる。

しかし、メフィストは、そんな連中に冷たい笑みを投げかけるであろう。

恐るべきことに、その名にはラテン語のMephitisとmephitisが秘められているのだ。大文字のMで始まるメフィティスは、ローマ時代、サムニヌウムの南方に住んでいたヒルピニ人の女神である。この女神は、人間に宿った毒気を払う神性として崇拝された。一方、小文字のmで始まるメフィティスとなると、これは「毒気、悪気」の意味となる。

つまり、「毒気を帯びた治療者」という矛盾したメフィストの性格が、これによって証明されるのである。

ちなみに「魔界都市〈新宿〉」（ソノラマ文庫）で、初めて登場した時、メフィストは「足首まで覆う黒ケープとトックリのセーターにスラックス、すべて黒一色で統一した」（同書94頁）姿であった。

これはメフィスト自身が、前述のシュピース本に準じたスタイルをとったものであろう。シュピース本において、悪魔は「修道士のなりをして」はいってくるのである。

さらに、時折、メフィストが時空を超越した出現を見せる謎は、カール・ジムロック編『人形芝居ヨハネス、ファウスト博士』の第二幕第一場の次のような台詞が説明してくれよう。

ファウスト　で、一体おまえはどれだけ速い。
メフィストフェレス　人の思いの速さです。
（『ファウスト博士　付人形芝居ファウスト』206頁　松浦純訳／国書刊行会）

他の事件において、メフィストが登場するたびに、純白のマントを着ていたり、ワイン・レッドのコートをまとっていたりするのは、その時々の事件に秘められた魔術的象徴が異なるためと考えられる（色彩と魔術的象徴については、アレイスター・クロウリー『777の書』〈江口之隆／国書刊行会〉を参照せよ）。

それにしても、ドクター・メフィストの謎を解く緒は、未だに見つからない。この小文を草するにあたり、筆者は一週間もの日数を費し、二十冊になんなんとする邦書洋書を渉猟したのに、何ということであろう。これでは、まったくの無駄骨ではないか。……と思って、もう一度、資料を読み返したところ、ひとつの疑問にいきあたった。

メフィストフェレスが、ルシファーの対峙者ならば、神の僕なのか。ならば、どうしてかれは十六世紀の悪魔学において「王ルシファー　副王ベリアル　知事サタン、ベールゼバブ、アスタロス、プルート」の下で「大公アッティール」と並んで記録されているのだろう。

ルシファーやサタンはともかく、ベリアルやベールゼバブ、アスタロス、プルート、ア

ツィールなどはキリスト教以前の時代、民衆に神として崇拝された存在であった。いわばキリスト教によって悪魔に堕落させられた神々なのだ。

ならば、メフィストも、もとは異教的な神々の一人であったのだろうか？

なんと、そのヒントは、隠秘学者フレッド・ゲッティングの“Dictionary of Demons”（Trafalgar Square）にあった。

ゲッティングは、根拠を示すことなく、さらりとこう述べているのだ。

「（ルドルフ・）シュタイナーは、メフィストはアーリマンである、と主張している」

ああ……。今度はゾロアスター教まで遡らねばならないのであろうか。

筆者のメフィスト狩りは、まだ端緒についたばかりなのである。

……ドクター・メフィストとは、そもそも何者なのか？　私も興味をもって、彼の登場する作品をあれこれひっくり返してみるのだが、いまひとつわからない。

——菊地秀行

一九八八年十一月本書は、カドカワノベルズとして刊行されたものを文庫化したものです。

（編集部）

魔界医師メフィスト

菊地秀行



角川文庫 8816

平成五年二月十日　初版発行

発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話　編集部(〇三)三八一七—八四五一
営業部(〇三)三八一七—八五二一
〒一〇二　振替東京③一九五二〇八
印刷所——暁印刷　製本所——本間製本
装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

き 8-10　ISBN4-04-166410-1　C0193

角川文庫発刊に際して

角川源義

第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であった以上に、私たちの若い文化力の敗退であった。私たちの文化が戦争に対して如何に無力であり、単なるあだ花に過ぎなかったかを、私たちは身を以て体験し痛感した。西洋近代文化の摂取にとって、明治以後八十年の歳月は決して短かすぎたとは言えない。にもかかわらず、近代文化の伝統を確立し、自由な批判と柔軟な良識に富む文化層として自らを形成することに私たちは失敗して来た。そしてこれは、各層への文化の普及滲透を任務とする出版人の責任でもあった。

一九四五年以来、私たちは再び振出しに戻り、第一歩から踏み出すことを余儀なくされた。これは大きな不幸ではあるが、反面、これまでの混沌・未熟・歪曲の中にあった我が国の文化に秩序と確たる基礎を齎らすためには絶好の機会でもある。角川書店は、このような祖国の文化的危機にあたり、微力をも顧みず再建の礎石たるべき抱負と決意とをもって出発したが、ここに創立以来の念願を果すべく角川文庫を発刊する。これまで刊行されたあらゆる全集叢書文庫類の長所と短所とを検討し、古今東西の不朽の典籍を、良心的編集のもとに、廉価に、そして書架にふさわしい美本として、多くのひとびとに提供しようとする。しかし私たちは徒らに百科全書的な知識のジレッタントを作ることを目的とせず、あくまで祖国の文化に秩序と再建への道を示し、この文庫を角川書店の栄ある事業として、今後永久に継続発展せしめ、学芸と教養との殿堂として大成せんことを期したい。多くの読書子の愛情ある忠言と支持とによって、この希望と抱負とを完遂せしめられんことを願う。

一九四九年五月三日

角川文庫ベストセラー

無印失恋物語
群ようこ
別れの涙がいちばんきれい！　明るいハートブレイク・ストーリー。

愛をする人
堀田あけみ
決して結ばれることのない愛、切ない愛を綴った恋愛物語。

クリスマス・イヴ
内館牧子
イヴを素敵な日にしたい、あなたへ!!　もつれにもつれる恋模様。

恋愛という綺麗な形
水上洋子
自分を正視し恋愛に向き合う四人の女性の美しく切実な選択。

夜のチョコレート
森　瑤子
エレガントな大人の女になるための、28のマニュアル。贈ります！

ローマの休日　小説ロマンチック洋画劇場
林真理子
12の映画をモチーフにした、心おどらせ胸つまらせる恋愛小説集。

角川文庫ベストセラー

N・P
吉本ばなな

激しい愛が生んだ奇跡を描く、吉本ばななの傑作長編。解説・村上龍。

プールサイド
北原リエ

「14歳の初夏、私は発情していた」大人になるための愛の授業。

シュガーコオトを着た娘
中平まみ

恋愛がもたらす至福と、ひりつくような孤独の叫び。痛切な恋愛小説。

瑠璃色の時間
香咲弥須子

明日を切りひらこうとする郁子の旅立ち。瑞瑞しい青春小説。

スターダスト
神津カンナ

小物。その悲しみと喜びの手ざわりから、真摯な愛を描く10話。

放課後の音符（キイノート）
山田詠美

〝わたし〟にならなければ、恋も、友達を愛することもできない。

角川文庫ベストセラー

パステル学園大乱戦

清水義範

平和な学園に忍び寄る暴力団の黒い噂……。痛快学園SF小説!!

丸太の鷹

火浦　功

生きててよかった——あの〝C調バイブレーション〟第二弾!

翔んでる殺し屋

胡桃沢耕史

美しき殺し屋たちの華麗な活躍! 新感覚ポップ・ミステリー。

オホーツク青春医者物語

志賀　貢

流氷の海を背景に描く、愛と感動の医者物語。「流氷の人」他二作。

セビロとルージュと秘密の手紙

村上　龍

書き下ろし小説+村上龍の〝熱い言の葉〟のPOST・CARD

ルビー・カイロ

角川映画化

D・チール
山崎洋子訳

迷路の出口は愛か死か。消えた夫を追い、ベッシーは世界を駆け巡る。

角川文庫最新刊

悪の華

赤川次郎

悪には悪の掟がある!! 悪の哀しさと友情を描いた傑作サスペンス。

赤かぶ検事奮戦記28 迷宮の死者

和久峻三

赤ん坊誘拐事件が代理母、脳死問題に発展! 人気シリーズ四作収録。

フラミンゴたちの朝

J・リー・バーク
大久保寛訳

地獄に棲むものの魂は浄化されるのか。ネオ・ハードボイルドの傑作。

顔を返せ (上)(下)

K・ハイアセン
汀一弘訳

インチキ整形外科医と人殺し捜査官の息詰まる闘い!

ハイサイド

泉優二

挫折したGPライダーの熱い最後の挑戦!! 感動のレース・ロマン。

大帝の剣 天魔の章 巻ノ弐 妖魔復活編

夢枕獏

謎の娘・蘭をめぐり妖異な闘いは激しさを増す。超時代伝奇ロマン。

角川文庫最新刊

空想列車 (上)(下)
阿刀田高
他人の空想を取り込んでしまった四人の女達。男と女の不透明な時間。

海辺の扉 (上)(下)
宮本　輝
愛しい人の〈生命〉の再生を願う人生の道のりを描く、傑作長編。

千姫様
平岩弓枝
花のごとく——千姫の情熱にあふれる生涯を描く傑作長編時代小説。

残照 ブラディ・ドール⑦
北方謙三
青年は生きるけじめを求めた。男は生きた証を刻もうとした——。

東京ナイトクラブ
景山民夫
抜群の発想と感度。12の短編が造り出す爽快な知的冒険の宇宙。

カラー版
田辺聖子の**小倉百人一首** (上)(下)
田辺聖子
しなやかな鑑賞、岡田嘉夫の斬新なイラストで贈る一大歌絵巻。

角川文庫最新刊

ぼくらのメリークリスマス
宗田　理

友情、冒険、笑いがあふれる「ぼくらシリーズ」クリスマス決戦！

湿地帯
清水一行

巨大な利権と薄汚い駆け引きが渦巻く永田町。企業献金の裏を暴く！

徳川武芸帳 柳生三代の剣
吉田　剛

柳生新陰流父子三代の壮絶な生きざまを描く歴史巨編。

沈まぬ太陽ニッポン ――豊かさとの闘い――
ポール・ボネ

人は変われど国は変わらず。複合不況にも強い〝日本〟の秘密とは？

サヨナラおもちゃ箱
谷山浩子

リリコの〈愛〉を捜す旅――。あなたのためのファンタジー童話!!

人形たちの椅子
赤川次郎

平凡なOLが仕事と恋に揺れながら、〝会社〟という組織に挑む。

角川文庫最新刊

白き鷹の荒野（上）（下）

R・ラドラム
篠原　慎訳

奪われた土地を取り戻せ！　元将軍とインディアンが立ち上がった。

騙し屋

F・フォーサイス
篠原　慎訳

かつて世界を動かした男たちの栄光と悲哀。最後のスパイ小説。

アスファルトの虎
PARTⅨ　滾る肉体の受難曲

大藪春彦

政財界の首領・闇将軍田口元首相が再起不能に!?　堂々の第九弾!!

惨殺の金曜日

和久峻三

有罪か？　無罪か？緊迫感あふれる傑作法廷サスペンス。

新・一茶捕物帳
――三日月に哭く――

笹沢左保

ニューヒーロー誕生！若き日の一茶〝涙の弥次郎兵衛〟の名推理。

妖夢編　宇宙皇子1
時よ、ゆるやかに

藤川桂介

夢幻の旅を終えて、皇子は再び明日香の里へ。第三期妖夢編開幕！

C00

角川文庫最新刊

売国奴の持参金

F・フォーサイス
篠原　慎訳

亡命者の真意は何か？マクレディ・シリーズ四部作第二弾！

新訳　アーサー王物語

T・ブルフィンチ
大久保博訳

アーサー王と騎士たちが繰り広げる、壮大な冒険とラヴ・ロマン。

ブラディ・ドール⑧　鳥影

北方謙三

生命を賭けても守らねばならぬもの――よるべなき男の誇り。

大統領の刺客

柘植久慶

生き残る者は誰か――！類稀な実体験を基に描く書下し国際冒険小説。

凶戦士　愛

高千穂遙

洗脳され完璧な戦士となった愛。スリリングなスーパーアクション。

魔界水滸伝18

栗本　薫

混沌からの覚醒。既視感（デジャ・ビュ）を抱き次元を転移してゆく彼は――。